大館市文化財調査報告書　第４集

大館市内遺跡詳細分布調査報告書（２）

２０１１・３

秋 田 県 大 館 市 教 育 委 員 会

大館市文化財調査報告書　第４集

大館市内遺跡詳細分布調査報告書（２）

２０１１・３

秋 田 県 大 館 市 教 育 委 員 会

序

埋蔵文化財は、大館市はもとより我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠な財産です。そのため当教育委員会は、埋蔵文化財の調査及び研究、保護思想の普及等の事業を行っています。

本書は、平成20年度から平成22年度まで当委員会が実施した遺跡詳細分布調査の結果をまとめたものです。遺跡の分布調査及び試掘確認調査は、各種の開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るための基礎となるものです。

これらの調査に御理解、御援助をいただきました関係各位に厚く感謝申し上げますとともに、今後とも、なお一層の御指導、御協力をお願い申し上げます。

平成23年３月

大館市教育委員会
教育長　高　橋　善　之

例　　言

1．本書は、大館市教育委員会が実施した市内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2．調査は、平成20～22年度の国・県の文化財保存事業補助金を受け、実施した。調査と整理の体制は第１章に記した。
3．本書の作成にあたり、遺跡周辺図、遺構位置図、遺構図の作成は、滝内　亨（郷土博物館主任）、嶋影壮憲（同主任主事）、田中節子（同臨時職員）が行った。土器・土製品実測図は川田淳子（同臨時職員）、高橋昭悦（同臨時職員）、藤原夏美（同臨時職員）、嶋影が作成し、石器・石製品の実測は川田、滝内、嶋影が作成した。遺物写真撮影は、滝内、山内常代（郷土博物館非常勤職員）が担当した。
4．本書は、滝内の協力及び板橋範芳前郷土博物館長の助言を得て、嶋影が執筆・編集した。
5．本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行の1／25,000地形図・１／50,000地形図、並びに秋田県教育委員会発行の秋田県遺跡地図（北秋田地区版）、大館市役所発行の「都市計画図　1／2,500」である。
6．本書で利用する緯度・経度は、世界測地系である。
7．本調査で出土した遺物並びに記録類は、大館郷土博物館で保管している。
8．整理作業には、緊急雇用創出臨時基金対策事業を活用した。
9．調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導、御協力をいただきました。記して感謝申し上げます（順不同、敬省略）。
宇田川浩一、鷹嘴勇二
秋田県教育庁生涯学習課、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県北秋田地域振興局農林部、
大館市総務部企画調整課、大館市産業部農林課、大館市建設部土木課、大館市建設部下水道課、
佐藤吉株式会社、白川建設株式会社、積水ハウス株式会社、瀬下建設工業株式会社、羽沢建設株式会社、有限会社吉田興業

凡　　例

１．本書遺構図等における各基準は、下記のとおりである。なお、その都度スケール・方位・凡例等を示す。

略記号・縮尺

調査位置図	1：1,000	1：2,000
竪穴住居跡・竪穴状遺構（ＳＩ）	1：40	
土坑（ＳＫ）	1：20	
溝跡（ＳＤ）	1：40	1：200
柱穴・柱穴様ピット（ＳＰ）	1：40	
焼土（ＳＬ）		
その他（ＳＸ）		
土層柱状図	1：40	

なお、調査位置図において、テストピットは番号のみを付し、トレンチは番号の前にＴの記号を付して表記した。

図の方位

北は図面天方向に合致する。例外についてはその都度方位を示す。

遺構図等の標高

遺構平面図・断面図等の標高値は、海抜高度による。単位はメートル。

遺物の実測図及び写真図版の縮尺

土器、礫石器実測図	1：3	1：4
剥片石器、土・石製品実測図	1：2	
銭貨拓図	1：1	
写真	任意	

２．一覧表における遺構の規模のうち、確認面、底面の項については、長径×短径で表した。単位はメートル。

３．本書における遺物の分類基準の概要は以下のとおりである。

土器（Ｐ）

１群　貝殻・沈線文系土器群
２群　縄文時代前期土器群
３群　陸奥大木系土器群
４群　縄文時代後・晩期土器群
５群　弥生時代の土器
６群　土師器
７群　須恵器
８群　陶磁器類

石器（Ｓ）

１群　石器
　１類　ポイント類
　２類　石錐類
　３類　ナイフ・スクレイパー類
　４類　部分的な刃部をもつ剥片類
　５類　石斧類
　６類　擦石・敲石類
　７類　砥石・石皿・台石類
２群　剥片
３群　石核
４群　礫

目　　次

序 …… i
例言 …… ii
凡例 …… iii
目次 …… iv
第１章　調査の概要 …… 1
　1　調査の目的 …… 1
　2　調査要項 …… 1
　3　調査の方法 …… 3
第２章　大館地区の調査 …… 7
　1　扇田道下遺跡隣接地及び扇田道上遺跡 …… 7
　2　鍛冶屋敷遺跡 …… 10
　3　扇田道下遺跡隣接地 …… 23
　4　本宮地区 …… 26
　5　釈迦内地区 …… 28
　6　上代野地区 …… 30
　7　川口・立花地区（川口十三森遺跡） …… 32
　8　花岡地区 …… 39
　9　芋掘沢遺跡隣接地 …… 41
　10　川口館跡 …… 44
　11　餅田地区 …… 47
　12　根下戸道下遺跡隣接地 …… 49
　13　福館橋桁野遺跡隣接地 …… 52
　14　矢立廃寺跡 …… 55
第３章　比内地区の調査 …… 60
　1　長岡城跡 …… 60
　2　只越下遺跡 …… 67
　3　白沢水沢地区 …… 72
　4　小坪沢地区 …… 74
　5　中野地区 …… 76
　6　味噌内館下遺跡 …… 78
　7　八木橋地区① …… 84
　8　八木橋地区② …… 86
第４章　田代地区の調査 …… 88
　1　赤川遺跡隣接地 …… 88
報告書抄録 …… 92

第１章　調査の概要

1　調査の目的

大館市内には、現在281箇所の埋蔵文化財包蔵地（以下「包蔵地」）が確認されている。大館市教育委員会は、平成15年度より文化財保存事業補助金を受け、市内に所在する包蔵地の所在・確認調査を実施している。これまでの調査で11遺跡14地区、延べ25箇所について調査を実施し、遺跡の内容把握に努めてきた。

今回（平成20～22年度）の調査は、土地所有者の協力が得られた次頁の遺跡、地区について実施した。調査を実施した地区の遺跡名、所在地、調査面積、調査期間等は表１に示すとおりである。

2　調査要項

⑴　調査体制

教育長	仲澤鋭蔵	（平成22年３月31日まで）
教育長	高橋善之	（平成22年４月１日より）
教育次長	斎藤貢一	（平成21年３月31日まで）
教育次長	大友隆彦	（平成21年４月１日より）
社会教育課長	斎藤まき子	（平成22年３月31日まで）
（平成21年４月１日より生涯学習課）		
生涯学習課長	名村伸一	（平成22年４月１日より）
社会教育課主幹		
兼郷土博物館長	板橋範芳	（調査担当）（平成22年３月31日まで）
郷土博物館長	松田誠行	（平成22年４月１日より）
文化財保護係長	成田　茂	
文化財保護係	滝内　亨	（調査担当）
同	嶋影壮憲	（調査担当）

⑵　調査期間

現地調査	自：平成20年９月４日	至：平成23年２月３日
整理作業	自：平成20年12月11日	至：平成23年３月31日
調査面積	1233.25㎡	

表１　詳細分布調査一覧

事業	登載番号	遺跡（地区名）	調査地	調査対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	調査期間	報告
平成20年度							
大館市 公共下水道	4-65, 4-140	扇田道下遺跡隣接地及び扇田道上遺跡	東台３丁目84-5ほか	293	16	9/4～5	2-1
秋田県地域振興局 圃場整備	4-32	鍛冶屋敷遺跡	沼館字鍛冶屋敷29-2ほか	12000	255	9/30～10/31	2-2
携帯電話 無線基地局	4-65	扇田道下遺跡隣接地	扇田道下6-9	220	30.25	11/11～12	2-3
		本宮地区	本宮字上ミ野68-2	100	20	11/13～14	2-4
個人 ケアハウス建設	12-17	長岡城跡	比内町扇田字長岡45ほか	8400	125	11/27～12/5	3-1
携帯電話 無線基地局		釈迦内地区	釈迦内字台野道上56-1	100	29	2/10	2-5
計					475.25		
平成21年度							
携帯電話 無線基地局		上代野地区	上代野字八幡岱54-1ほか	120	20	4/24～25	2-6
大館市 公共下水道	15-3	赤川遺跡隣接地	岩瀬字横道下91-1ほか	194	14	7/29	4-1
大館市 市道釈迦内松木立花線	4-166	川口・立花地区 （川口十三森遺跡）	川口字十三森125ほか、立花字塚ノ下24-4ほか	6400	210	8/20～9/10 12/11～15	2-7
携帯電話 無線基地局	12-48	只越下遺跡	比内町味噌内字只越下2-1	36	20	8/25	3-2
大館市 携帯電話等エリア整備		白沢水沢地区	比内町白沢水沢字堤下10	336	33	10/15	3-3
		小坪沢地区	比内町小坪沢字屋敷岱21-1	441	15	10/16	3-4
携帯電話 無線基地局		中野地区	比内町中野字前田尻73	324	60	10/27～29	3-5
秋田県地域振興局 圃場整備	4-32	鍛冶屋敷遺跡	沼館字鍛冶屋敷31ほか	48000	152	11/26～12/18	2-2
計					524		
平成22年度							
携帯電話 無線基地局		花岡地区	花岡町字二井山151-1	49	12	4/20～21	2-8
大館市 公共下水道	4-125	芋掘沢遺跡隣接地	餅田二丁目141-2ほか	234	13	4/23・28、6/15	2-9
個人住宅建替	4-42	川口館跡	川口字長里98	126	16	7/6	2-10
大館市 公共下水道	12-49	味噌内館下遺跡	比内町味噌内字館下7ほか	223	101	9/14、11/9～30、12/10	3-6
携帯電話 無線基地局		餅田地区	餅田一丁目114-1	324	16	9/15	2-11
大館市 公共下水道	4-126	根下戸道下遺跡隣接地	根下戸新町103-1ほか	201	13	9/15、2/3	2-12
携帯電話 無線基地局	4-13	福館橋桁野遺跡隣接地	釈迦内字長者森35	244	8	11/5	2-13
携帯電話 無線基地局		八木橋地区	比内町八木橋字中岱56-5、字水沢口2-1	297.5	12	11/26～12/2	3-7・8
遺跡整備	4-4	矢立廃寺跡	白沢字松原		43	12/7～11	2-14
計					234		
合計					1233.25		

3　調査の方法

⑴　野外調査

野外作業は、調査対象地に任意でテストピット・トレンチを設定し、盛土、撹乱土、耕作土をバックホーまたは人力で除去した後、遺物包含層を人力で掘削する方法で実施した。出土遺物は、遺構毎ないしテストピット・トレンチ毎、層位毎に取り上げた。

⑵　整理作業

整理作業については、水洗、分類、注記の一次整理の後、遺物の細分類、接合等の二次整理を行った。また、並行して野外調査で得られた記録類の整理等も行った。遺物の実測については、例言で述べたとおり、土器・土製品実測図は川田淳子（郷土博物館臨時職員）、高橋昭悦（同臨時職員）、藤原夏美（同臨時職員）、嶋影が作成し、石器・石製品実測図は川田、滝内、嶋影が作成した。遺物写真の撮影については、滝内、山内常代（郷土博物館非常勤職員）が担当した。なお、遺物の整理作業には緊急雇用創出臨時基金対策事業を活用した。

図１　調査遺跡位置図（大館地区）

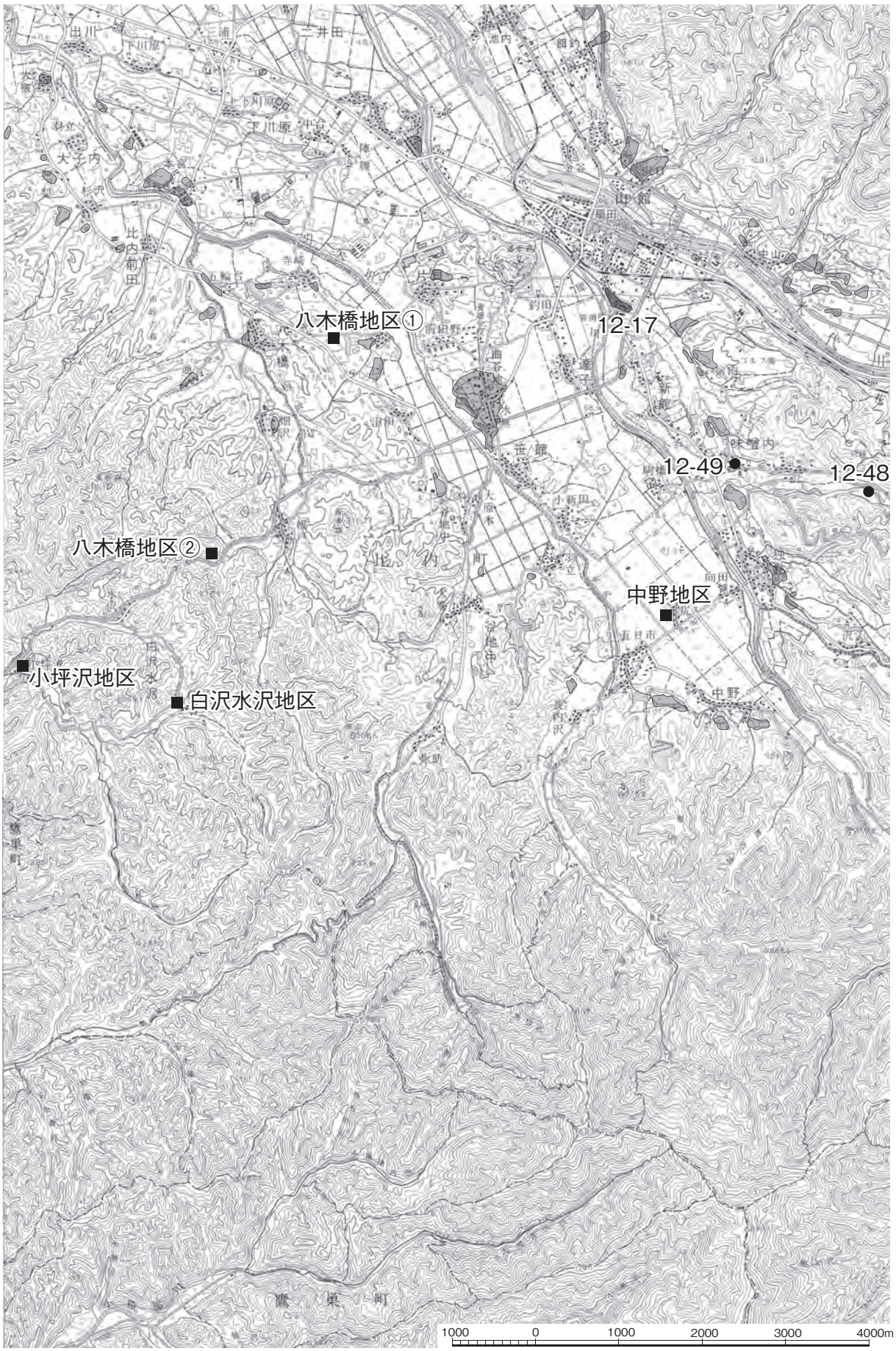


図２　調査遺跡位置図（比内地区）

図３　調査遺跡位置図（田代地区　１：25,000）

第２章　大館地区の調査

１　扇田道下遺跡隣接地及び扇田道上遺跡（公共下水道）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

大館地区に分布する遺跡の多くは大館段丘上に分布している。大館段丘は、大館盆地の中央部に舌状に張り出した地形をなし、その規模は東西６㎞、南北２～３㎞ほどである。大館段丘の南側には、多くの沢が発達し、丘陵を開析する。それらの沢の一つの上流両岸に扇田道下遺跡と扇田道上遺跡は所在する。

扇田道下遺跡は、平成元年度に市教委が実施した試掘調査により発見された縄文・平安時代の遺物包含地である。秋田県教育委員会登載番号は204-4-65である。遺跡の位置は、北緯40度15分47秒、東経140度34分17秒、標高は海抜65～69ｍである。本遺跡は、市教委が平成２年度に本発掘調査を実施している。この調査では、68棟の竪穴住居跡及び建物跡が確認されている。

扇田道上遺跡は、平成元年頃に市教委の板橋範芳（当時）が実施した分布調査により発見された平安時代の遺物包含地である。秋田県教育委員会登載番号は204-4-140である。遺跡の位置は、北緯40度15分45秒、東経140度34分36秒、標高は海抜70ｍである。本遺跡における本発掘調査の履歴はなく、周辺地域での試掘調査も実施されていない。

扇田道下及び扇田道上遺跡の周辺には、北西約１㎞のところに大館城跡と金坂遺跡、南西約0.8㎞に萩ノ台Ⅰ・Ⅱ遺跡、西約1.5㎞に小館花館跡と小館町遺跡が分布している。

⑵　調査の内容

今回の調査は、扇田道下遺跡に隣接する地区（Ａ地区）と扇田道下遺跡の北西部にあたる地区（Ｂ地区）について実施した。Ａ地区とＢ地区の現況は道路である。調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。

Ａ地区では、４個のテストピット（以下「ＴＰ」）を設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び黒色腐植土層の残存状況等を調査した。調査の結果、黒色腐植土層は消失し、遺構･遺物は確認されなかった。

Ｂ地区は、住宅地前の生活道路として利用されている場所である。Ｂ地区では、４個のテストピットを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。Ｂ地区は、道路工事により包含層はほとんど残存していなかった。全体に盛土が20cmに及ぶ。この箇所からは、ＴＰ３より柱穴様ピット１個を検出したが、遺物は確認されなかった。ＴＰ４は河川跡と推測され、黒色土が厚く堆積していた。

⑶　遺構

Ｂ地区ＴＰ３より柱穴様ピット１個を検出したが、住居跡などの遺構が確認されず、用途等は不明である。

図４　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

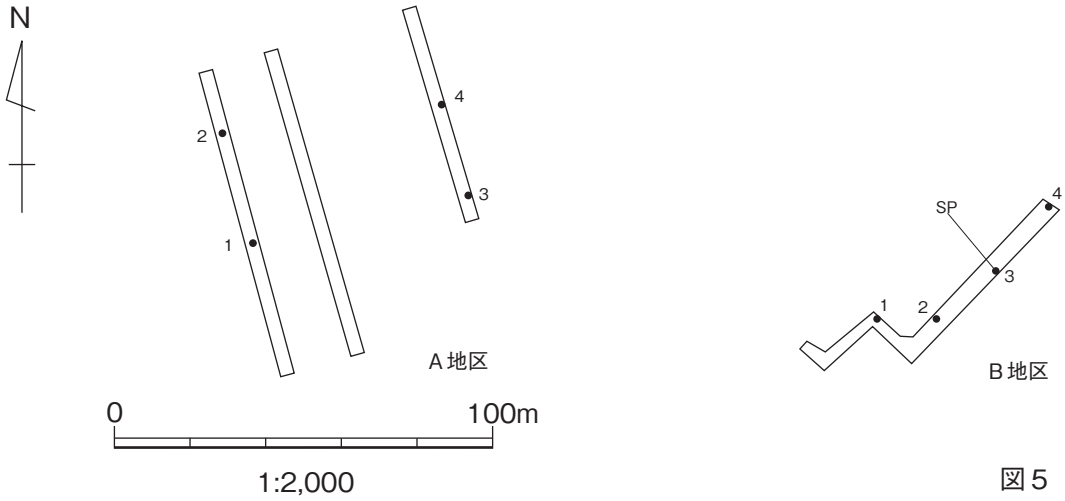


図５　調査位置図

⑷　調査の結果

今回は、Ａ地区では遺構･遺物は発見できず、Ｂ地区の扇田道上遺跡内にあたる箇所から柱穴様ピット１個が発見されたのみである。したがって、調査地内が遺跡のエリアに入るとは考えがたい。

以上のように地形・土層等から見た調査の結果、今回の調査対象地内には遺跡が存在する可能性は低く、本発掘調査は不要と判断した。

Ａ地区近景

Ａ地区1 調査状況

Ｂ地区3 調査状況

Ｂ地区4 調査状況

図版１　調査状況

２　鍛冶屋敷遺跡（圃場整備）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

鍛冶屋敷遺跡は、大館盆地を南西に流れる「下内川」の下流右岸に所在する。本遺跡は、古くからその存在が知られている縄文時代の遺物包含地である。秋田県教育委員会登載番号は204-4-32である。遺跡の位置は、北緯40度17分39秒、東経140度32分11秒、標高は海抜50～70mである。

本遺跡における本発掘調査の履歴はない。鍛冶屋敷遺跡の周辺には、沢を挟んだ対岸に下堤沢遺跡が分布している。

⑵　調査の内容

今回の調査は、遺跡の南側及び南東側隣接地について実施した。調査箇所の現況は、畑地及び水田である。調査地内の基本層序は、畑地（Ａ・Ｃ地区）と休耕田（Ｂ地区）では、基盤をなす黄褐色～暗褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。水田部分（Ｄ地区）は、基盤をなす灰色粘土層上に水分を多く含む黒色土が堆積している。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土及び耕作土。

Ⅱ層　黒色～暗褐色土の色調を示す腐植土層で、平安時代の遺物包含層である。本層は、その色調によりａ～ｃに細分される。

　Ⅱａ層　黒色の色調を示す土層。

　Ⅱｂ層　黒色～黒褐色の色調を示す土層。

　Ⅱｃ層　黒色の色調を示す土層。

Ⅲ層　褐色の色調を示す土層。

Ⅳ層　黒色の腐植土層である。縄文時代の遺物包含層である。本層は、その色調によりａ・ｂに細分される。

　Ⅳａ層　黒色の色調を示す土層。

　Ⅳｂ層　黒色～黒褐色の色調を示す土層。

Ⅴ層　黒褐色の色調を示す土層。Ⅳ層とⅥ層の漸移層である。

Ⅵ層　褐色粘土層。

Ⅶ層　暗褐色～灰色粘土層。グライ化して青灰色を呈する箇所も見られた。

Ⅷ層　礫層。

Ⅸ層　暗褐色の砂層。

Ａ～Ｃ地区では、９本のトレンチ（以下「ＴＲ」）と15個のテストピット（以下「ＴＰ」）を設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、ＴＲ２より土坑１基と溝跡１条、柱穴３個、ＴＲ３より焼土１箇所と柱穴４個、ＴＲ５より溝跡１条と柱穴12個、ＴＲ６より柱穴２個、ＴＲ７より柱穴３個、ＴＲ８より住居跡３軒と土坑３基、溝跡２条、多数の柱穴、遺物は土器片446点、石器類85点、鉄滓２点を得た。

Ｄ地区の北西側については、３本のトレンチと１個のテストピットを設定し、掘開・調査した。水田に当たる箇所は、黒色腐植土層が良好に残存するものの、水田北端の部分では、削平により黒色腐植土層はほとんど残存していなかった。出土遺物は土器片７点、石器類27点である。この地区から遺

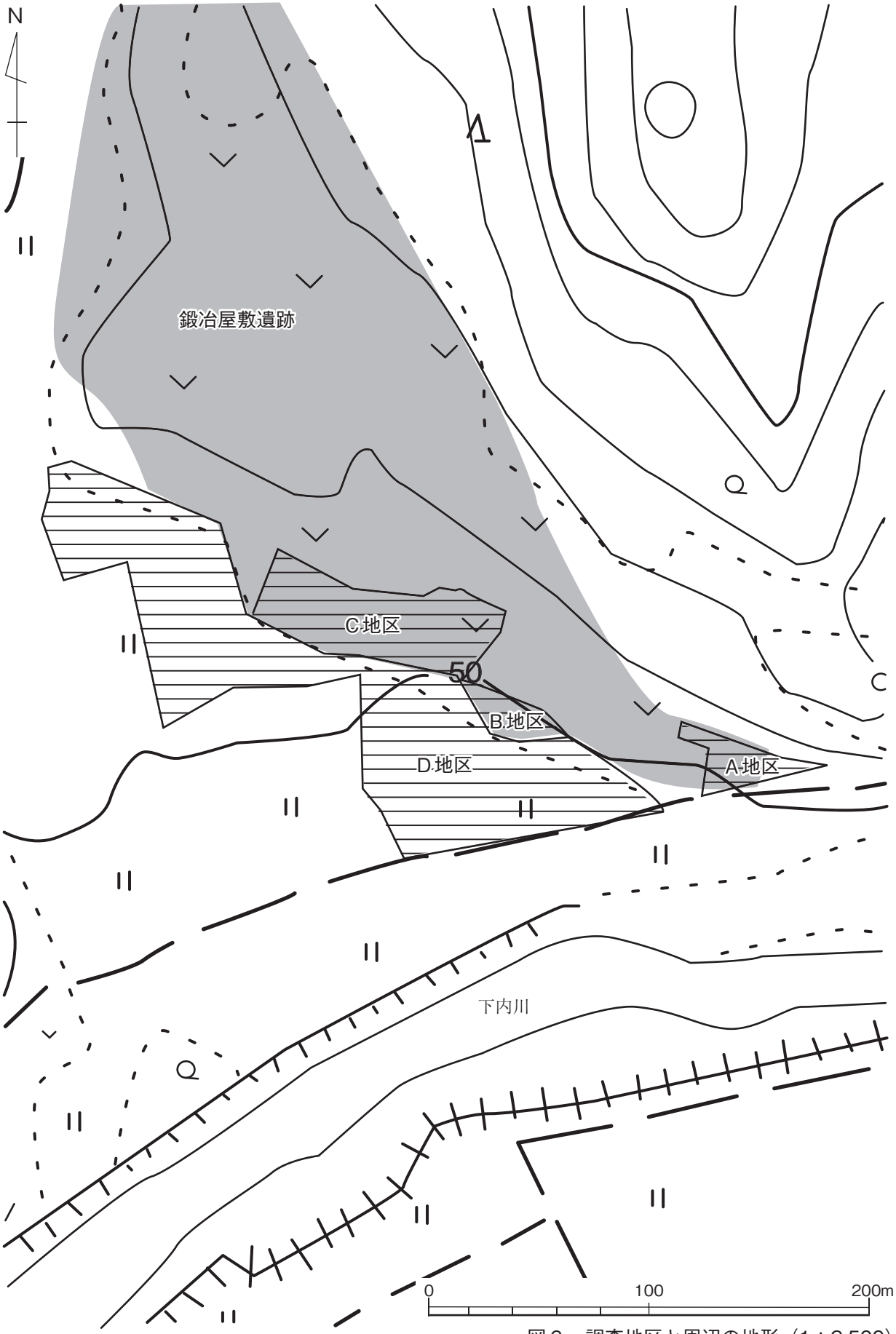
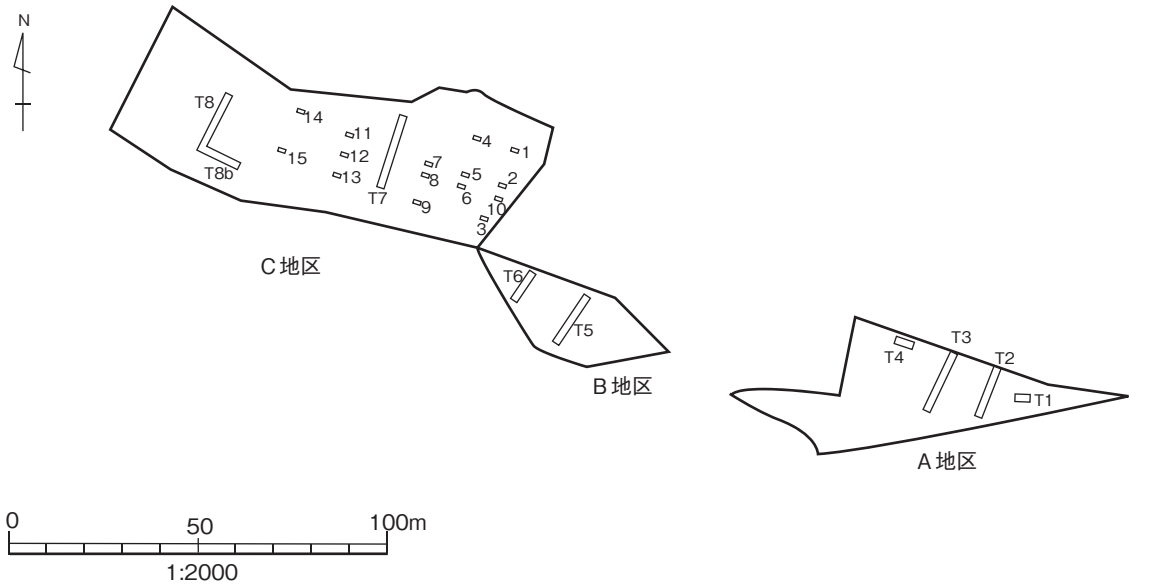


図６　調査地区と周辺の地形（1：2,500）



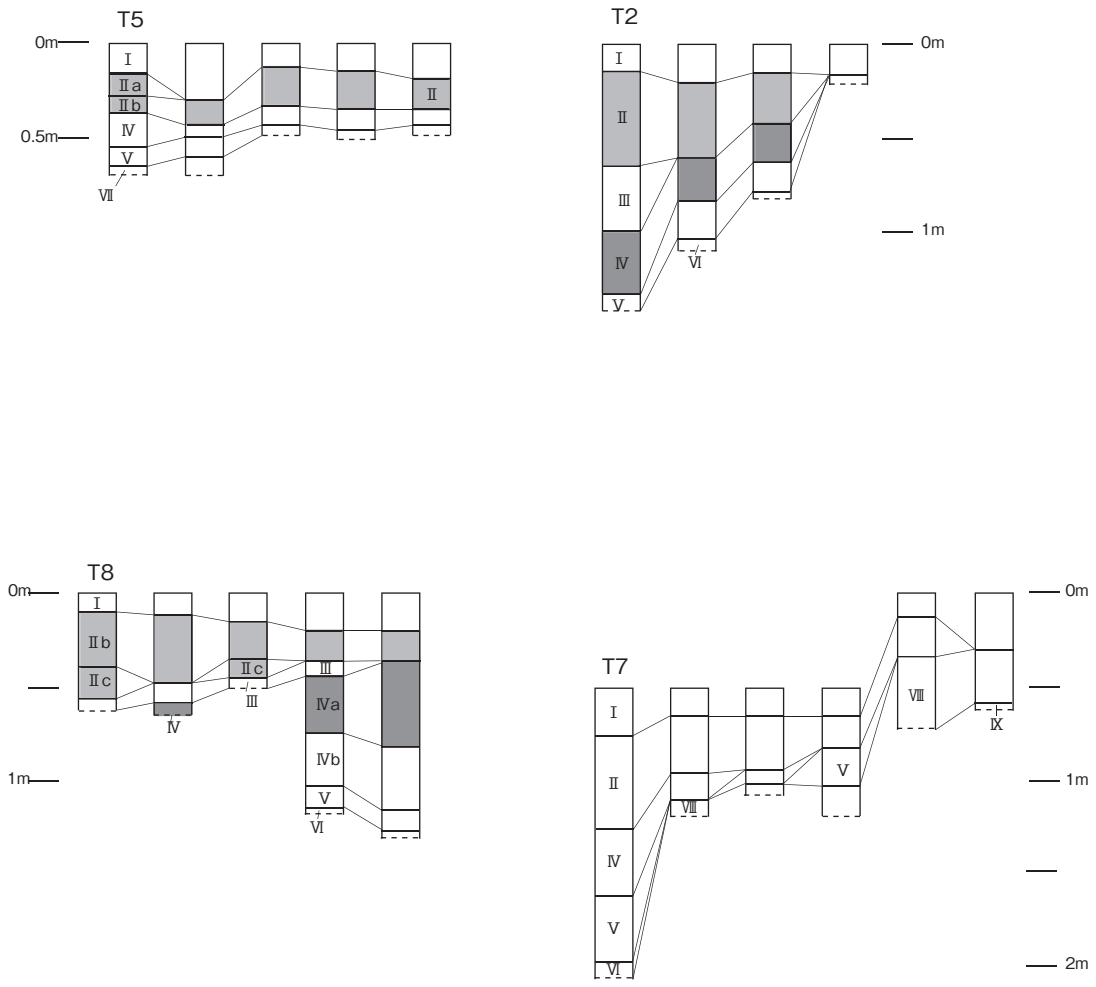


図７　調査位置図（Ａ～Ｃ地区）

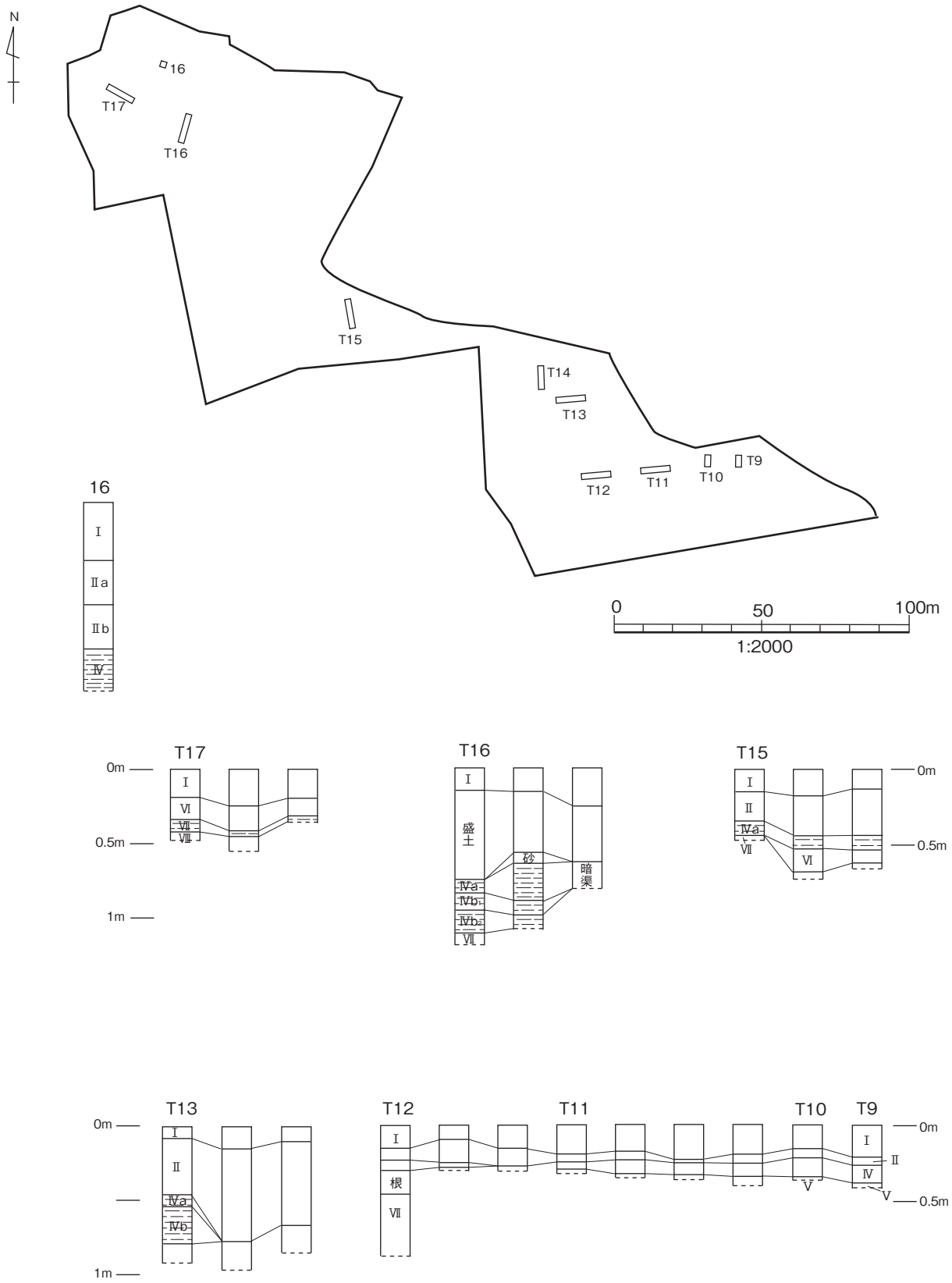

N
16
T17
T16
T15
T14
T13
T12
T11
T10
T9
0
50
100m
1:2000
16
Ⅰ
Ⅱa
Ⅱb
Ⅳ
T17
0m
0.5m
1m
Ⅰ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
T16
Ⅰ
盛土
砂
暗渠
Ⅳa
Ⅳb
Ⅶ
T15
0m
0.5m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅳa
Ⅶ
Ⅵ
T13
0m
1m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅳa
Ⅳb
T12
T11
T10
T9
0m
0.5m
Ⅰ
根
Ⅶ
Ⅱ
Ⅳ
Ⅴ

図８　調査位置図（Ｄ地区）

構は発見されなかった。

Ｄ地区の南東側では、トレンチ６本を設定し、掘開・調査した。黒色腐植土層は良好に残存していたが、遺構はＴＲ９より柱穴４個、遺物は土器片13点、石器類８点、銭貨（北宋銭）１枚、木製品１点を得ただけである。

Ｄ地区では、水田の低湿地部分について調査を実施した（ＴＲ13～17）。低湿地部分は、厚さ0.4mほどの表土の下に木片を少量含む粘土層が堆積していた。木片を採取し、水洗後観察を試みたが、加工痕は見られなかった。

⑶　遺構

1）　住居跡（図10）

Ｃ地区から竪穴住居跡と考えられる遺構を３軒確認した。ＴＲ８を調査中に黒色土の落ち込みがあったことから、トレンチを拡張して発見した。平面形は方形を呈する。確認面での規模は径2.8～3.6ｍほどである。

2）　土坑

Ａ・Ｃ地区から４基の土坑を確認した。

土坑１（図９）

遺構　ＴＲ２を調査中に黒色土の落ち込みを発見した。平面形は円形を呈するものと思われる。確認面での規模は径0.7m、深さ0.4mほどである。壁は急角度で立ち上がり、底は緩やかに傾斜する。

堆積土　黒色土（１層）と黒褐色土（２層）に粒・ブロック状のロームなどが混じる。

遺物　遺物は出土しなかった。

3）　溝跡

Ａ～Ｃ地区から４条の溝跡を確認した。

溝跡３（図９）

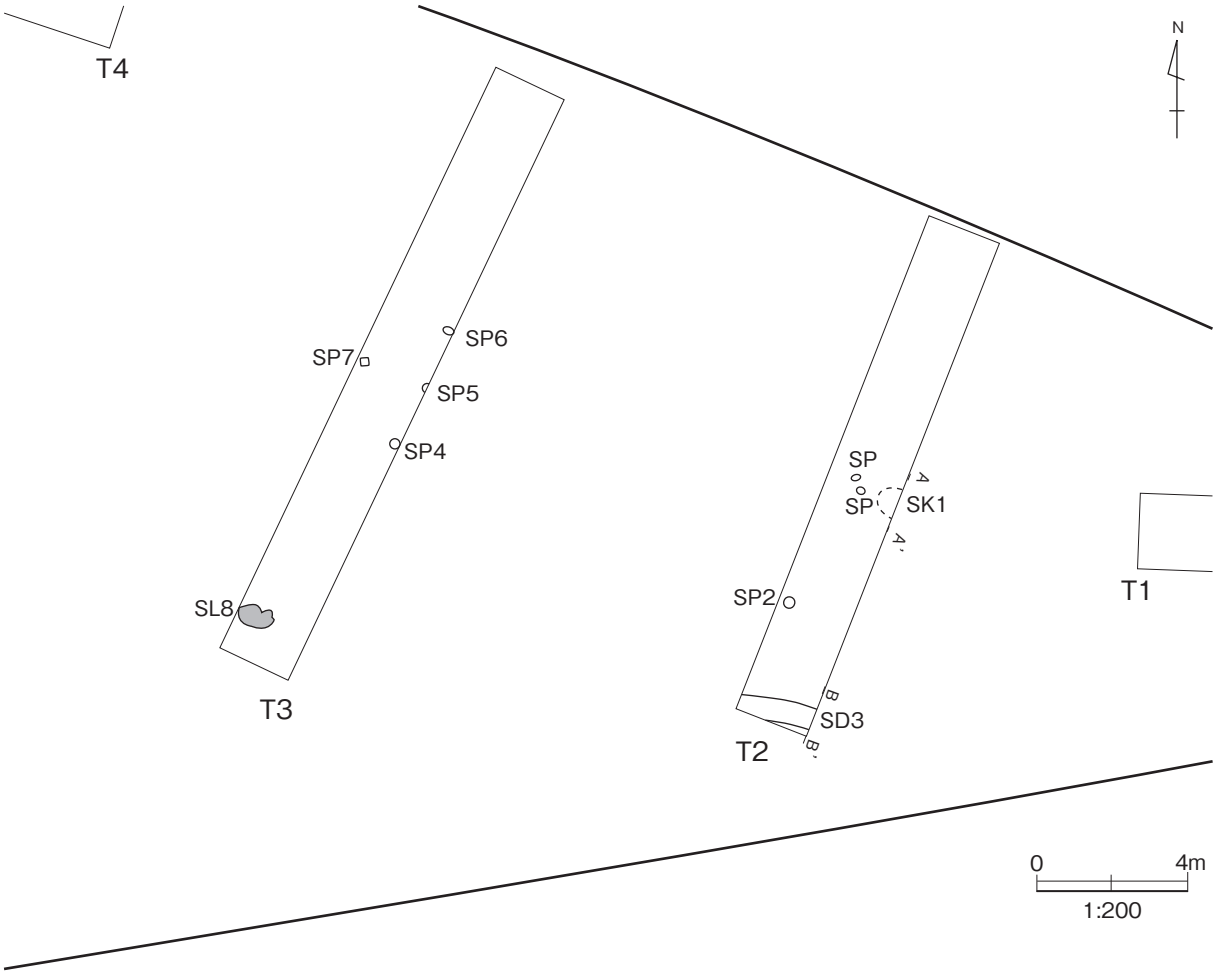
遺構　ＴＲ２を調査中に黒色土の落ち込みを発見した。

堆積土　黒色土（１～４・６～９層）と黒褐色土（５・10層）に粒状のロームや焼土が混じる。

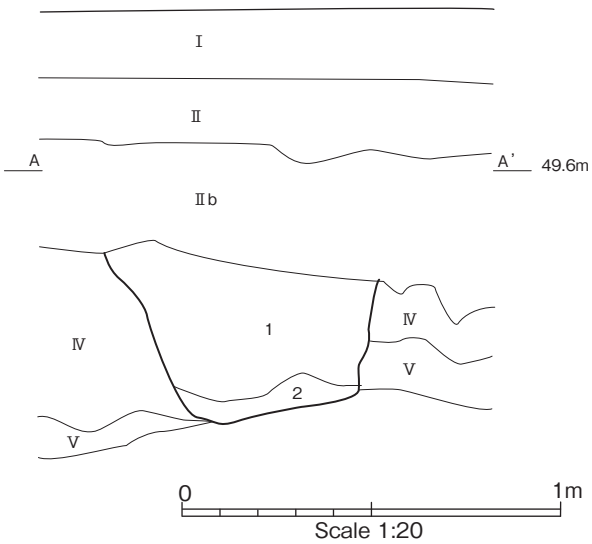
遺物　溝跡３から出土した遺物は、須恵器１点、土師器17点である。

4）　柱穴（図９）

検出した柱穴は、Ａ～Ｃ地区に分布する。ＳＰ４・５・６は、径0.2m弱ほどで、約1.6m間隔で並んでいる。ＳＰ２・７も径0.2mほどでＳＰ４～６と同様である。周囲に柱穴が確認されず、用途等は不明である。

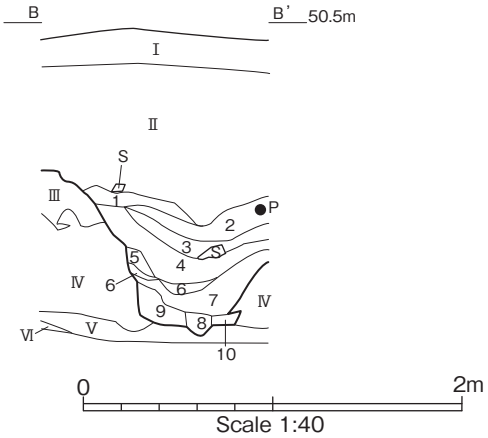


ＳＫ１



SK1
1　黒色土（10Ｙ R2/1）　軽石粒・焼土・炭化物少量混入。
2　黒褐色土（10Ｙ R2/2）　ロームブロック多量混入。

ＳＤ３



SD3
1　黒色土（10Ｙ R2/1）
2　黒色土（10Ｙ R2/1）　焼土微量混入。
3　黒色土（10Ｙ R1.7/1）　焼土微量混入。
4　黒色土（10Ｙ R2/1）　焼土微量混入。
5　黒褐色土（10Ｙ R2/2）
6　黒色土（10Ｙ R1.7/1）　粘性有り。柔らかい。
7　黒色土（10Ｙ R2/1）　焼土・ローム粒微量混入。
8　黒色土（10Ｙ R2/1）
9　黒色土（10Ｙ R1.7/1）　ローム粒微量混入。粘性有り。柔らかい。
10　黒褐色土（10Ｙ R2/2）　ローム粒微量混入。

図９　土坑１、溝跡３、柱穴２・４～７、焼土

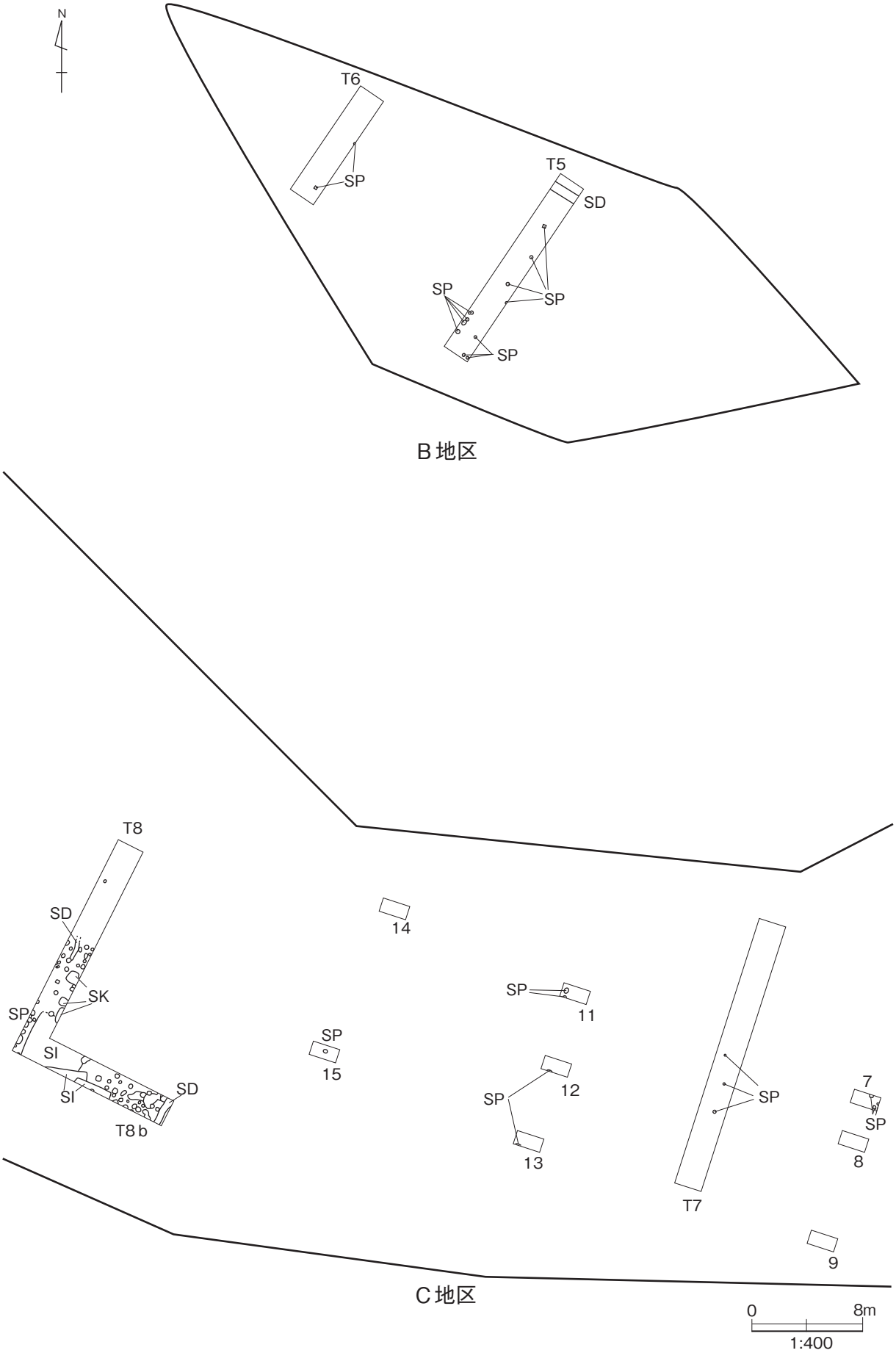


図10　B・C地区検出遺構図

5）　**焼土８**（図９）

焼土８

Ａ地区に位置する。ＴＲ３の調査中に検出し、さらに西へ拡がる。土の色調はオレンジがかった赤褐色で、黒褐色土（Ⅱ層）が混じる。土師器４点が出土した。

⑶　**遺物**（図11）

溝跡３などの遺構以外の遺物は、土器片629点、石器29点、剥片76点、石核７点、礫17点、土・石製品５点、木製品１点、銭貨１枚、鉄滓２点の合計767点である。全地区から得られた。

1）　**土器**

１群（１）　１点のみ出土した。胴部小破片で、器外面に貝殻腹縁文と沈線が確認できる。
２群（２）　36点出土した。前半に位置づけられるものと思われる。繊維を含み、もろい。
３群（３～６）　79点出土した。大半のものは、強く被熱し、赤化・磨耗している。
４群（７・８）　96点出土した。多くは後期に属すると思われる。７・８は底部。
６群（13）　384点出土した。13は、ヨコナデが強い口縁部。
７群（９～12）　14点出土した。９は底部外面が回転糸切りのものである。10はＴＰ16出土の底部片。底部が水平ではなく、やや上げ底となる。11・12は胴部の破片で、外面は細かな平行タタキ目。
８群（14・16・17）　19点出土した。大半が近世以降のものだが、ＴＲ７・14からは中世陶磁器も出土している。14は同安窯系青磁の皿とみられる。16・17は珠洲系陶器の甕と擂鉢。

2）　**石器**
２類（18）　２類は、硬質頁岩製のドリル１点である。スクレイパーの転用品と考えられる。
３類（19・20）　３類は、石小刀、スクレイパー、石箆など11点出土した。
４類　４類は、石材が頁岩のＵ．フレイク13点である。
５類（15）　５類は２点出土した。泥岩製の石斧。
７類　７類は２点出土した。

3）　**その他の遺物**
21は土錘。小型で管状を呈する。全長が短く、中心部がやや膨らむ器形である。22は有孔の石製品。石材は不明。銭貨は北宋銭（元豊通寶）１枚が出土した（23）。

⑸　**調査の結果**

今回の調査により、鍛冶屋敷遺跡は、従来よりもその範囲が東側に拡がることが確認された。遺跡の主体部である平坦面が未調査のため、全体像が把握できなかったことは今後の課題である。低湿地部分については、湧水のため十分な調査を実施することはできなかったものの、包蔵地が拡がっている可能性は低いと考えられる。したがって、Ａ～Ｃ地区を本発掘調査必要範囲と確定した。

表２　種別遺構一覧

竪穴	土坑	溝跡	柱穴	焼土	計
3	4	4	95	1	107

表３　遺構一覧

番　号	位　置	平面形	規　模			長　軸（N－W）
			確認面	底面	深さ	
ＳK1	ＴＲ２	円形	0.75×－	0.46×－	0.4	－
ＳD3	ＴＲ２		0.92×－	0.52×－	0.58	79°

表４　遺構出土遺物一覧

分類 調査区遺構	P		合計
	6	7	
ＳＤ３	17	1	18
ＳＬ８	4		4
ＳＰ	4		4
合計	25	1	26

表５　遺構外出土遺物一覧

分類	P								S										土製品	石製品	木製品	銭貨	鉄滓	合計
調査区	1	2	3	4	6	7	8	計	1						2	3	4	計						
									2	3	4	5	7	小計										
ＴＲ１					10	1		11		1	1			2	1		1	4						15
ＴＲ２			62		94	2		158	1		1			2	32	4	4	42						200
ＴＲ３			14	3	36			53							5			5					1	59
ＴＲ４					2	1		3							1			1					1	5
ＴＲ５					27	2		29							3		4	7						36
ＴＲ６					8			8			1			1	3		2	6						14
ＴＲ７				1	9		1	11							2			2						13
ＴＲ８	1	32			53		1	87		1	1			2	11		1	14						101
ＴＲ８ｂ					50	1		51																51
ＴＲ９							1	1																1
ＴＲ12							1	1																1
ＴＲ13											1			1				1						1
ＴＲ14					6	1	4	11					1	1	3		3	7			1	1		20
ＴＲ15					2		1	3		1				1	5	1	2	9						12
ＴＲ16				1				1			1	1		2	3			5						6
ＴＲ17											4			4	5	2		11						11
ＴＰ１					1			1																1
ＴＰ２			2	1				3		1				1				1						4
ＴＰ３					8			8							1			1						9
ＴＰ８											1			1				1						1
ＴＰ９				1	7			8																8
ＴＰ10					15			15																15
ＴＰ15										1				1				1						1
ＴＰ16				1	1	1		3			1			1	1			2						5
表採		4	1	88	55	5	10	163		6	1	1	1	9				9	2	3				177
合計	1	36	79	96	384	14	19	629	1	11	13	2	2	29	76	7	17	129	2	3	1	1	2	767

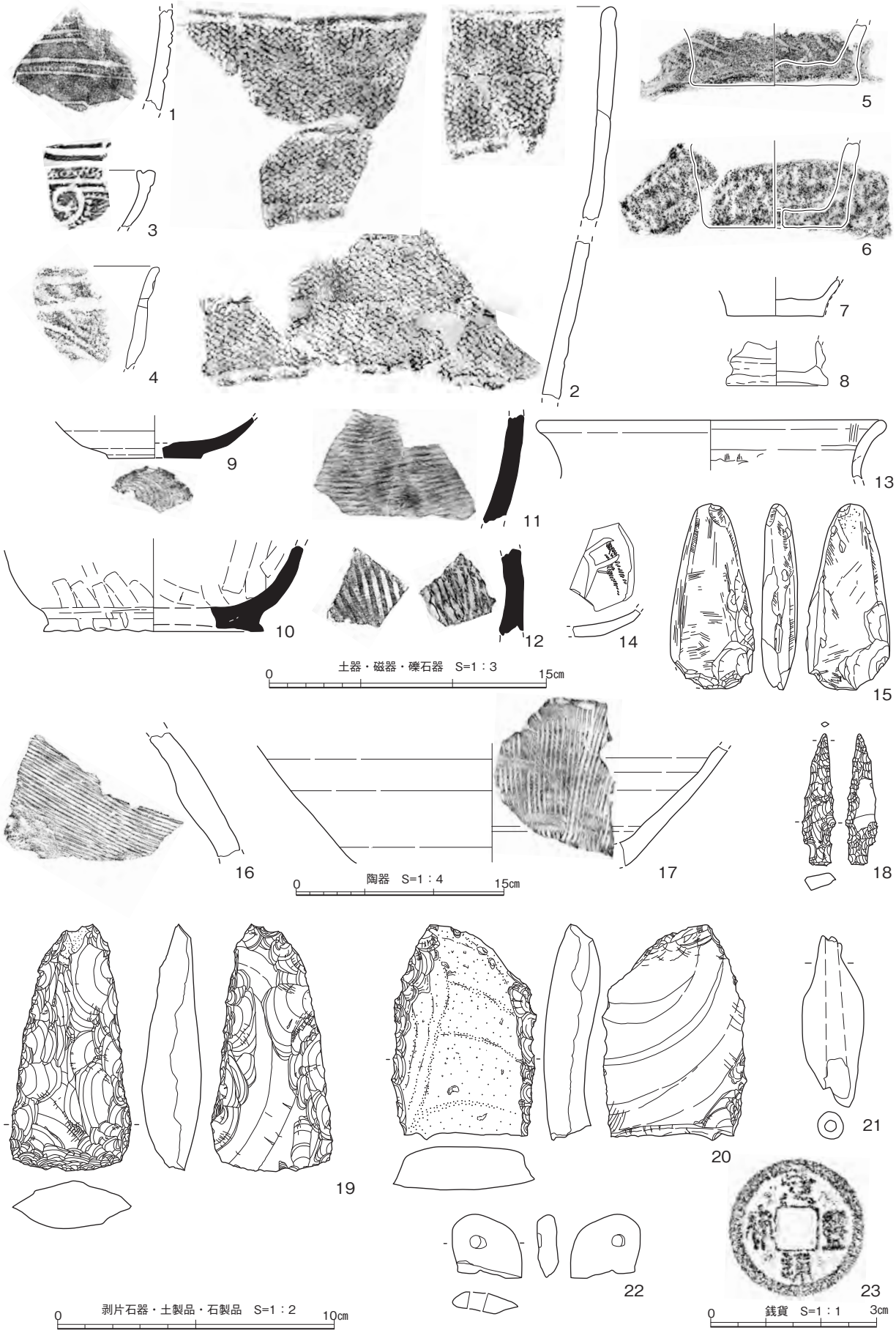

土器・磁器・礫石器　S=1：3
0
15cm
陶器　S=1：4
0
15cm
剥片石器・土製品・石製品　S=1：2
0
10cm
銭貨　S=1：1
0
3cm

図11　出土遺物

Ａ～Ｃ地区遠景

Ａ地区作業状況

溝跡３

柱穴２

T2 遺物出土状況

焼土８

図版２　調査状況(1)

T5 溝跡検出状況

T8 遺構検出状況

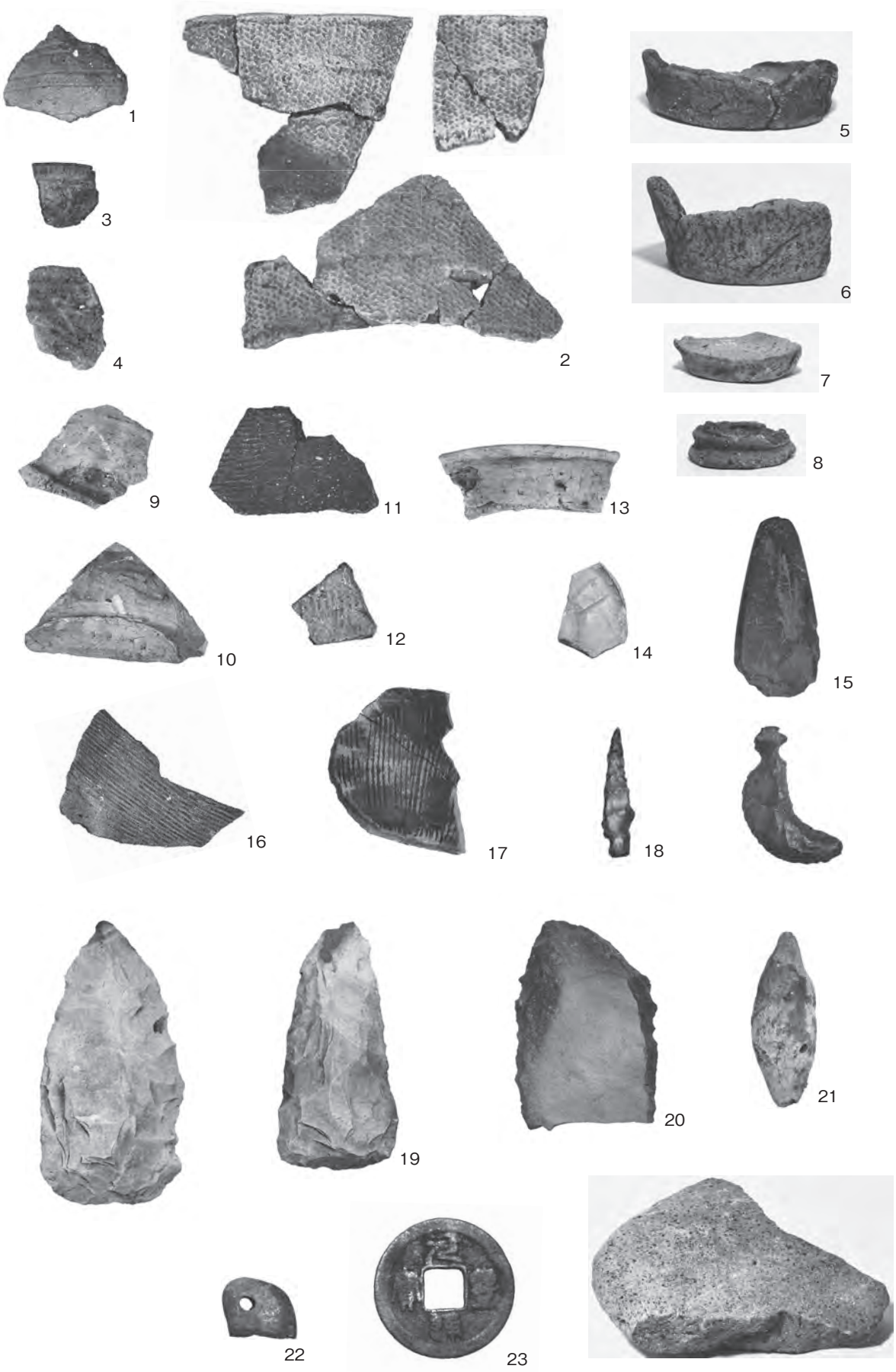
T8b 遺構検出状況

D地区遠景

T14 調査状況

T16 調査状況

図版３　調査状況(2)



図版4　出土遺物

3　扇田道下遺跡隣接地（携帯電話無線基地局）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

扇田道下遺跡の位置と周辺の環境については、第２章１で述べたとおりである。今回の調査位置は、北緯40度15分54秒、東経 140度34分19秒、標高は海抜69ｍである。

⑵　調査の内容

今回の調査は、包蔵地の主体部と推測される地区の北側隣接地区約220㎡について実施した。調査区の現況は宅地である。調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土。
Ⅱ層　黒色の色調を示す腐植土層である。
Ⅲ層　黒褐色の色調を示す土層。
Ⅳ層　暗褐色の色調を示す土層。Ⅲ層とⅤ層の漸移層である。
Ⅴ層　黄褐色粘土層。

調査区に２×８ｍと2.5×5.7ｍのトレンチを１箇所ずつ設定し、調査を実施した。トレンチは人力にて盛土を除去した後、地山面と壁面を精査し、埋蔵文化財の有無及び遺物包含層の状況等を調査した。調査の結果、遺物包含層は全く残存しておらず、遺構は柱穴１個が検出されたのみである。遺物は得られなかった。

⑶　調査の結果

今回の調査は、扇田道下遺跡の主体部と思われる箇所の北側隣接地について実施した。しかし、第２項で述べたとおり、遺物包含層が残存せず、遺構も柱穴１個が確認されたのみである。遺物は得られなかった。

調査地は、かつて共同墓地として利用された時期に遺物包含層が削平されたものと考えられる。今回の調査結果により、遺跡は消失したものと判断される。したがって、本発掘調査は不要と判断した。

図12　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

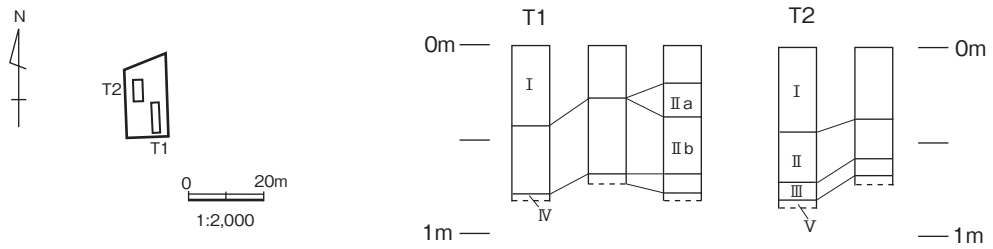


図 13　調査位置図

調査区近景

T1 調査状況

T2 調査状況

図版 5　調査状況

４　本宮地区（携帯電話無線基地局）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地南部の本宮台地中央に位置する。調査地の地番は本宮字上ミ野68番地の２で、平成20年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは丘陵縁辺に分布する。調査地周辺にもいくつか遺跡があり、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。調査地内の標高は、海抜63mほどで平坦である。

⑵　調査の内容

今回の調査にあたり、西側境界にトレンチを設定した。人力作業により掘開した。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土・盛土。

Ⅱ層　黒色の腐植土層。トレンチ南側で僅かに確認できただけである。既に開発による削平が著しく、今回の調査地区ではほぼ消滅していた。

Ⅲ層　黒褐色土。

Ⅳ層　黒褐色土。ロームブロック多量混入。

Ⅴ層　黄褐色粘土層。基盤のローム。

⑶　調査の結果

調査区は、以前建物が建てられていたが、解体されてからしばらく使用されなかったようで、雑草が全面に広がる雑種地的な感じであった。そのため、全般的に固く締まった土であった。調査必要な範囲を刈払いし、表土より人力にて掘開した。前述のように、残念ながらⅡ層黒色腐植土層がほとんど残存せず、調査区内からの遺物の出土はなかった。

以上の結果から、今回調査を実施した地区については、埋蔵文化財は存在しないものと判断される。したがって、本発掘調査は不要と判断した。

調査区近景

調査状況

図版６　調査状況

図14　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

５　釈迦内地区（携帯電話無線基地局）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

大館市内に所在する埋蔵文化財包蔵地の多くは丘陵を開析する沢の流域に分布する。調査地付近にはその沢の１つが横断しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。

調査地の位置は、北緯40度18分８秒、東経140度34分17秒である。標高は75mである。調査地周辺には、遺跡は所在していない。

⑵　調査の内容

トレンチは任意で設定した。トレンチの掘削は全てバックホーで行い、基盤層である黄褐色粘土層（Ⅳ層）まで掘り下げ、埋蔵文化財の有無等を調査した。

調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土及び耕作土。
Ⅱ層　黒色～暗褐色を呈する腐植土層である。
Ⅲ層　暗褐色～褐色を呈する土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。
Ⅳ層　黄褐色を呈する粘土層。

調査地内はⅡ層が良好に残存するものの、遺物は出土しなかった。今回の調査により、柱穴の可能性が考えられる落ち込みを１箇所発見した。

⑶　調査の結果

平成20年度に、遺跡の有無を確認するための詳細分布調査を実施した。しかし、今回の調査の結果、遺構は柱穴と考えられる落ち込みを１箇所確認しただけで、遺物は出土しなかった。以上のことから、保護措置は不要と考えるのが妥当と判断した。

調査区近景

調査状況

図版７　調査状況

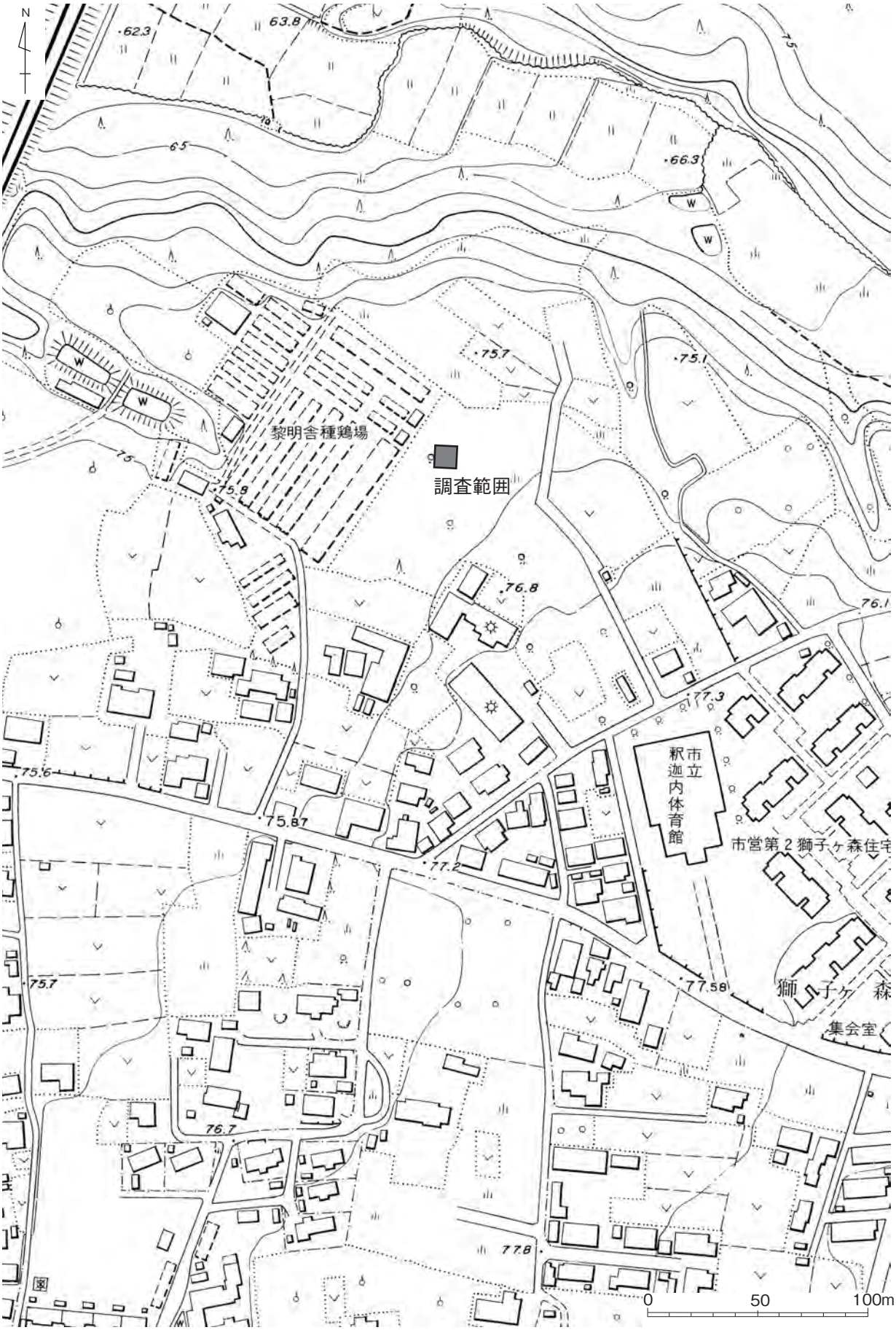


図15　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

６　上代野地区（携帯電話無線基地局）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地北東部の沖積低地に位置する。調査地の地番は上代野字八幡岱54番地で、平成21年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは丘陵を開析する沢の流域に分布する。調査地付近にはその沢の１つが横断しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。

調査地の位置は、北緯40度17分37秒、東経140度35分41秒である。標高は88mである。調査地周辺には、北東約0.5kmのところに諏訪台遺跡と諏訪台Ｄ遺跡、南東約0.5kmに塚ノ下遺跡が分布している。

⑵　調査の内容

トレンチは任意で設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、基盤層である黄褐色粘土層（Ⅳ層）まで掘り下げ、埋蔵文化財の有無等を調査した。また、トレンチ南西部を深堀りして埋蔵文化財の有無を追究した。

調査地は大茂内川の氾濫源と考えられ、基本層序は、褐色・暗褐色土と黒色土の互層の上に腐植土層が堆積する。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土及び耕作土。
Ⅱ層　黒褐色盛土。
Ⅲ層　黒褐色盛土。
Ⅳ層　暗褐色土。

調査地内は黒色土が存在するものの、遺構・遺物は確認されなかった。

⑶　調査の結果

平成21年度に、遺跡の有無を確認するための詳細分布調査を実施した。しかし、今回の調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。以上のことから、保護措置は不要と考えるのが妥当と判断した。

調査区近景

調査状況

図版８　調査状況

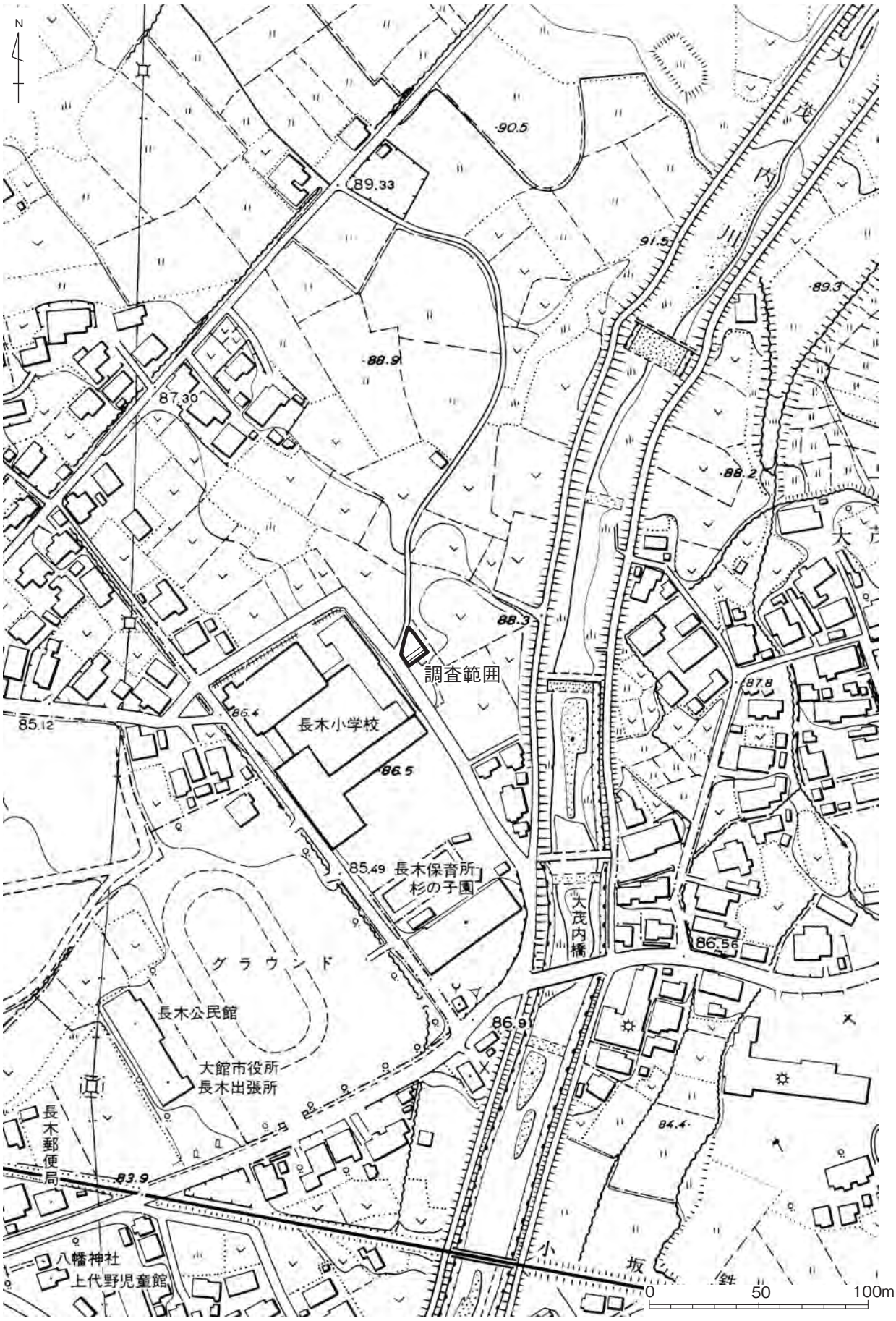


図16　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

７　川口・立花地区（川口十三森遺跡）（市道釈迦内松木立花線）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は大館市の西部に所在し、米代川右岸の台地部に当たる。今回は本線部分を対象とした。標高は海抜48～52ｍである。周辺には、東に押館跡、西に下川沿遺跡が分布している。

⑵　調査の内容

市道釈迦内松木立花線整備工事が計画されているため、事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無及び黒色腐植土層の残存状況等を調査した。調査は２回にわたり実施し、１回目の調査は対象地の中で作付けを行っていない部分、２回目は畑地の作付けにより１回目に調査できなかった部分について実施した。現況は畑地と林地、水田（休耕田）である。調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。

川口地区（Ａ地区）では、11本のトレンチ（以下「ＴＲ」）を設定、掘開した。調査の結果、ＴＲ10より住居跡１軒、ＴＲ11より土坑１基、ＴＲ12より竪穴状遺構（住居跡）１基、ＴＲ13より柱穴多数、ＴＲ19より土坑５基、遺物は土器片48点、石器類71点、鉄滓１点を得た。

立花地区（Ｂ地区）では、11本のトレンチを設定、掘開した。調査の結果、ＴＲ20より柱穴が１基確認されたのみで、他のトレンチから遺構・遺物は確認されなかった。

⑶　遺構

ＴＲ10では、現地表下80㎝から石組炉と貼床をもつ住居跡１軒を確認した。ＴＲ12でも竪穴状遺構（竪穴住居跡）を検出し、埋土中からは縄文土器と剥片石器を得た。ＴＲ11では不整円形土坑を検出し、ＴＲ13では多数の円形柱穴（ピット）を検出した。ＴＲ19では円形の落ち込み５基を検出している。

⑷　遺物（図19）

今回の調査で得た遺物は、土器片48点、石器11点、剥片56点、石核１点、礫３点、鉄滓１点、合計120点である。

1）　土器

３群　47点出土した。図19－３は胴部小破片で、器外面に網目状撚糸文が確認できる。５は内湾する口縁部で、薄く沈線を施している。

５群　小破片のため明確ではないが、５群に分類したものは１点ある。図19－６は、底部に近い胴部で、上位に平行沈線、下位に山形の沈線文が施されている。

2）　石器

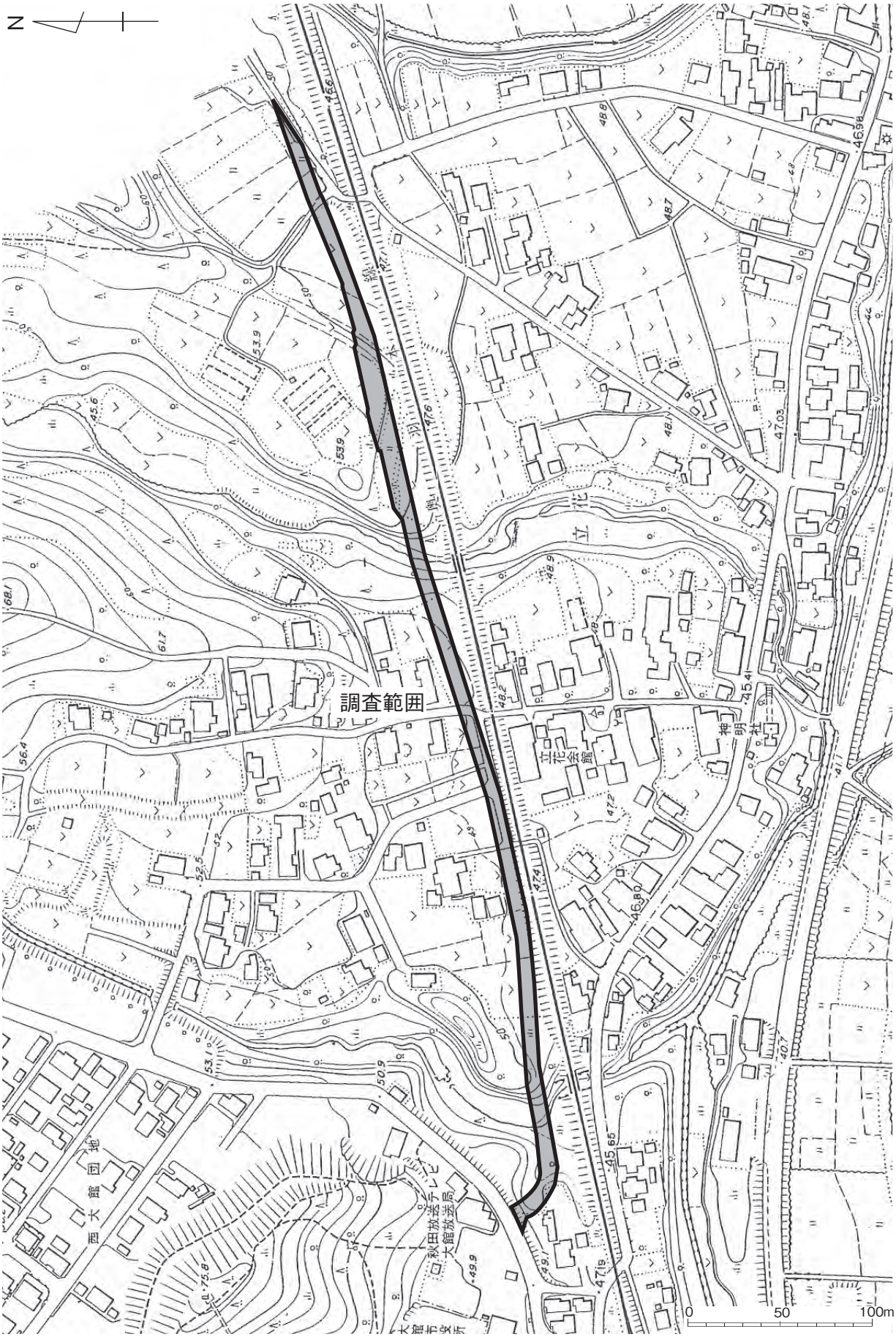


図17　調査地区と周辺の地形（1：3,000）

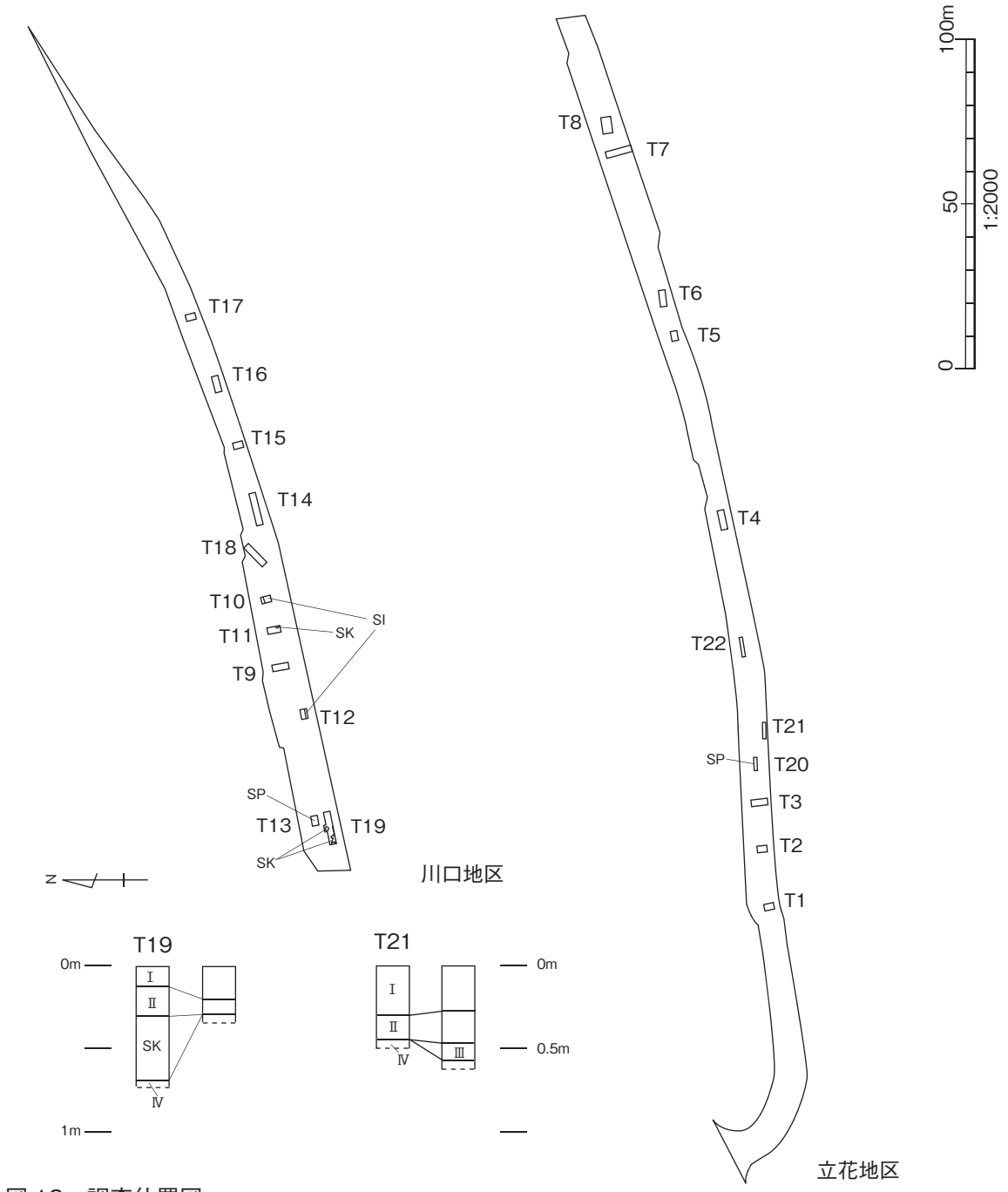


図 18　調査位置図

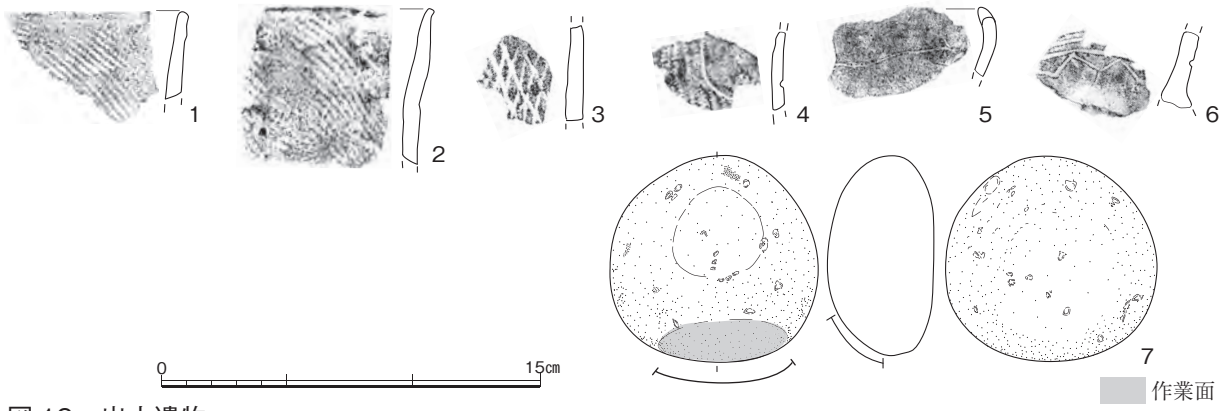


図 19　出土遺物

３類　３類は、３点出土した。
４類　本類は、U．フレイク５点である。
６類　図19－７は擦石で、石材は安山岩。

⑸　調査の結果

ＴＲ10～13では縄文の遺物包含層が存在し遺構も検出され、ＴＲ19では遺構が検出された。このことから、新規の埋蔵文化財包蔵地として周知資料に登載することとした。新規に登載した埋蔵文化財包蔵地の概要は、以下のとおりである。

遺跡の名称　川口十三森遺跡
登 載 番 号　204-4-166
種　　別　集落跡
時　　代　縄文時代（中・後期）
所　在　地　川口字十三森128・129・129-1・132・133・134・135
推 定 面 積　約4,200㎡
標　　高　48～53m
遺跡の現状　畑地・林地

工事に係る1,100㎡に対して本発掘調査が必要と判断した。その他の地点については、埋蔵文化財は所在しないことから本発掘調査は必要ないと判断した。

表６　種別遺構一覧

竪穴住居跡（竪穴状遺構）	土坑	柱穴	計
2	6	多数	8

表７　出土遺物一覧

分類 / 調査区	P			S							鉄滓	合計
	3	5	計	1			2	3	4	小計		
				3	4	6						
ＴＲ 10				1	2		6			9		9
ＴＲ 10・11	26	1	27									27
ＴＲ 11	6		6		1		3			4		10
ＴＲ 12	6		6				1			1		7
ＴＲ 18	9		9		1	1	8		1	11		20
表採				2	1	2	38	1	2	46	1	47
合計	47	1	48	3	5	3	56	1	3	71	1	120

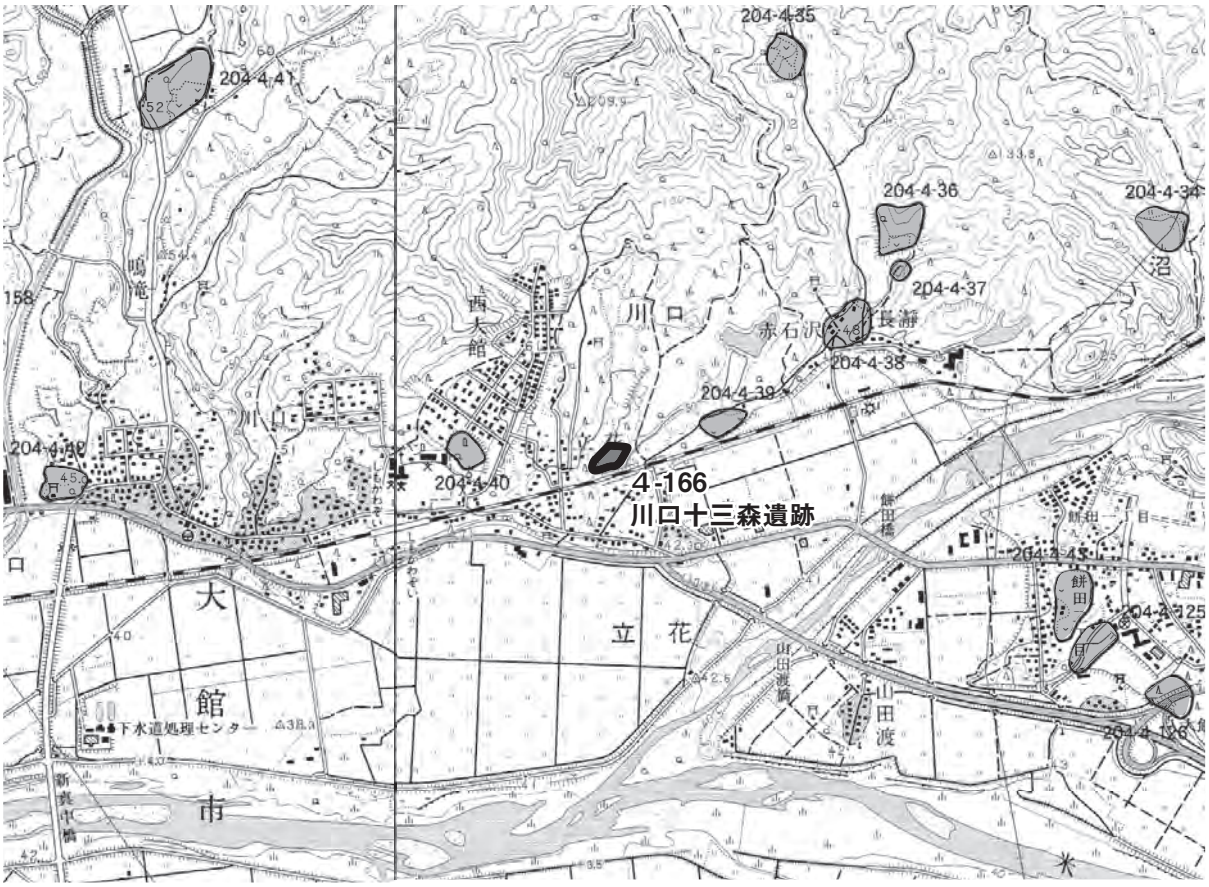


図20　川口十三森遺跡の位置（1：25,000）

図21　川口十三森遺跡と周辺の地形（1：2,500）

川口十三森遺跡遠景

T16 調査状況

T10 調査状況

T10 検出石囲炉

T12 調査状況

T12 検出竪穴状遺構

T19 調査状況

T19 検出フラスコ状ピット

図版９　川口地区調査状況

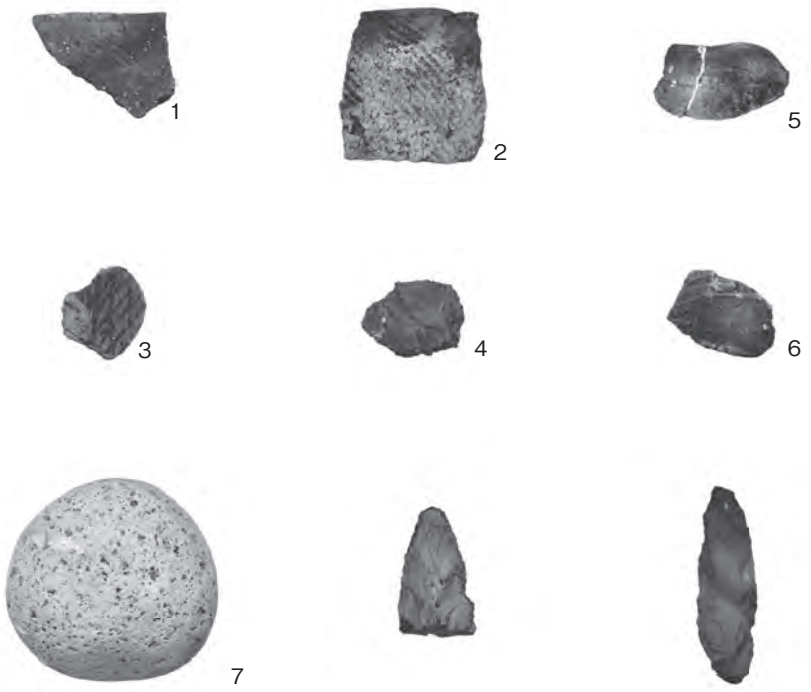
立花地区遠景

T3 調査状況

T4 調査状況

T20 調査状況

図版10　立花地区調査状況



図版11　出土遺物

8　花岡地区（携帯電話無線基地局）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地北部に位置する。調査地の地番は花岡町字二井山151番地の１で、平成22年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは丘陵を開析する沢の流域に分布する。調査地付近にはその沢の１つが横断しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。

⑵　調査の内容

トレンチは調査対象地に任意で１箇所設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、基盤層である黄褐色粘土層（Ⅶ層）まで掘り下げ、埋蔵文化財の有無等を調査した。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土。
Ⅱ層　黒色～黒褐色の腐植土層。
Ⅲ層　暗褐色土（十和田ａ降下火山灰層）。
Ⅳ層　黒色腐植土層。
Ⅴ層　黒褐色土。
Ⅵ層　漸移層。
Ⅶ層　黄褐色粘土層（地山）。

調査地内は黒色土が存在するものの、遺構・遺物は確認されなかった。

⑶　調査の結果

調査の結果、調査地内には埋蔵文化財は分布しないと判断された。したがって、保護措置は不要と考えるのが妥当と判断した。

調査区近景

調査状況

図版12　調査状況

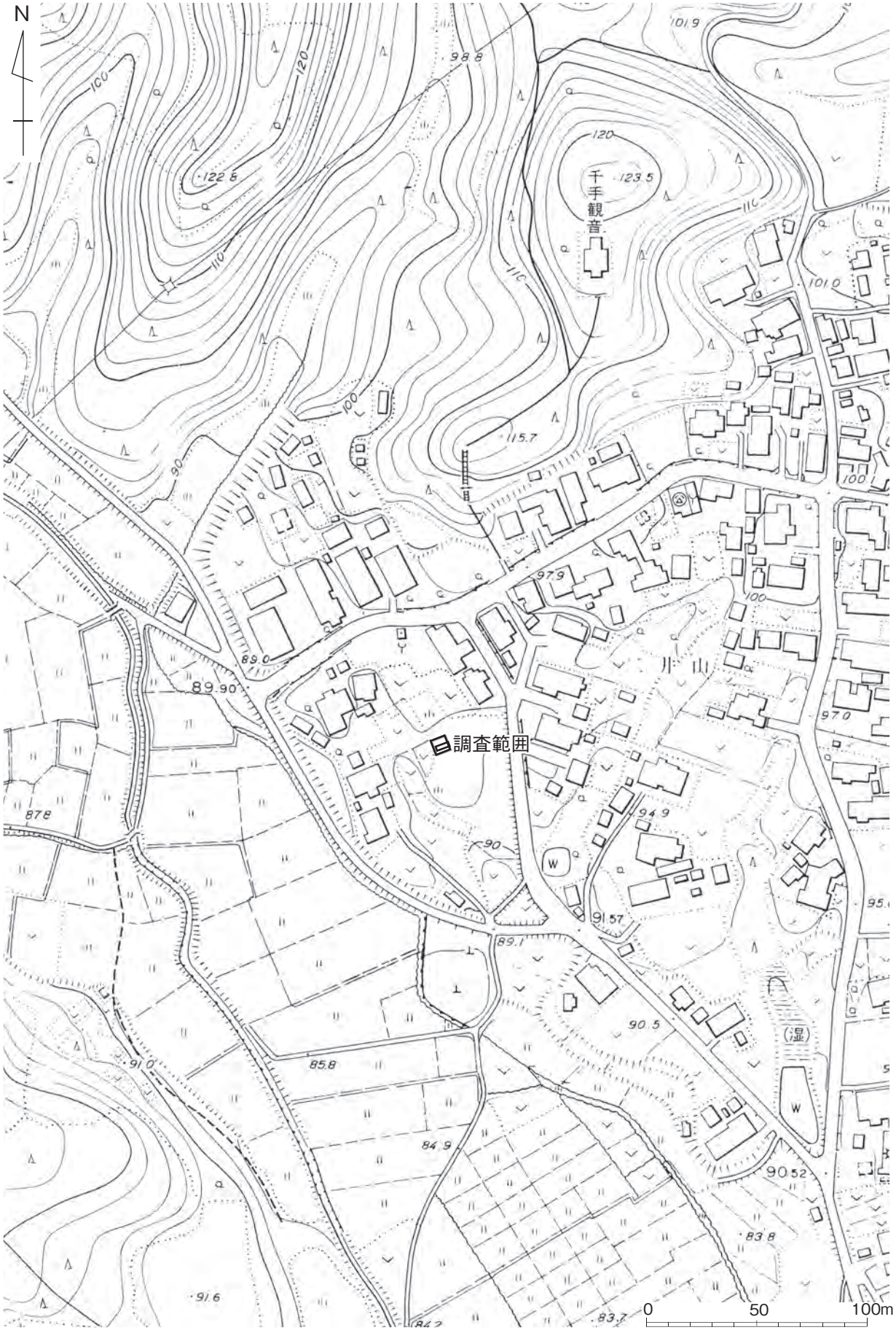


図22　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

9　芋掘沢遺跡隣接地（公共下水道）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

芋掘沢遺跡は、昭和42年に確認された遺跡である。大館地区の遺跡は、大館盆地の中央部に舌状に張り出した大館段丘上に所在するものが多く、本遺跡もその１例である。本遺跡は米代川と長木川に挟まれた大館段丘の南西部で、かつて米代川へ開析した沢（通称芋掘沢）沿いに存在する。遺跡は、沢から南東約150mの距離に拡がり、北側には、縄文時代前期の土坑が確認されている餅田屋敷添遺跡が隣接する。さらにこの沢跡の対岸中流域には、市内でも有数の遺跡、縄文時代早期を代表する根下戸道下遺跡や縄文時代前期の散布地であった根下戸Ⅲ遺跡などが周辺遺跡として知られている。

調査地区は、遺跡の北東150mほどに位置し、芋掘沢遺跡と同じ台地上の隣接地である。標高は海抜53～55mほどで、北東から南西へ緩やかに大館段丘の側面を下る地形となっている。

⑵　調査の内容

遺跡付近の234mの区間において約40m間隔でテストピットを設け、実施した。バックホーにより１テストピットの基本を幅１mほどとし、一部２m角に広げ掘開した。

基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層　表土・盛土。北東住宅街近くで盛土を確認したが、西部では存在しない。

Ⅱ層　黒色～黒褐色の腐植土層。標高の低い西部で確認できた。既に道路による削平が著しく、今回の調査地区では消滅しているところが多かった。

Ⅲ層　暗褐色～褐色土。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。Ⅱ層黒色土層が存在しないところも多く、削平が本層まで深く及んでいることから、本層も残存しているところは少ない。

Ⅳ層　黄褐色粘土層。基盤のローム。全調査区の基盤をなす層である。

⑶　調査の結果

今回は、遺構・遺物を発見できなかった。したがって、調査地内が遺跡のエリアに入るとは考えがたい。地形・土層等から見た調査の結果、今回の調査対象地内には遺跡が存在する可能性は低く、本発掘調査は不要と判断した。

図23　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

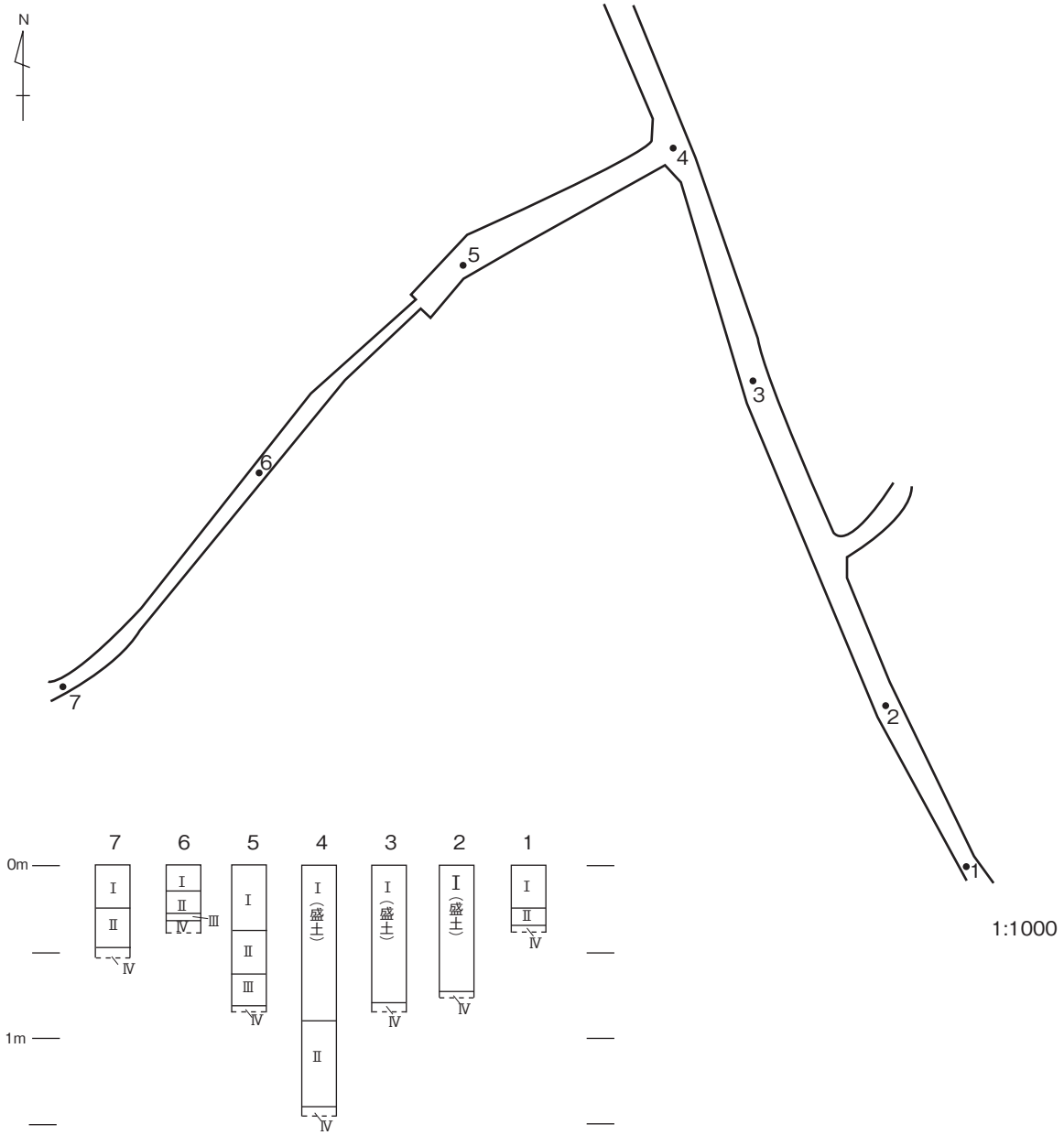
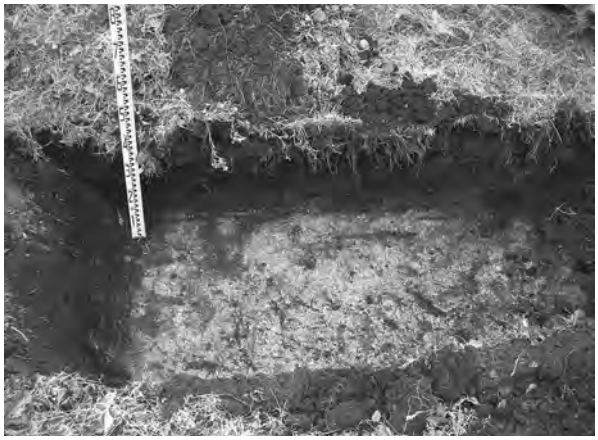


図 24　調査位置図

調査区近景



6 調査状況

図版 13　調査状況

10　川口館跡（個人住宅建替）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

大館市内に所在する埋蔵文化財包蔵地のうち、その多くは米代川の支流域に分布する。それらの支流の一つ山田川下流左岸に川口館跡は所在する。遺跡の位置は、北緯40度16分38秒、東経140度28分59秒である。標高は最も高い北側で47m、西側で40mである。

遺跡の北西側の山田川を挟んだ対岸に、縄文時代前～後期及び平安時代の遺跡である栗木山遺跡が所在していた（土砂採取のため消滅）。

⑵　調査の内容

調査対象地のうち、住宅が建っていない地点を対象に、トレンチ（２箇所）を任意に設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、基盤層である灰白色火山灰層（Ⅳ層）まで掘り下げ、遺構の記録・遺物の収集等を行った。出土遺物は、層位毎、トレンチ毎に取り上げた。遺跡内の基本層序は、基盤をなす灰白色火山灰層の上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土。
Ⅱ層　黒色を呈する腐植土層である。
Ⅲ層　褐色を呈する砂層。部分的に見られる。
Ⅳ層　灰白色を呈する砂質土層。

⑶　遺構

調査区内は、Ⅱ層が良好に残存する。今回の調査により、土坑の可能性が考えられる落ち込み（ＳＫ１）を１箇所、溝跡２条、柱穴２個を発見した。ＳＫ１は、ＴＲ２より検出した。平面形は、不整長円を呈する。

⑷　遺物（図版14）

1）　陶磁器

８群　出土した陶磁器は、トレンチ２のⅠ層出土の２点（図版14－１・２）のみである。いずれも近世以降のものである。

2）　鉄製品

鉄製品は、釘とみられるもので、トレンチ２のⅠ層より、１点（図版14－３）出土した。

図25　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

(5)　調査の結果

平成22年度に、川口館跡の内容を確認するための詳細分布調査を実施した。現在埋蔵文化財包蔵地カードに登載している範囲は調査区半分より西側であるが、遺跡の範囲をこの地区に限定する根拠は、今回の調査で得られなかった。今回の調査の結果、土坑状の落ち込み１箇所、溝跡２条、柱穴２個の遺構が発見されたが、中世の遺物は１点も得られなかったため、これらの遺構が中世の「川口館」に含まれるかどうかの確証は得られなかった。しかし、今回の建替工事では、遺構確認面まで掘削が達しないこと、また軽量構造の建物であることから、遺構は保護される。遺物はⅠ層より得られたのみである。以上のことから、保護措置の内容は、慎重工事等の軽微なものが妥当と判断した。

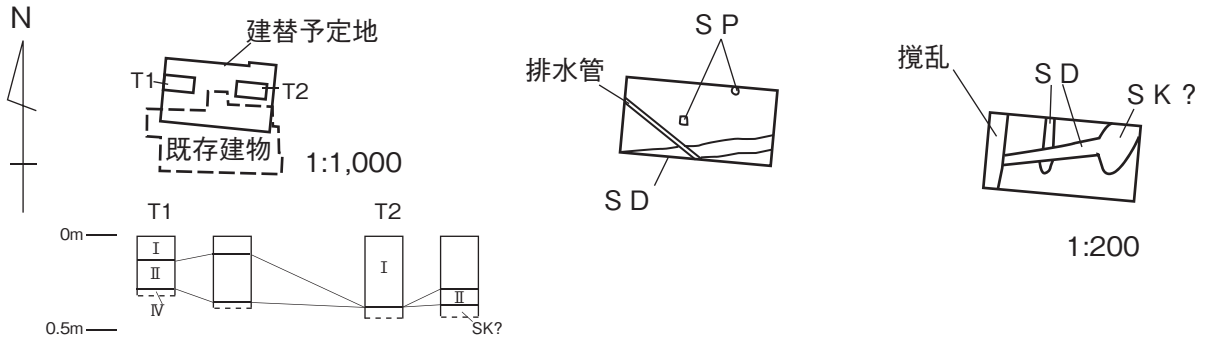


図26　調査位置図

表８　種別遺構一覧

土坑？	溝跡	柱穴	計
1	2	2	5

表９　出土遺物一覧

分類 / 調査区	P		鉄製品	合計
	8	計		
ＴＲ２	2	2	1	3

調査区近景

T2 調査状況

出土遺物

図版14　調査状況と出土遺物

11　餅田地区（携帯電話無線基地局）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館段丘西部に位置する。調査地の地番は餅田一丁目114番地１で、平成22年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは丘陵縁辺に分布する。調査地周辺にもいくつか遺跡があり、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。調査地内の標高は、海抜55mほどで平坦である。

⑵　調査の内容

今回の調査にあたり、調査対象地に任意でトレンチを２箇所設定した。人力作業により掘開した。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土・耕作土。
Ⅱ層　黒色の腐植土層。
Ⅲ層　黒褐色土。
Ⅳ層　黄褐色粘土層。基盤のローム。

⑶　調査の結果

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったため、調査地内には埋蔵文化財は分布しないと判断された。したがって、保護措置は不要と考えるのが妥当と判断した。

調査区近景

T1 調査状況

図版15　調査状況

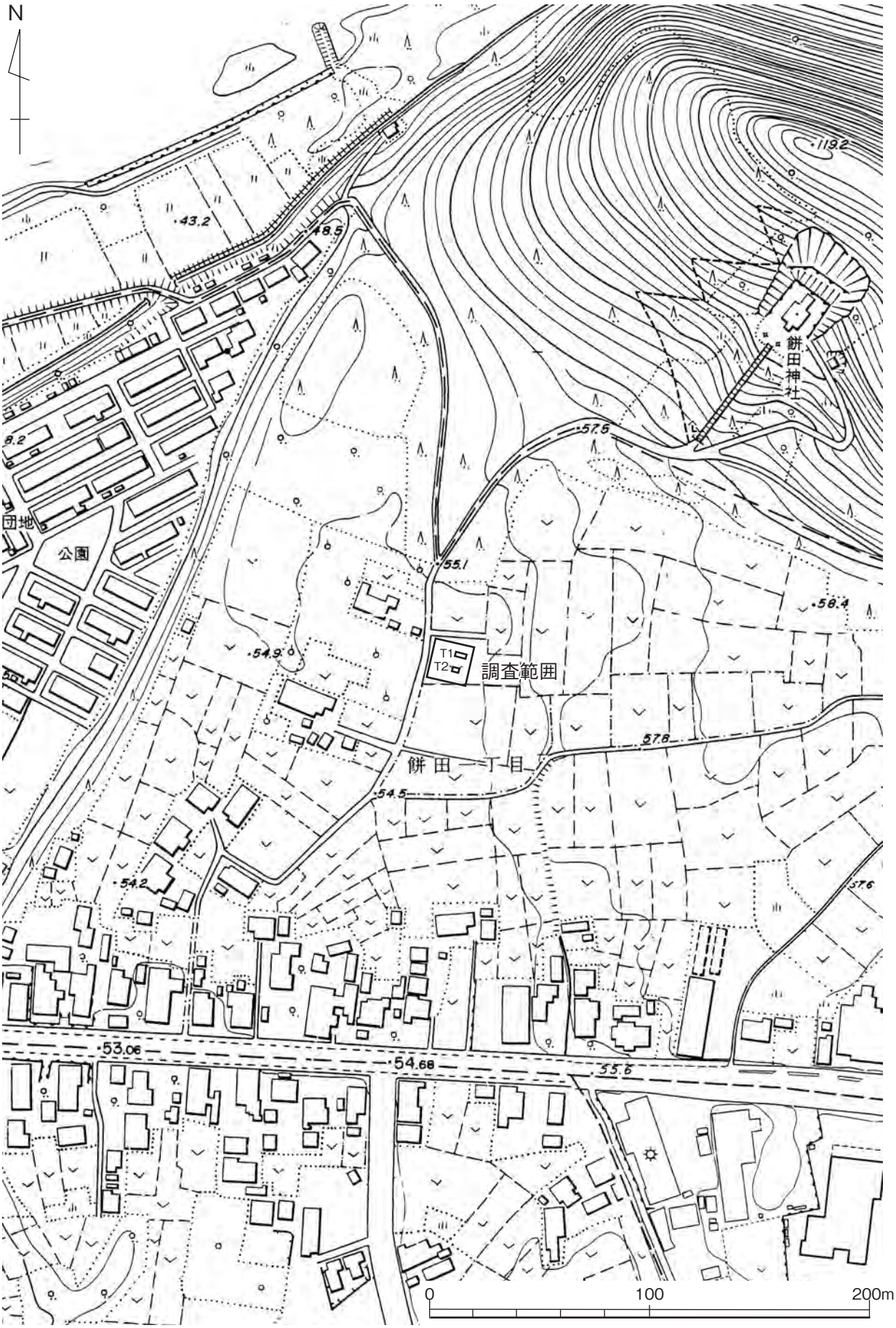


図27　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

12　根下戸道下遺跡隣接地（公共下水道）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

根下戸道下遺跡は、平成元年に確認された遺跡である。大館地区の遺跡は、大館盆地の中央部に舌状に張り出した大館段丘上に所在するものが多く、本遺跡もその１例である。本遺跡は米代川と長木川に挟まれた大館段丘の南西部で、かつて米代川へ開析した沢（通称芋掘沢）沿いに存在する。遺跡は、沢から南東幅80mほどの距離で拡がり、東側には、縄文時代前期の散布地であった根下戸Ⅲ遺跡が分布する。さらにこの沢跡の対岸下流域には、縄文時代前期の芋掘沢遺跡などが周辺遺跡として知られている。

調査地区は、遺跡の北50mほどに位置し、埋め立てられた沢地部とその右岸の丘陵部に大別される。標高は海抜50～52mほどで、北から南へ緩やかに大館段丘の側面を下る地形となっている。

⑵　調査の内容

遺跡付近の３つの路線において任意でテストピットを設け、実施した。バックホーにより１テストピットの基本を幅１mほどとし、一部２m角に広げ掘開した。

基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層　道路の盛土。

Ⅱ層　黒色～暗褐色の腐植土層。標高の低い南西部と、北部で確認した。既に道路や水道管による削平・撹乱が著しく、今回の調査地区ではほぼ消滅していた。

Ⅲ層　褐色土。Ⅱ層黒色土層が存在しないところも多く、削平が本層まで深く及んでいることから、本層も残存しているところは少ない。

Ⅳ層　黒色土。調査区南部に見られる。

Ⅴ層　黄褐色粘土層。基盤のローム。

⑶　調査の結果

今回の調査では、遺構はＴＰ４・５より溝跡が１条検出されたが、上面にゴミが含まれ、上位からの掘り込みのため、近代以降のものと考えられる。遺物は確認されなかった。したがって、調査地内が遺跡のエリアに入るとは考えがたい。地形・土層等から見た調査の結果、今回の調査対象地内には遺跡が存在する可能性は低く、本発掘調査は不要と判断した。

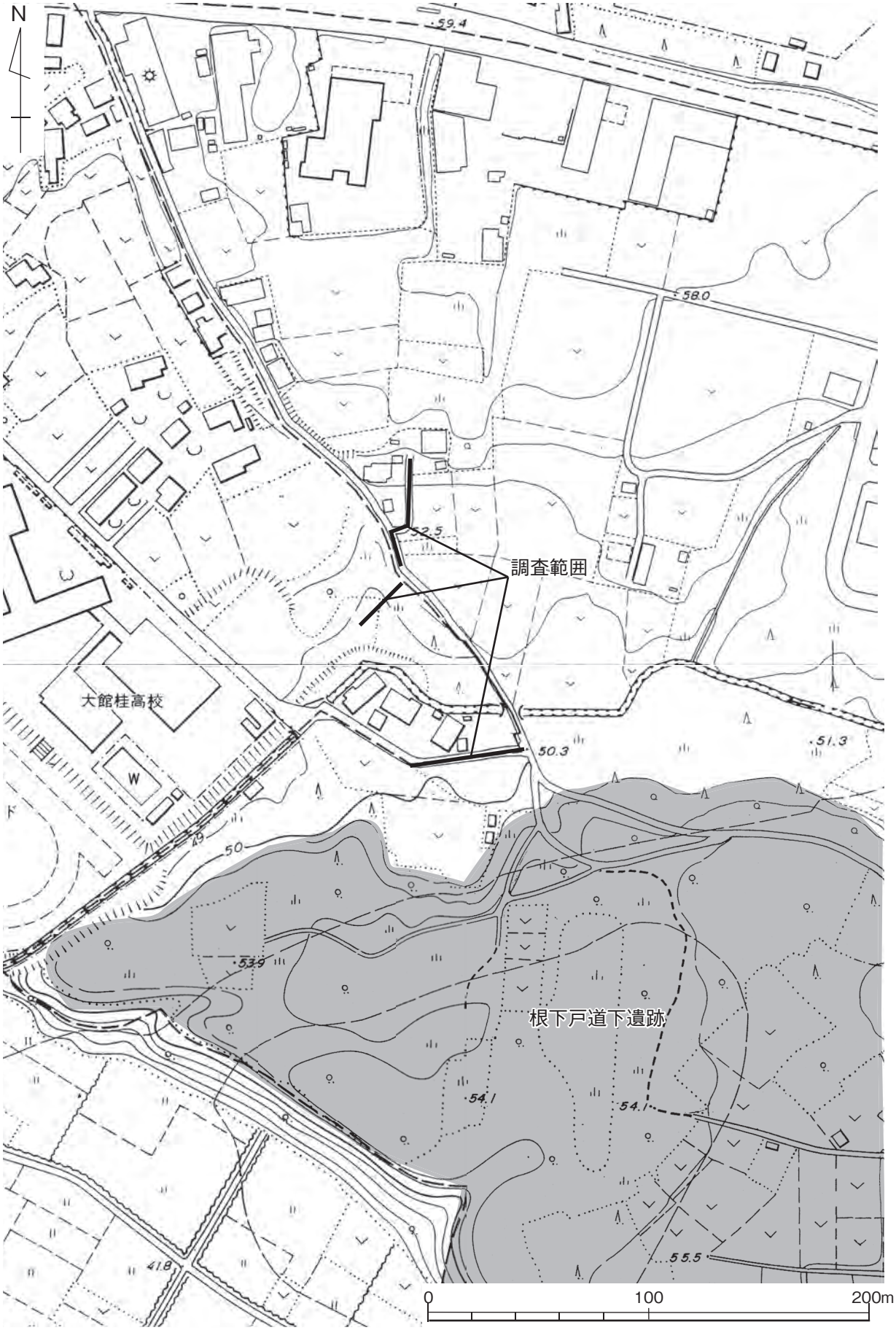


図28　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

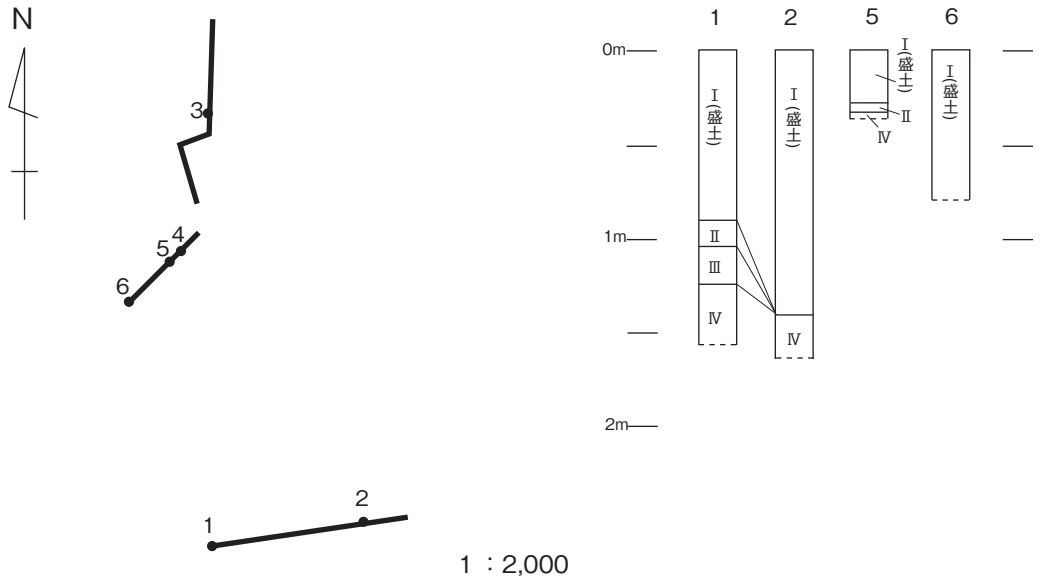


図29　調査位置図

調査地近景

1 調査状況

3 調査状況

5 調査状況

図版16　調査状況

13　福館橋桁野遺跡隣接地（携帯電話無線基地局）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

福館橋桁野遺跡は、下内川左岸台地上に所在する。本遺跡は、古くから知られる縄文～平安時代の集落跡及び遺物包含地である。秋田県教育委員会登載番号は204-4-13である。調査地の位置は遺跡南東部の隣接地にあたる、北緯40度19分30秒、東経140度34分44秒、標高は海抜89ｍである。本遺跡は、奥山潤氏が昭和43・44年度に一部発掘調査を行い、昭和47年度には、大館市史編さん事業として、発掘調査を実施している。この調査により、縄文前期～平安時代にかけての複合遺跡であることが明らかにされている。

福館橋桁野遺跡の周辺には、北約１㎞に大館野遺跡、北西隣に福館跡、東約0.5㎞に橋桁遺跡、南東約0.7㎞に国天然記念物芝谷地湿原植物群落、南西約0.5㎞に福館Ⅱ遺跡、南西約1.2㎞には二ッ森遺跡が分布している。

⑵　調査の内容

今回の調査は、包蔵地の南東側隣接地区約244㎡について実施した。調査区の現況は山林である。調査地内の基本層序は、基盤をなす黒褐色～灰黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土。
Ⅱ層　黒色の色調を示す腐植土層である。
Ⅲ層　黒褐色の色調を示す土層。
Ⅳ層　黒褐色～灰黄褐色の粘土層。

調査区に１×３ｍと１×５ｍのトレンチを１箇所ずつ設定し、調査を実施した。トレンチは人力にて表土を除去した後、地山面と壁面を精査し、埋蔵文化財の有無及び遺物包含層の状況等を調査した。

調査の結果、黒色腐植土層が残存するものの、遺構・遺物は確認されなかった。

⑶　調査の結果

今回の調査は、福館橋桁野遺跡の南東側隣接地について実施した。しかし、上述のとおり、遺構・遺物は確認されなかったため、調査地内が遺跡のエリアに入るとは考えがたい。したがって、今回の調査対象地内には遺跡が存在する可能性は低く、本発掘調査は不要と判断した

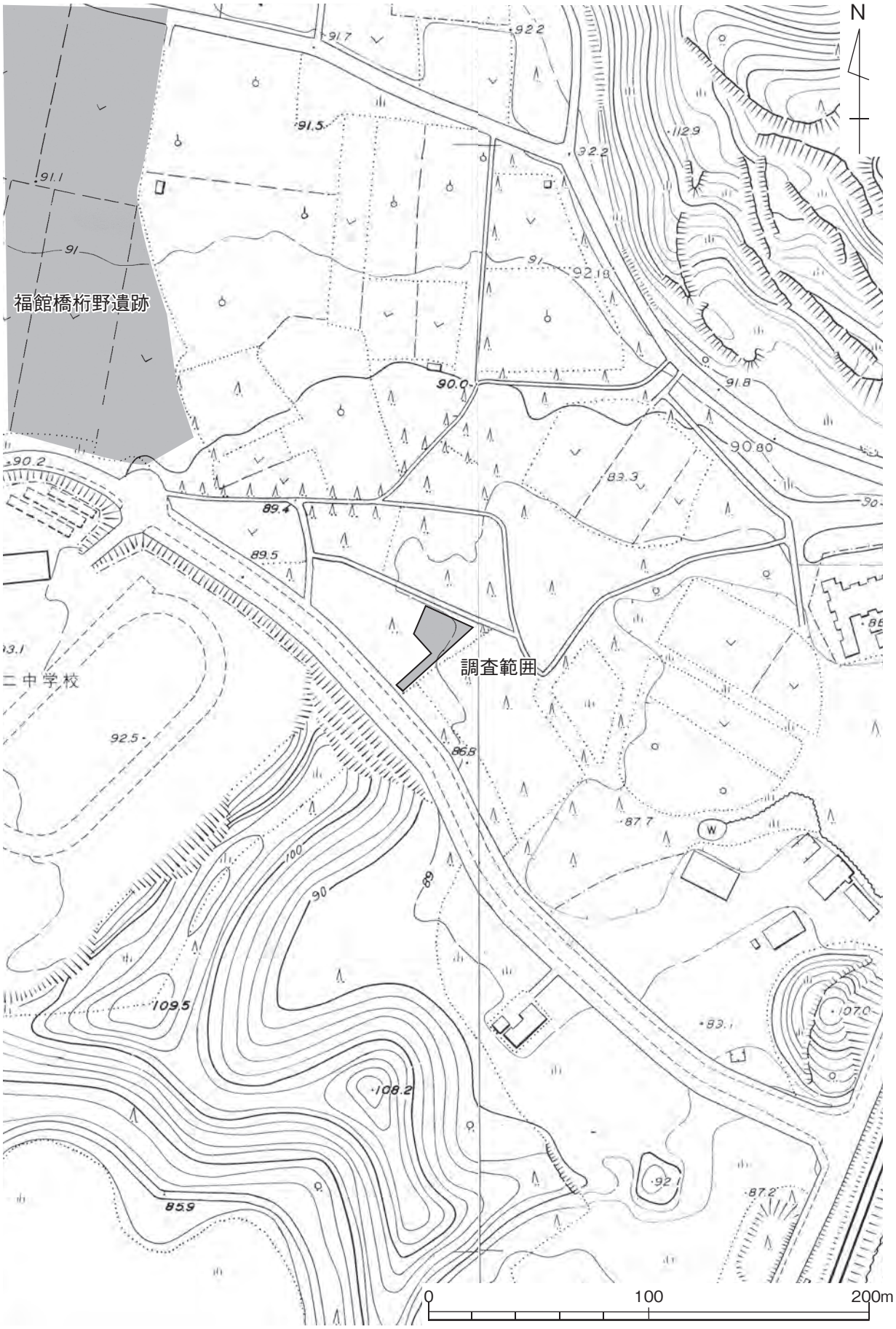


図30　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

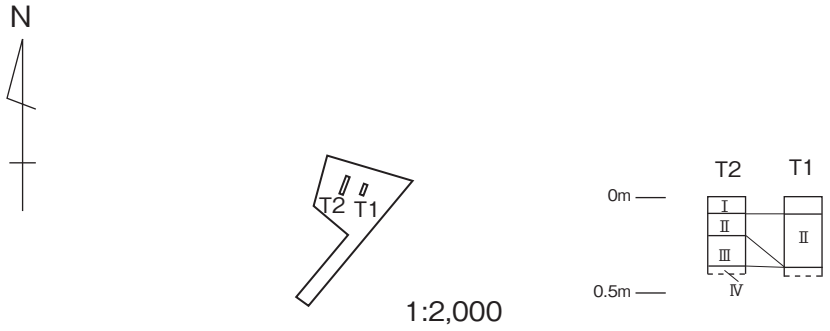


図31　調査位置図

調査区近景

作業状況

T1 調査状況

T2 調査状況

図版17　調査状況

14　矢立廃寺跡（遺跡整備）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

矢立廃寺跡は、下内川右岸段丘上に所在する。本遺跡は、菅江真澄や二階堂道形など江戸時代後期の文献にその存在が記される中世の寺院跡である。秋田県教育委員会登載番号は204-4-4である。遺跡の位置は、北緯40度21分37秒、東経140度35分26秒、標高は海抜120～140mである。本遺跡は、昭和39年度より７回にわたって実施した発掘調査（Ａ～Ｈ区）により、12世紀後半の遺跡であることが明らかにされている。矢立廃寺跡の周辺には、北東約0.5kmのところに松原小立遺跡がある。

⑵　調査の内容

矢立廃寺跡を環境整備及び保存・活用していくためには、遺跡範囲と内容の詳細な確認が不可欠である。しかし、廃寺は立地する小台地の南側を造成し建立されているが、土地造成の範囲や具体的な方法が不明であるなど、未解決の問題が残る。そのため、今回の調査は、これまで未調査となっていた矢立廃寺跡Ｆ区建物跡北西に隣接する地区（Ｉ区）と史跡指定範囲北部の平坦面（Ｊ区）について実施した。Ｉ・Ｊ両地区の現況は原野である。

Ｉ区は、舌状に張り出した痩せ尾根地形となっており、南西部に空堀状の落ち込みが地表面から観察できた。また、痩せ尾根のつけ根にあたる部分には、やや小さな平坦面が確認できる。そのため、尾根の平坦面及び空堀状に落ち込む地点、傾斜面、つけ根にあたる地点にそれぞれ５本のトレンチ（以下「ＴＲ」）を設定、掘開し、遺構・遺物の有無等を調査した。

Ｊ区は、かつて杉が植林されていた場所である。Ｊ区では、矢立廃寺跡の北の境界を明らかにするため、１本のトレンチを設定、掘開し、遺構・遺物の有無等を調査した。

以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土。黒色10YR2/1～黒褐色10YR3/2。

Ⅱ層　黒色10YR1.7/1の色調を示す腐植土層。

Ⅲ層　暗褐色～にぶい黄褐色の色調を示す土層で、本層はその色調により、ａ・ｂに細分される。

Ⅲａ層　暗褐色土10YR3/3の色調を示す土層。十和田ａ降下火山灰層が多量混入する。

Ⅲｂ層　にぶい黄褐色10YR5/4の色調を示す土層。十和田ａ降下火山灰層。

Ⅳ層　暗褐色～褐色の色調を示す腐植土層で、本層はその混入物によりａ・ｂに細分される。

Ⅳａ層　暗褐色10YR3/3の色調を示す土層。Ⅶ層粒が混入する。

Ⅳｂ層　褐色10YR4/4の色調を示す土層。Ⅶ層ブロックが多量混入する。

Ⅴ層　黒褐色10YR2/2の色調を示す土層。

Ⅵ層　暗褐色10YR3/3～3/4の色調を示す土層。Ⅴ層とⅦ層の漸移層である。本層はＴＲ４・５のみに存在し、ａ・ｂに細分される。

Ⅶ層　にぶい黄色2.5Y6/4～黄褐色10YR5/8粘土層。

調査の結果、Ｉ区では、遺構はＴＲ５より溝跡１条を検出し、遺物はＴＲ４より27点を得た。しかし、ＴＲ１～３においては、遺構・遺物は確認されなかった。ＴＲ５では部分的にⅢｂ層が検出されたが、他のトレンチでは確認されなかった。

Ｊ区からは、Ⅱ層が良好に残存していたものの、遺構・遺物は確認されなかった。

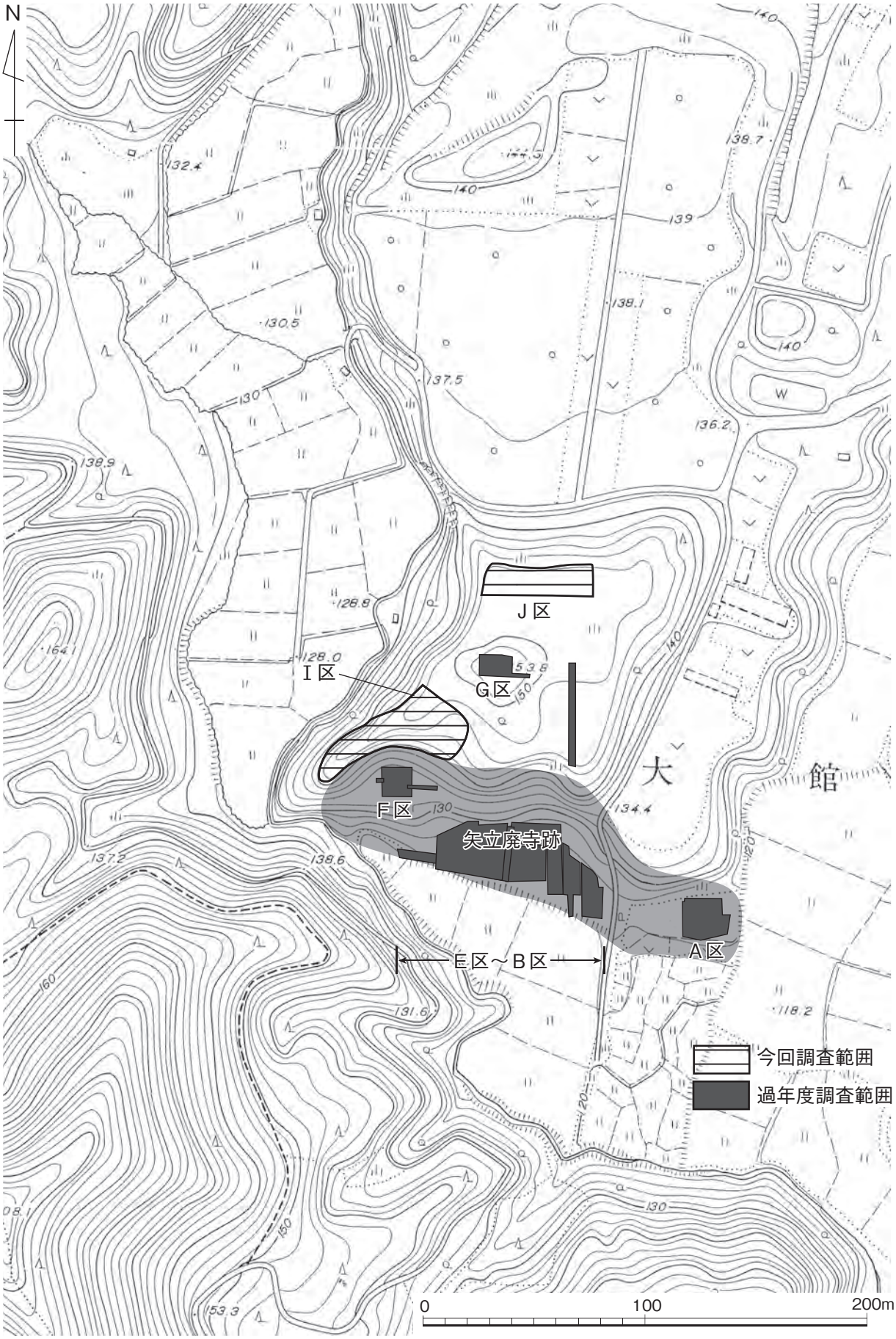


図32　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

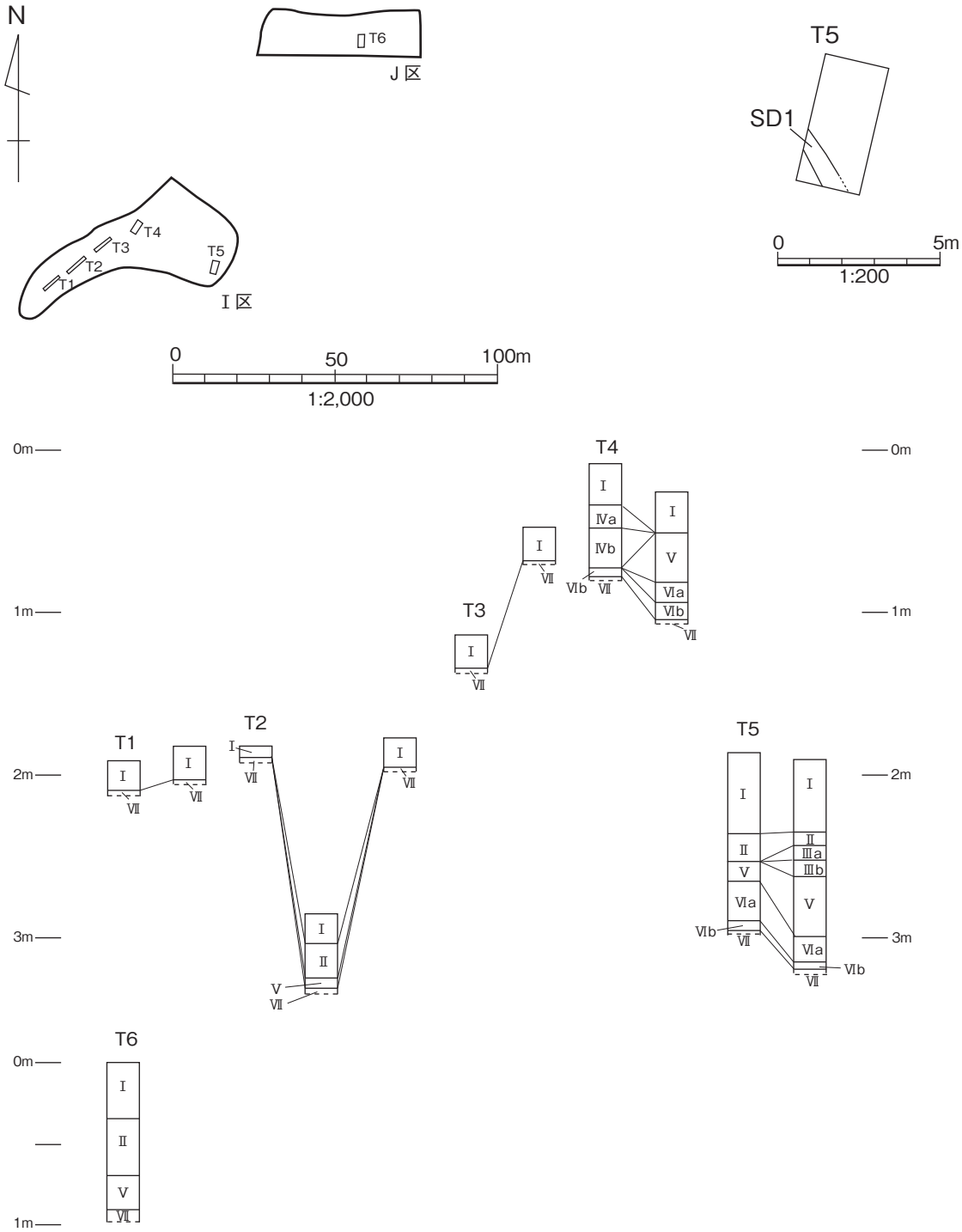


図33　調査位置図

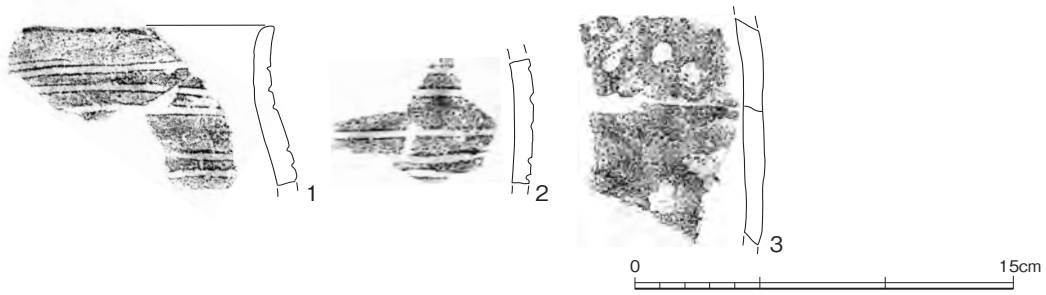


図34　出土遺物

⑶　遺構

溝跡１

遺構　Ｉ区南東部に位置する。ＴＲ５を調査中にⅢ層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。北西から南東にトレンチ外へ伸びる。確認面での規模は幅0.5～0.6mである。一部断ち割りを入れて確認したところ、深さは0.1mほどである。壁はなだらかに立ち上がり、溝底面はほぼ水平である。

堆積土　黒色土10YR1.7/1（Ⅱ層由来土）。

⑷　遺物

遺物は、土器片24点、石器類３点、合計27点である。すべて、Ａ地区から出土した。

1）　土器（図34）

４群　24点出土した。図34－１～３は同一個体とみられ、十腰内Ｉ式に比定されるものと思われる。

2）　石器（図版19）

７類　擦石（５）と石皿が１点ずつ出土した。ほかに有孔の石製品（４）が出土している。

⑸　調査の結果

今回は、Ｉ区とした痩せ尾根状の丘陵縁辺から縄文土器・石器を検出し、史跡指定範囲内に縄文時代の包蔵地が含まれることを再確認した。Ｉ区では、Ｆ建物北西に隣接する痩せ尾根を横断する沢状の落ち込みに対して、空掘を疑った。ＴＲ２の結果から、堆積土に漸移層が存在せず、人為的に掘られた可能性がある。しかし、ＴＲ２周辺からは遺物が確認されず、その性格は明らかではない。

Ｊ区では、ＴＲ６を１本調査したが、遺構・遺物は確認されなかった。Ⅲｂ層が検出されていないため、平安時代以降の土地造成により削平された可能性がある。十和田ａ火山灰の分布する範囲が土地造成されていない場所と考えられるためである。

今回の調査では、矢立廃寺に関係する遺構・遺物は確認されなかった。また、今回は期間の都合上、Ｊ区では、十分な面積を調査することができなかった。矢立廃寺跡の範囲も含めて、今後は矢立廃寺跡北半域の遺構分布及び平安時代後半の土地造成の範囲を明らかにするため、調査していく必要がある。

表 10　種別遺構一覧

溝跡	計
1	1

表 11　出土遺物一覧

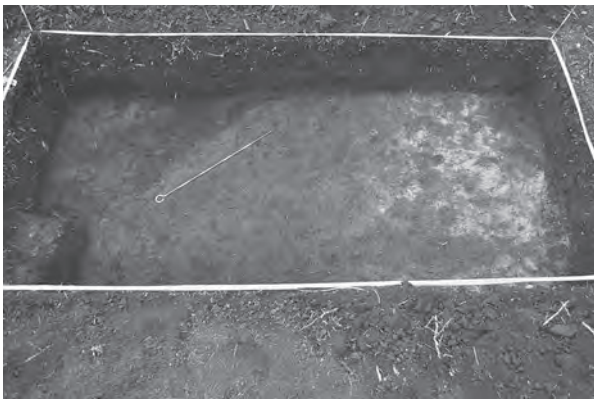
分類 / 調査区	P		S			合計
	4	計	1 / 7	4	計	
ＴＲ４	24	24	2	1	3	27

Ⅰ区西部近景

Ⅰ区T1 調査状況

Ⅰ区T2 調査状況

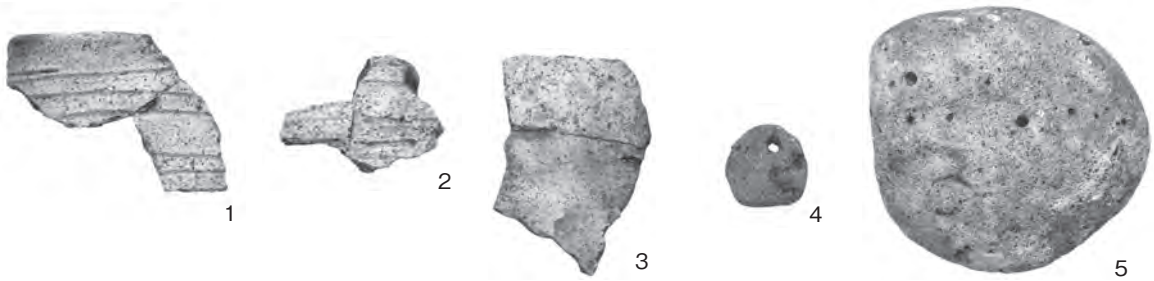
Ⅰ区T4 調査状況



Ⅰ区T5検出SD1

J区近景

図版18　調査状況



図版19　出土遺物

第３章　比内地区の調査

１　長岡城跡（ケアハウス）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

比内地区に分布する遺跡の多くは米代川の支流域に分布している。それらの支流域には、多くの沢が発達し、丘陵を開析する。その支流の一つの犀川下流右岸に長岡城跡は所在する。

長岡城跡は、古くからその存在が知られる中世の城跡である。秋田県教育委員会登載番号は204-12-17である。遺跡の位置は、北緯40度13分12秒、東経140度35分１秒、標高は海抜70～73ｍである。本遺跡における本発掘調査の履歴はないが、平成９・10年頃、道の駅「ひない」の駐車場造成の際、秋田県教育委員会による工事立会調査が実施されている。

長岡城跡の周辺には、北東約0.8㎞のところに市川遺跡、東約0.8㎞に大岱遺跡、南約0.8㎞に真館跡が分布している。

⑵　調査の内容

今回の調査は、長岡城跡の東部にあたる地区について実施した。現況は宅地、畑地、原野である。調査地内に、９本のトレンチ（以下「ＴＲ」）を設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。

遺跡の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土及び耕作土。

Ⅱ層　黒色の色調を示す土層。

Ⅲ層　黒色の色調を示す土層で、近世～現代にかけての遺物が本層に含まれている。

Ⅳ層　黒色～黒褐色の色調を示す腐植土層で、本来の遺物包含層である。

Ⅴ層　暗褐色の色調を示す土層。Ⅳ層とⅥ層の漸移層である。弥生時代・近世の遺物は本層からも出土している。しかしながら、本層出土の遺物は出土状況などから推測すると、本来本層に含まれていたものではなく、樹木の根などによる混入遺物とみられる。

Ⅵ層　黄褐色粘土層。

調査の結果、調査地全体にわたり、耕作のため掘削・削平されていた。検出した遺構は、ＴＲ１より柱穴18個、ＴＲ２より溝跡３条、土坑３基、柱穴15個、ＴＲ３より溝跡２条、土坑２基、柱穴９個、不明遺構２基、ＴＲ４より土坑１基、柱穴30個、ＴＲ５より溝跡１条、土坑？４基、柱穴14個、不明遺構１基、ＴＲ６より溝跡２条、土坑１基、柱穴20個、ＴＲ７より溝跡２条、土坑１基、柱穴２個、ＴＲ８より堀跡１条、溝跡１条、柱穴９個、ＴＲ９より堀跡１条、溝跡２条、柱穴６個、遺物は遺構外を中心に143点を得た。

⑶　遺構

堀跡１（図38）

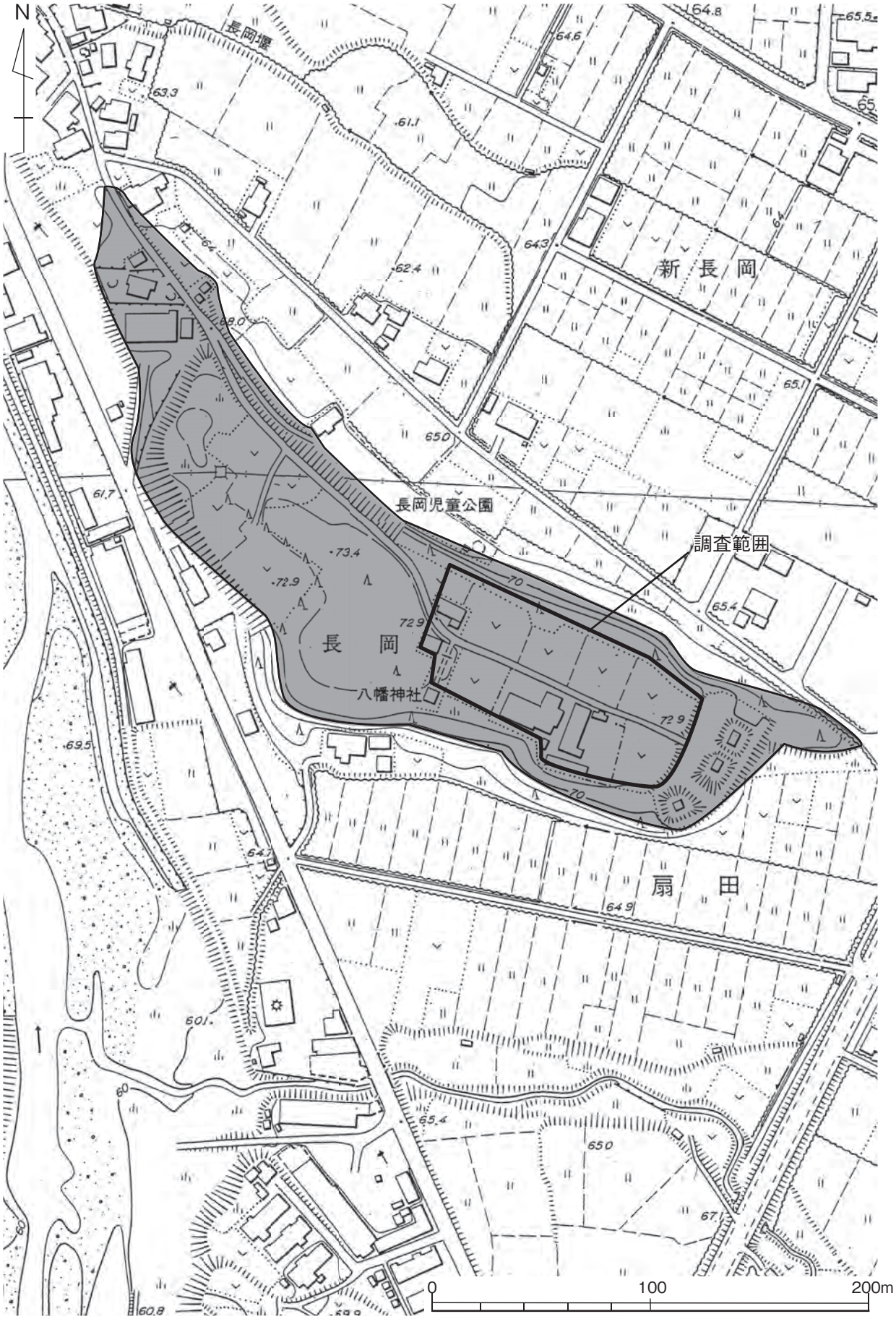


図35　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

遺構　調査区西部に位置する。ＴＲ８を調査中に黒色土の落ち込みがあったことから、トレンチを拡張し、堀跡とみられる大型の溝跡を発見した。また、その方向からＴＲ９を設定したところ、同様の堀跡を検出した。これが同一のものであれば、長さは35m以上、確認面での規模は幅2.5m、深さ0.82mほどである。壁はやや急斜度で立ち上がり、底はほぼ平坦である。

堆積土　黒色土（Ⅳ）を主体とする。

遺物　堀跡１から出土した遺物は、陶磁器４点である。いずれも近世のものである。

⑷　遺物（図39）

堀跡１以外の遺物は、土器片９点、陶磁器片127点、鉄製品２点、合計138点である。

土器・陶磁器

５群　５群とみられるものは３点出土した。図39－１は撚りの細かいＬＲ斜行縄文を施す。内面はていねいなミガキ。２は、蓋または土製品とみられ、内面に黒色の付着物がある。

⑸　調査の結果

今回は、調査区内の各箇所から柱穴等の埋蔵文化財を発見し、包蔵地であることが確認された。特に調査区北西部から堀跡とみられる大型の溝が確認されたことは、調査の成果と言える。調査地内における遺物包含層は近世以降の耕作により消失していたものの、遺構密度は希薄ながらも全域に分布していることから、本発掘調査が必要と判断した。

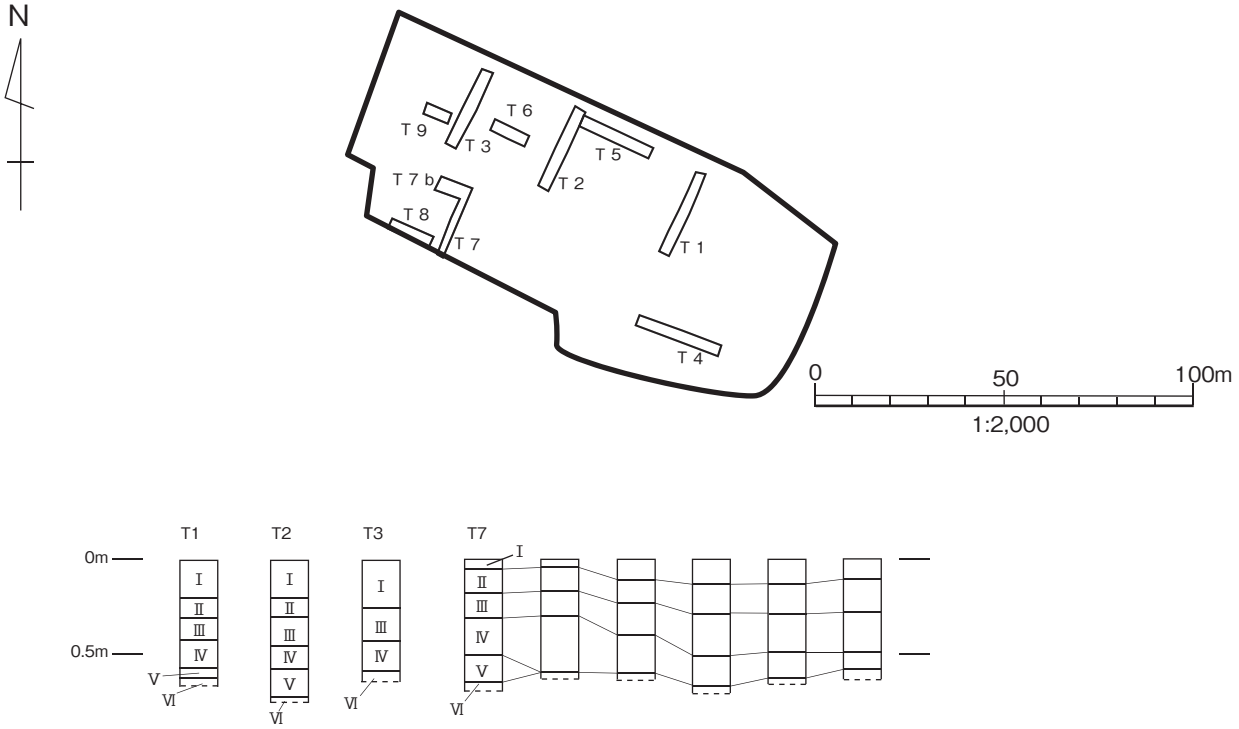


図36　調査位置図

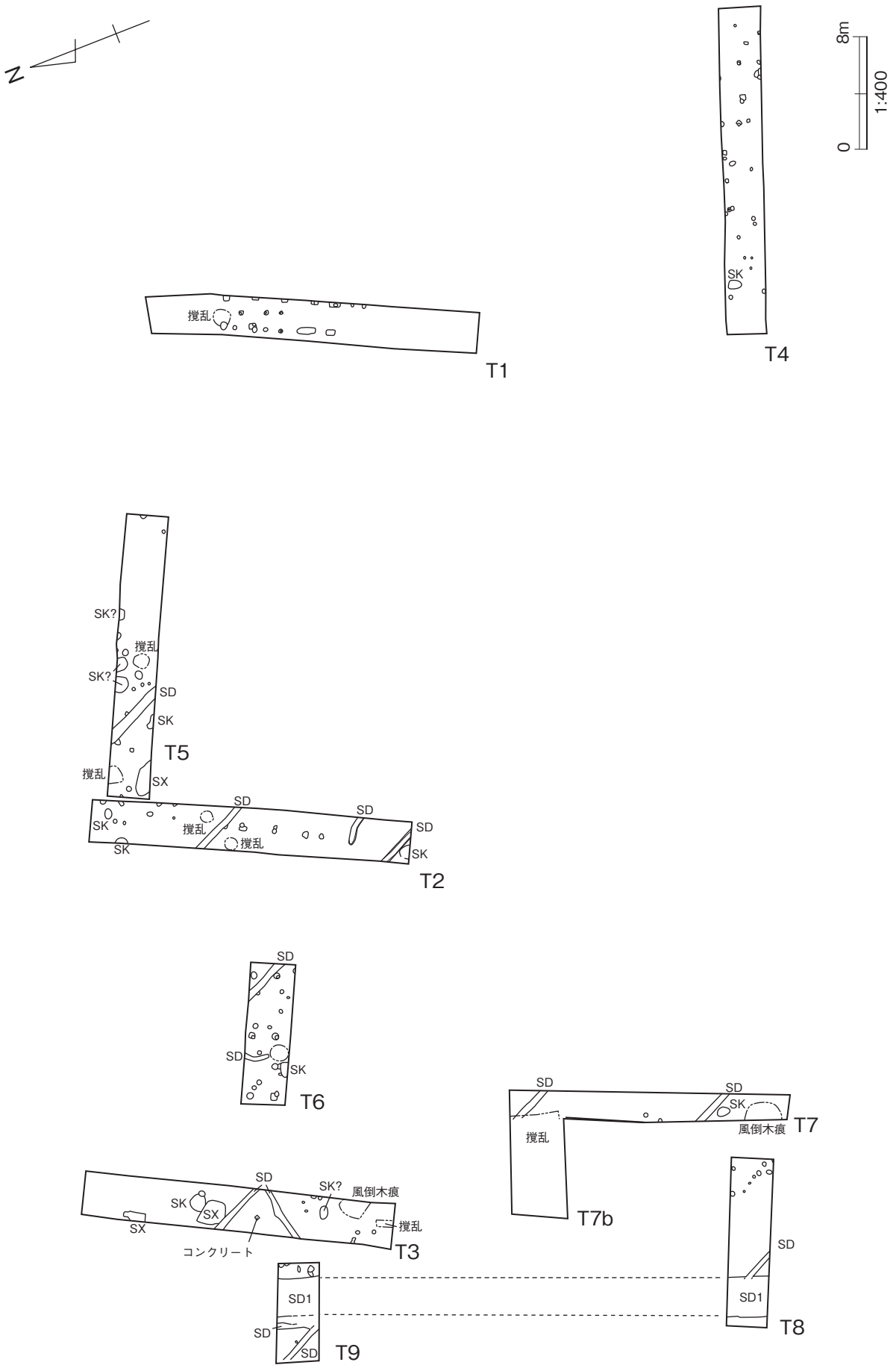
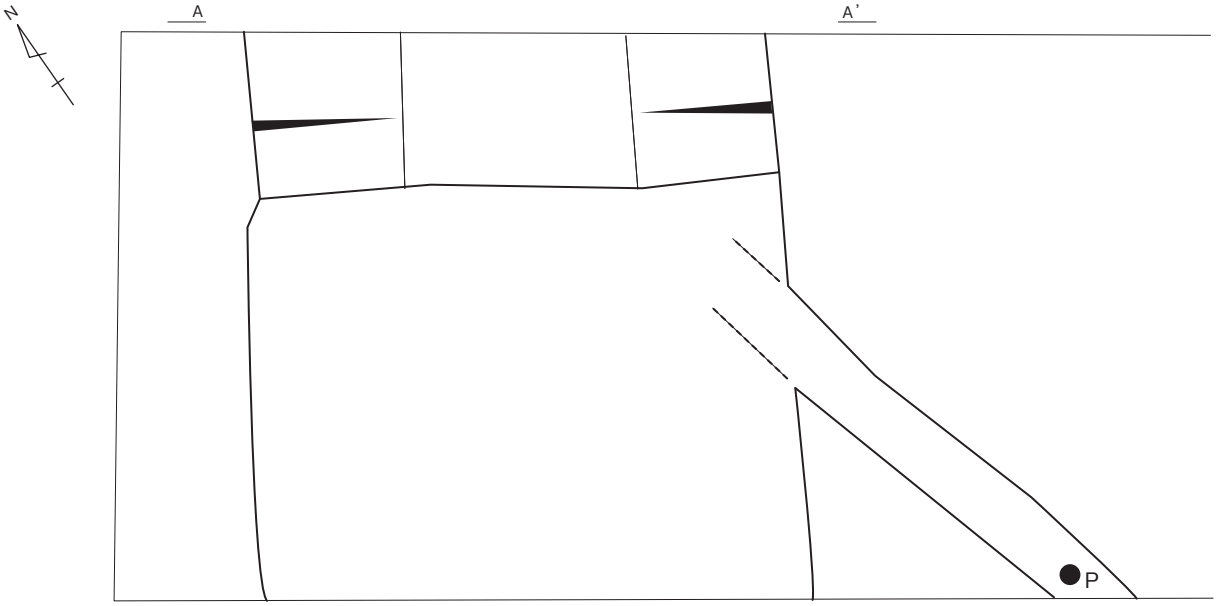
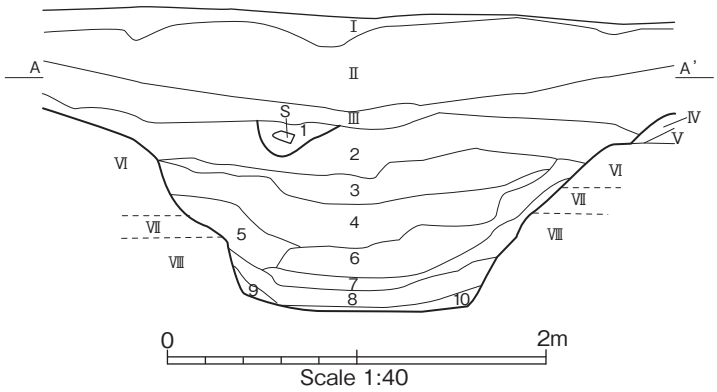

N
8m
0
1:400
SK
T4
撹乱
T1
SK?
撹乱
SK?
SD
SK
T5
撹乱
SX
SD
SD
SK
撹乱
撹乱
SD
SK
SK
T2
SD
SD
SK
T6
SD
SD
SK
風倒木痕
T7
撹乱
T7b
SD
SK?
風倒木痕
SK
SX
SX
撹乱
コンクリート
T3
SD
SD1
SD
SD
T9
SD
SD1
T8

図37　検出遺構図





1　黒色土（10ＹＲ1.7/1）　柔らかい。近代以降の溝跡。
2　黒色土（10ＹＲ1.7/1）　Ⅲより暗い。
3　黒色土（10ＹＲ1.7/1）　２より明るい。
4　黒色土（10ＹＲ1.7/1）　２と同じ。
5　黒色土（10ＹＲ1.7/1）　４より暗い。
6　黒褐色土（2.5Ｙ3/2）
7　黒色土（10ＹＲ1.7/1）
8　黒褐色土（2.5Ｙ3/1）
9　黒色土（10ＹＲ2/1）
10　黒色土（10ＹＲ1.7/1）

図38　堀跡１

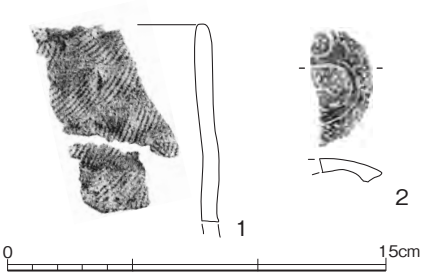


図39　出土遺物

表 12　種別遺構一覧

堀跡	土坑	溝跡	柱穴	計
1	12	12	121	146

表 13　遺構出土遺物一覧

分類 / 調査区遺構	P	合計
	8	
ＳＤ1	4	4
ＳＤ	3	3
ＳＫ？	3	3
合計	10	10

表 14　出土遺物一覧

分類 / 調査区	P					鉄製品	合計
	4	5	6	8	計		
ＴＲ1	1			4	5		5
ＴＲ2			2	1	3	2	5
ＴＲ3			1		1		1
ＴＲ4		3	1		4		4
ＴＲ5				6	6		6
ＴＲ6				5	5		5
ＴＲ7			1	10	11		11
ＴＲ7b				36	36		36
ＴＲ8				41	41		41
ＴＲ9				12	12		12
表採				16	16	1	17
合計	1	3	5	131	140	3	143

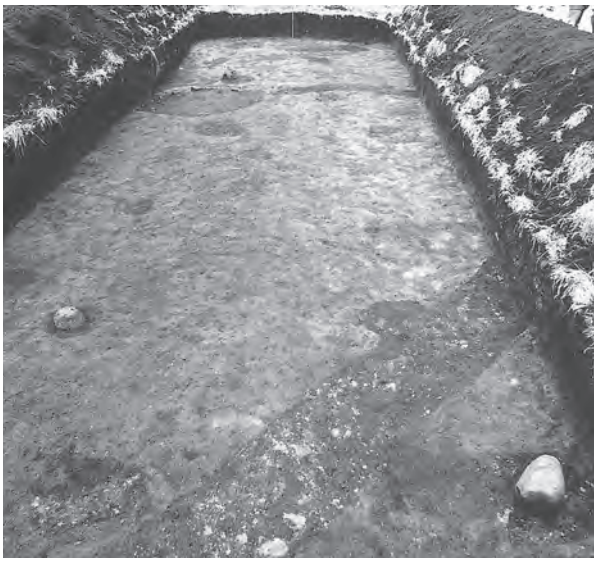
遺跡遠景

T1 調査状況

T8 堀跡1

図版20　調査状況

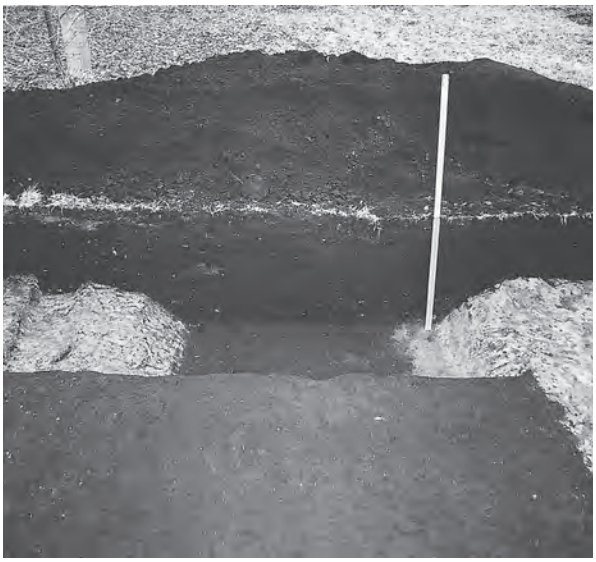
調査区近景



T6 調査状況

調査区近景（T8付近）

T8 堀跡1検出状況



T9堀跡1調査状況

出土遺物

図版21　調査状況と出土遺物

２　只越下遺跡（携帯電話無線基地局）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

只越下遺跡は、米代川の支流の一つである味噌内川の中流域右岸に所在する。遺跡の位置は、北緯40度12分１秒、東経140度37分９秒、標高は海抜115～120mほどである。只越下遺跡の周辺には、只越を越えた北東約0.8㎞に陳場岱遺跡と陳場岱Ⅱ遺跡が分布している。

⑵　調査の内容

今回の調査は、開発予定地区約350㎡について実施した。調査箇所の現況は、畑地である。２本のトレンチを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び黒色腐植土層の残存状況等を調査した。調査の結果、土地造成により包含層は残存していなかった。遺構はＴＲ１より焼土（土坑）１箇所、ＴＲ２より土坑１基、柱穴２個、遺物は焼土下の土坑から20点を得た。

⑶　遺構

焼土（土坑）１

遺構　ＴＲ１の調査中に検出した。土の色調はオレンジがかった赤褐色である。焼土内にトレンチを設定、発掘したところ、焼土下から土坑を検出したため、半截した。

遺物　焼土（土坑）１から出土した遺物は、土器16点、石器類４点である。図41-１～３は、土師器である。器面にケズリ、ナデを施す。４は砥石である。一部に敲打による凹みがある。

⑷　調査の結果

今回の調査により、平安時代の遺構・遺物が検出されたことから、新規の埋蔵文化財包蔵地として周知資料に登載することとした。新規に登載した埋蔵文化財包蔵地の概要は、以下のとおりである。

遺跡の名称　只越下遺跡
登載番号　204-12-48
種　　別　散布地
時　　代　平安時代
所 在 地　比内町味噌内字只越下２・４・５番地
推定面積　約6,000㎡
標　　高　116～120m
遺跡の現状　畑地

今回の調査の結果、図43に示したとおり、調査地を包括する範囲を保護措置の必要な範囲と考える。しかし、包含層は残存していなかったため、道路より南側については造成工事により、遺跡のほとんどの部分は消失している可能性が高い。よって、道路以南については、措置の内容は、工事立会等の軽微なものが妥当と判断した。

なお、平成22年１月16日に原因者の協力のもと、工事立会調査を実施した。

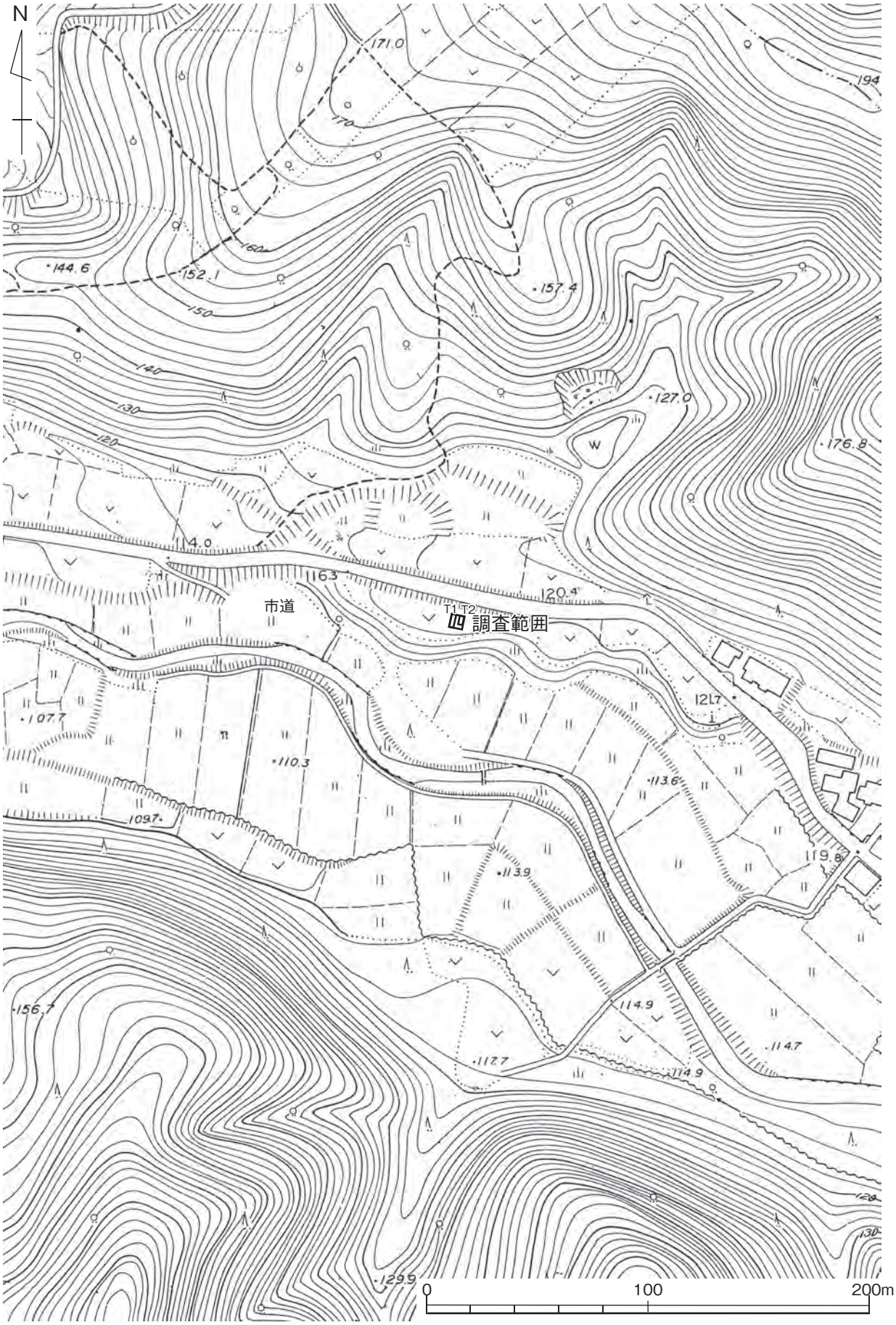


図40　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

表15　種別遺構一覧

土坑	焼土(土坑)	柱穴	計
1	1	2	4

表16　出土遺物一覧

分類 / 調査区	P		S			合計
	6	計	1 / 7	4	計	
TR1	16	16	1	3	4	20

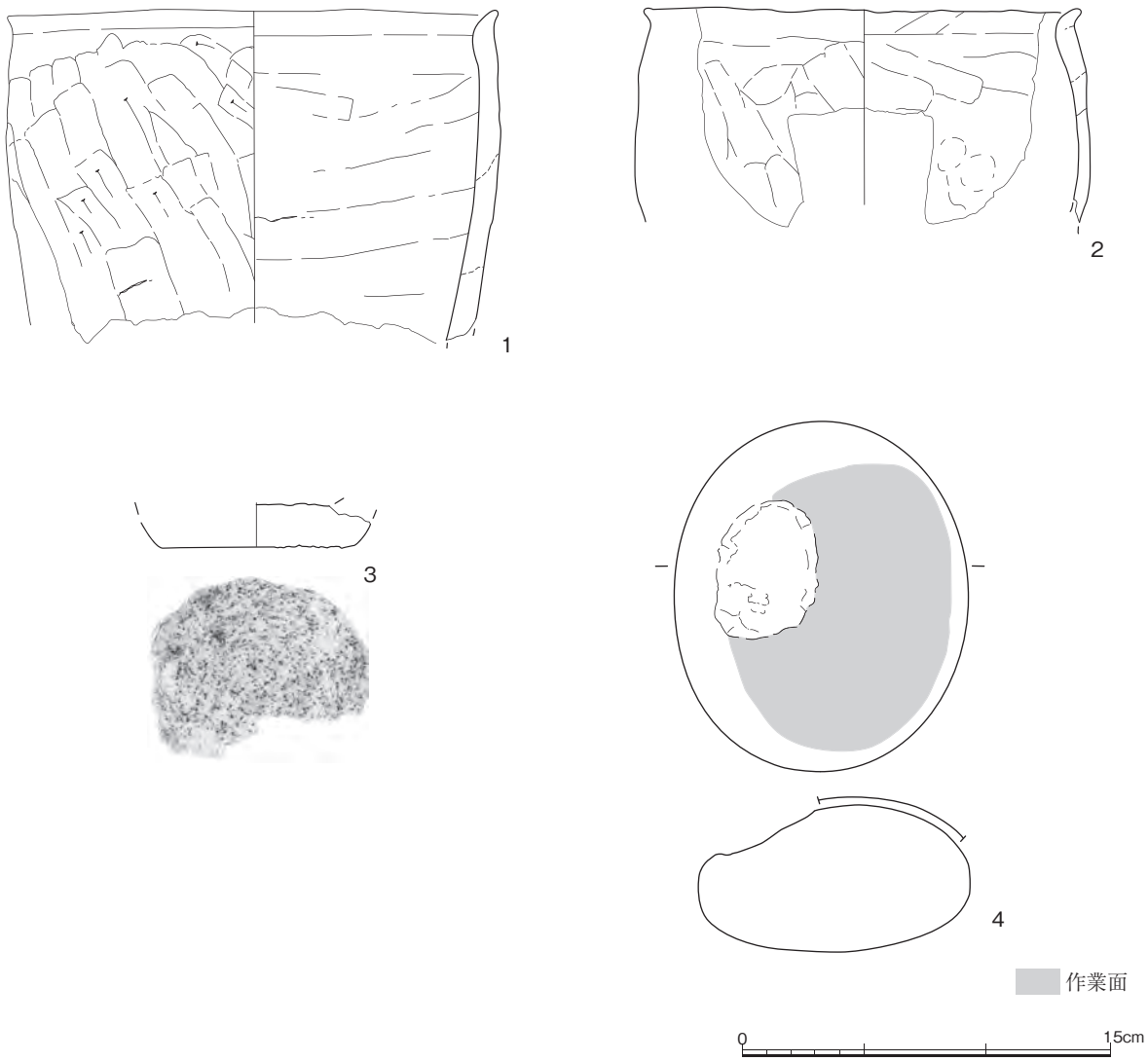


図41　出土遺物

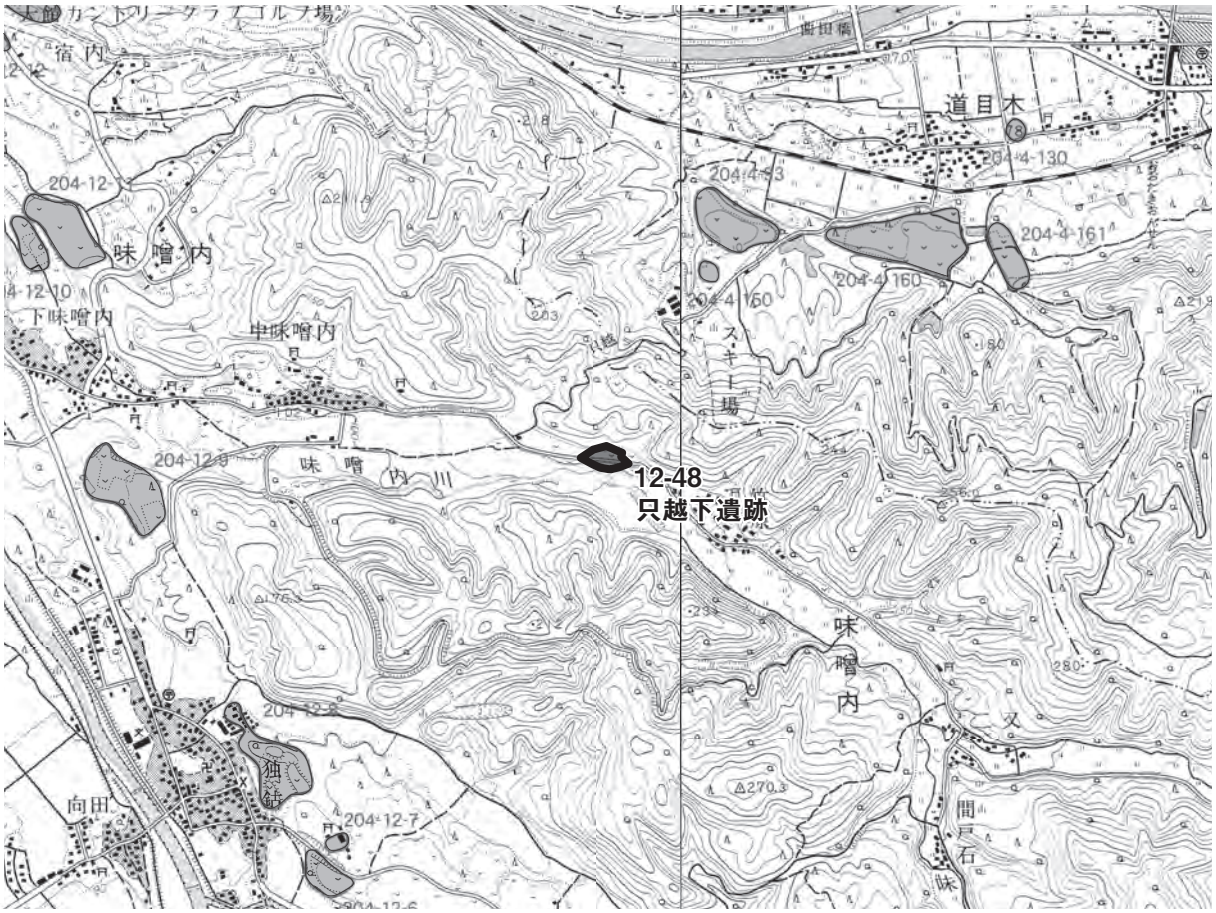


図42　只越下遺跡の位置（1：25,000）

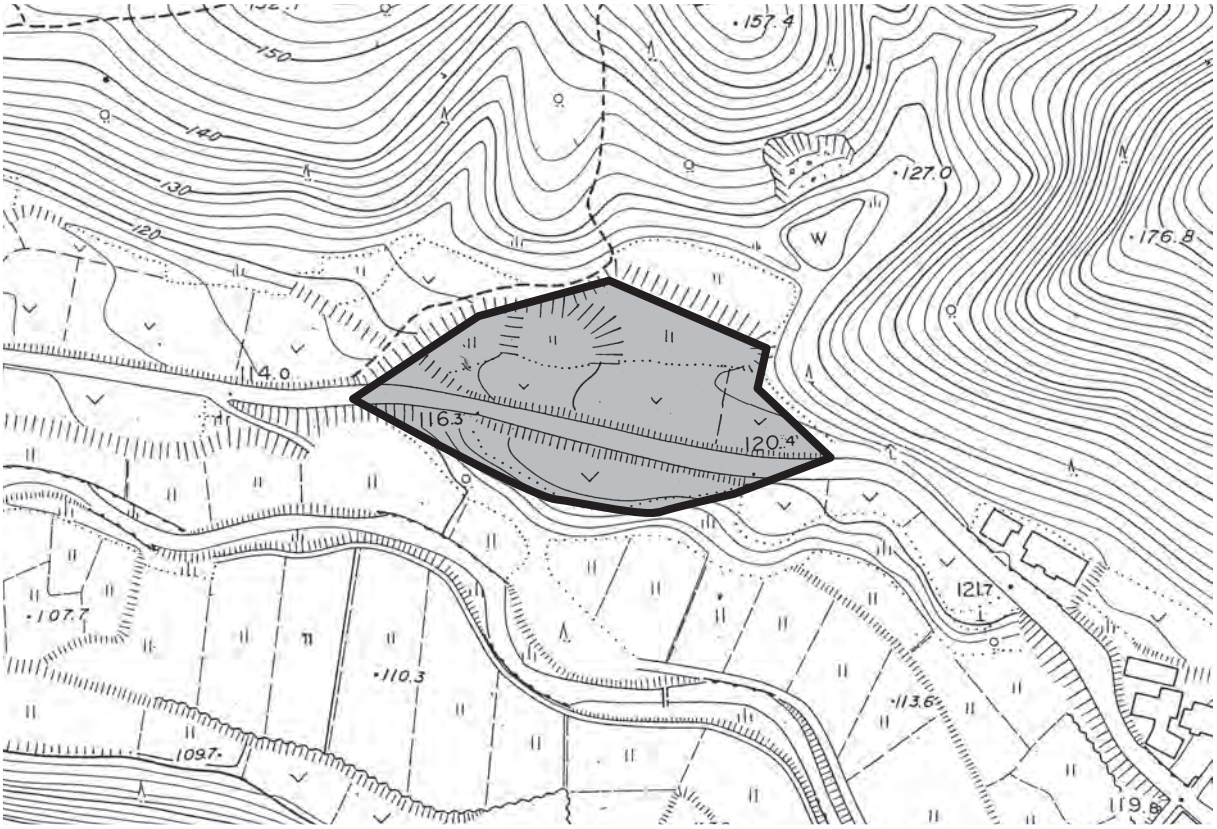
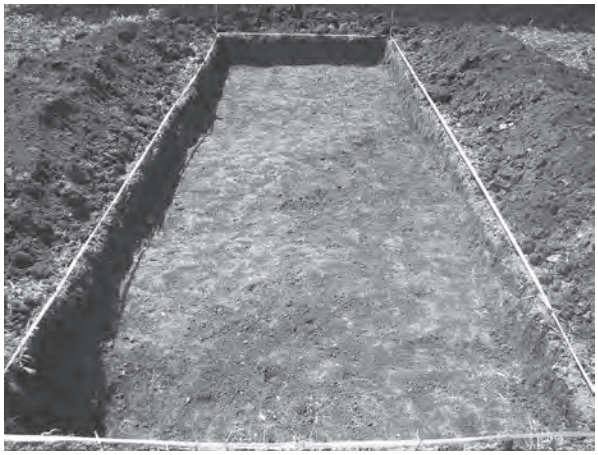


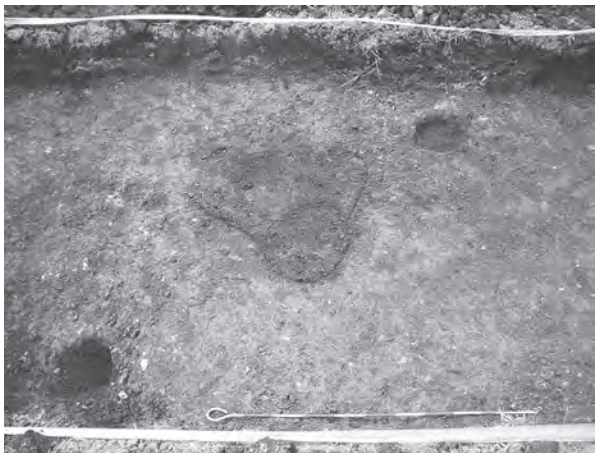
図43　只越下遺跡と周辺の地形（1：2,500）

調査区近景



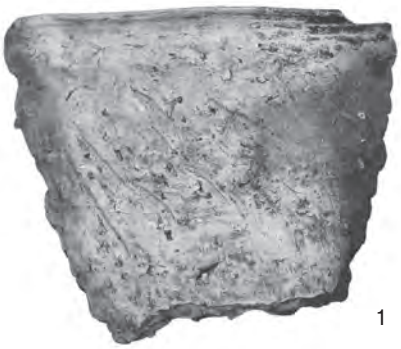
T1 調査状況

焼土（土坑）1

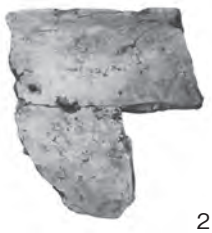


T2 調査状況

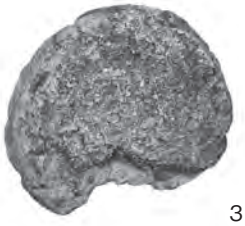
図版22　調査状況



1



2



3

4

図版23　出土遺物

３　白沢水沢地区（携帯電話等エリア整備）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地南西部に位置する。調査地の地番は比内町白沢水沢字堤下11番地で、平成21年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは丘陵を開析する沢の流域に分布する。調査地は、沢が縦断しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。調査地内の標高は、海抜150mほどである。

⑵　調査の内容

今回の調査にあたり、任意のトレンチを設定し、人力作業により掘開した。

⑶　調査の結果

調査地内は表土下にローム層があり、黒色腐植土は存在していない。遺構は確認されなかった。遺物は縄文土器等が33点得られたが、地主からの聞き取りで、畑地にするために客土したとのことである。以上の結果から、調査地内には、埋蔵文化財は分布しないため、本発掘調査は不要と判断した。

表 17　出土遺物一覧

分類	P			S		合計
調査区	3	6	計	2	小計	
ＴＲ	18		18	2	2	20
表採	6	6	12	1	1	13
合計	24	6	30	3	3	33

調査区近景

調査状況

図版24　調査状況

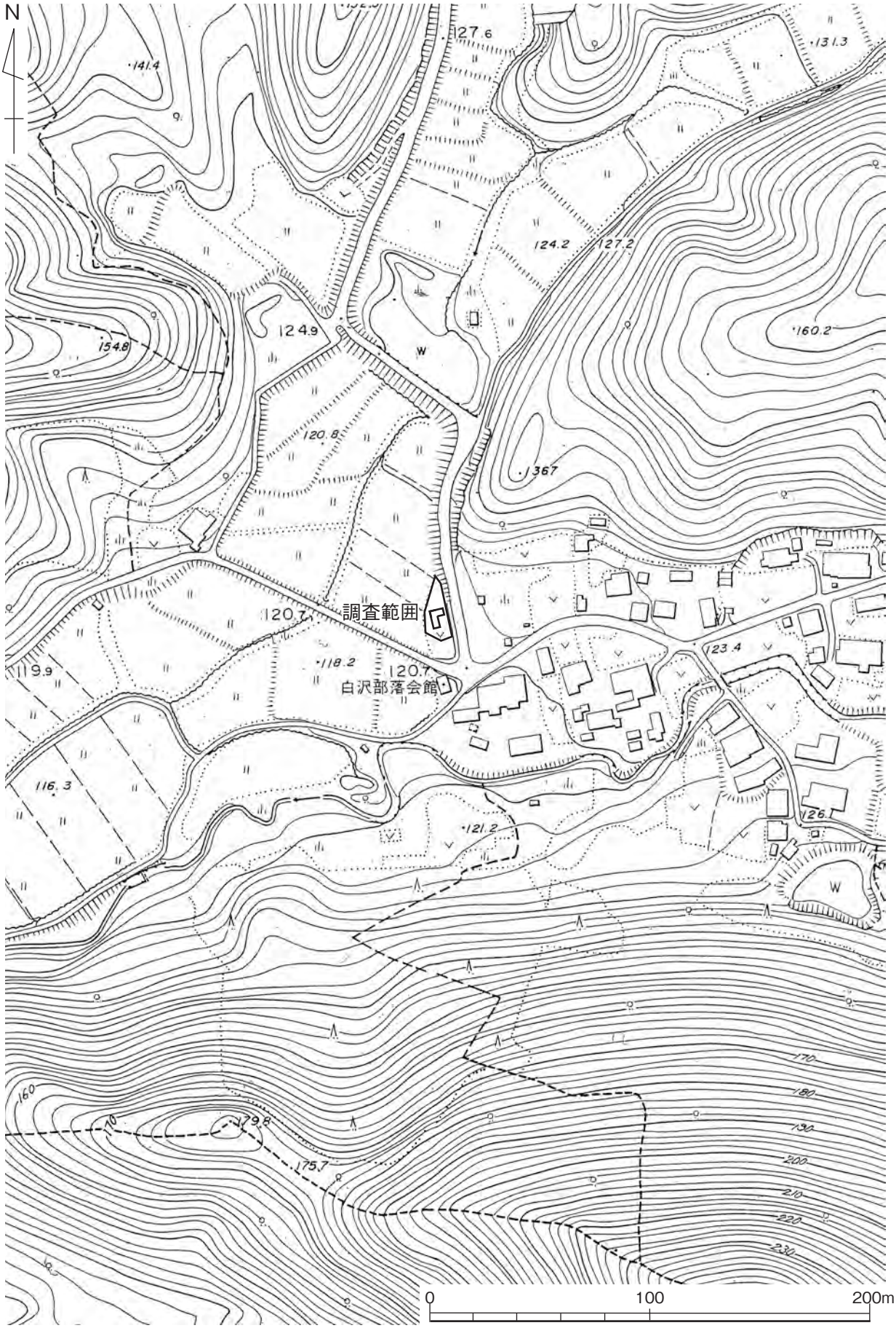


図44　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

４　小坪沢地区（携帯電話等エリア整備）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地南西部に位置する。調査地の地番は比内町小坪沢字屋敷岱21－１番地で、平成21年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは丘陵を開析する沢の流域に分布する。調査地は、沢が縦断しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。調査地内の標高は、海抜130mほどである。

⑵　調査の内容

今回の調査にあたり、任意のトレンチを設定し、人力作業により掘開した。

⑶　調査の結果

調査地内は、黒色腐植土層が残存するものの、遺構・遺物は確認されなかった。調査の結果から、調査地内には、埋蔵文化財は分布しないため、本発掘調査は不要と判断した。

調査区近景

調査状況

図版25　調査状況

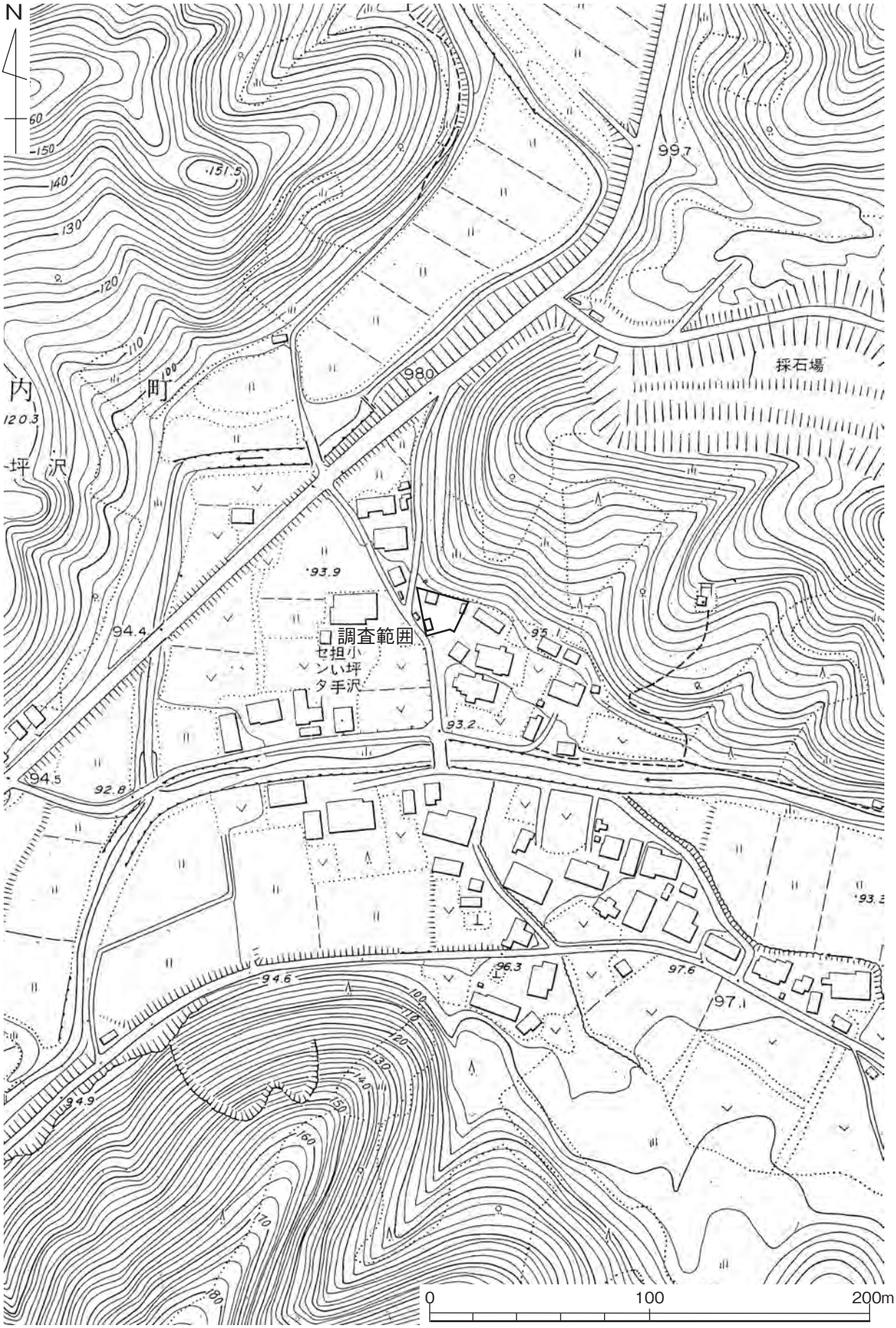


図45　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

５　中野地区（携帯電話無線基地局）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地南部の微高地に位置する。調査地の地番は比内町中野字前田尻73番地で、平成21年度に実施した。埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。

⑵　調査の内容

トレンチは任意で２本設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、基盤層である黄色砂質土層まで掘り下げ､埋蔵文化財の有無等を調査した。調査地内は黒色粘質土層が良好に残存するものの､遺構･遺物は確認されなかった。

⑶　調査の結果

以上の結果、調査地内には埋蔵文化財は分布しないため、本発掘調査は不要と判断した。

調査区近景

人力による精査

T1 調査状況

T2 調査状況

図版26　調査状況

図46　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

６　味噌内館下遺跡（公共下水道）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地南東部の丘陵に位置する。調査地の地番は比内町味噌内字館下７番地ほかで、平成22年度に実施した。大館市内の遺跡の多くは米代川支流域に分布する。調査地周辺にもいくつか遺跡が分布し、埋蔵文化財の所在する可能性がある地区であることから、調査を行った。

⑵　調査の内容

大館市公共下水道工事が計画されているため、事前に試掘・所在確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無及び黒色腐植土層の残存状況等を調査した。調査は３回にわたり実施し、１・２回目の調査は宅地付近の道路、３回目の調査は神社前の道路を対象に実施した。

１回目の調査は９月14日に実施した。３個のテストピット（以下「ＴＰ」）を設定、掘開し、調査した。調査地内の基本層序は基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。ただし、後述するようにⅣ層の下に砂礫層が堆積する。

Ⅰ層　道路の盛土。
Ⅱ層　黒色の色調を示す腐植土層である。
Ⅲ層　黒褐色の色調を示し、Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。
Ⅳ層　黄褐色～暗オリーブ灰色の色調を示す粘土層。
Ⅴ層　褐色の砂礫層。

調査の結果、調査地の東側は、道路造成工事により削平されていたものの、遺構はＴＰ１より溝跡？１条、柱穴２個、ＴＰ２より土坑２基、遺物はＴＰ１溝跡上面より近世陶磁器１点を得た。

以上のように、新たな埋蔵文化財が発見されたため、包蔵地と推定される範囲の内部にあたる地区（Ａ地区）とそれに隣接する地区（Ｂ地区）について再度、試掘・所在確認調査を実施した。

Ａ地区では、２本のトレンチ（以下「ＴＲ」）と２個のテストピットを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、ＴＲ１の東部からＴＲ２の西部の間ではⅡ～Ⅳ層が検出されず、Ⅰ層以下は砂礫層（Ⅴ層）が確認されるだけであった。遺構はＴＲ１より竪穴状遺構４基（ＳＩ４・６・８・10）、土坑10基（ＳＫ１・５・７・９）、溝跡３条（ＳＤ３）、柱穴32個、ＴＲ２より竪穴状遺構２基（ＳＩ12・19）、柱穴列１条（ＳＰ14・15・18）、土坑１基（ＳＫ17）、溝跡１条、柱穴19個、遺物はＴＲ１・２より67点を得た。

Ｂ地区では、３個のテストピットを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び黒色腐植土層の残存状況等を調査した。調査の結果、Ｂ地区の大半は、道路造成工事により削平されていたものの、東側の一部では黒色腐植土層が残存していた。遺構はＴＰ８より土坑１基を検出したが、遺物は得られなかった。

⑶　遺構

1）　竪穴状遺構

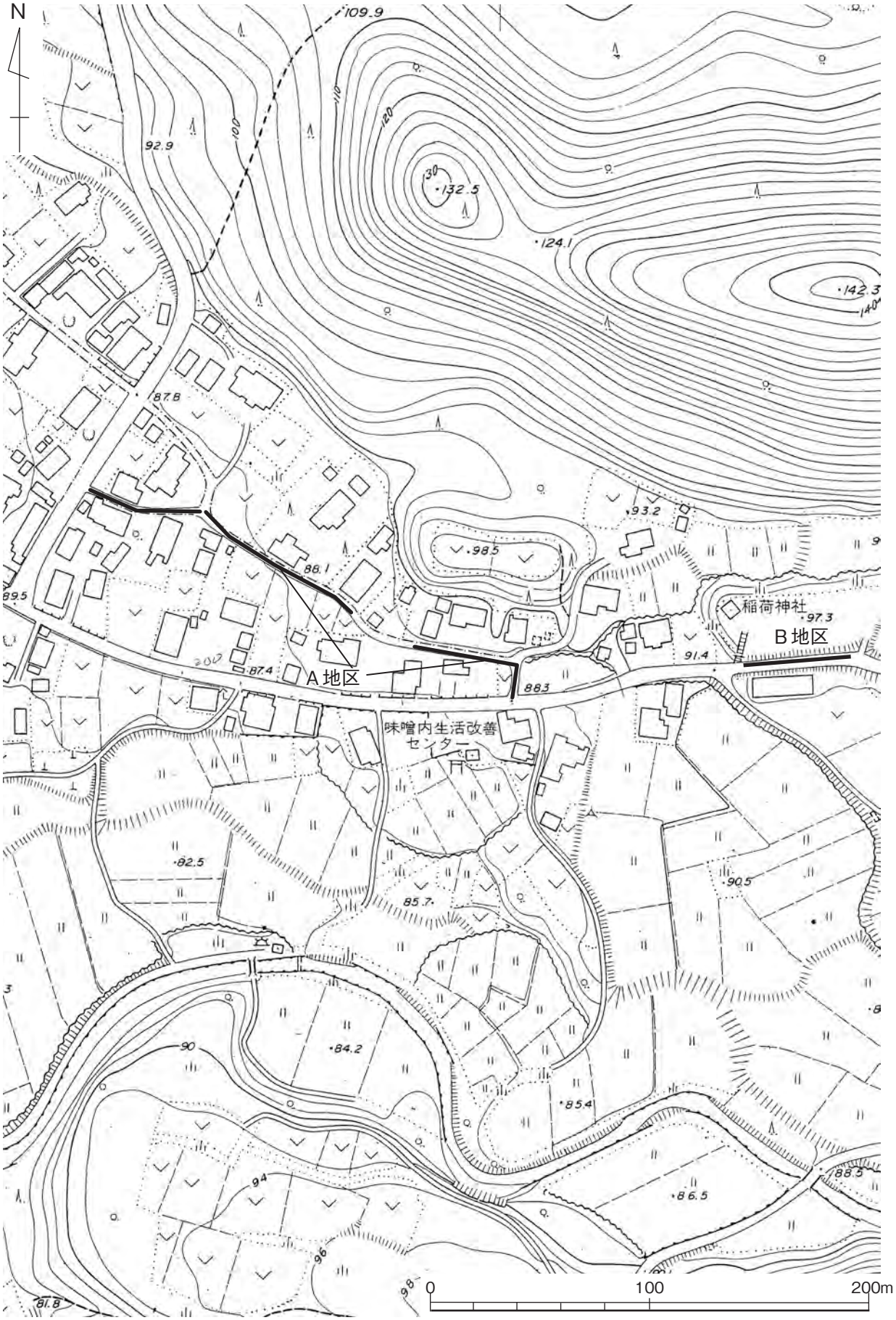


図47　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

ＴＲ１・２を調査中に黒色土の落ち込みがあったことから確認した。６基いずれも一部のみの検出で、全体形は不明だが、方形を呈すると思われる。確認面での規模は径1.15～3.68mほどで、深さは0.3mほどである。このうちＳＩ10はＴＲ１北端で、礫、土師器を伴う焼土と溝として確認したもので、平安時代の竪穴住居跡と考えられる。

2）　**柱穴列**

検出した柱穴は調査区全体に分布する。ＳＰ14･15･18は、径0.25mほどで、約1.8m間隔で並んでいる。柱穴は調査区外に並ぶ可能性があり、用途等は不明である。

⑷　**遺物**

遺物は、土師器片３点、近世～近代陶磁器片61点、礫３点、合計67点である。Ａ地区から出土した。

⑸　**調査の結果**

Ａ地区では平安時代及び近世の遺構・遺物が検出されたことから、新規の埋蔵文化財包蔵地として周知資料に登載することとした。新規に登載した埋蔵文化財包蔵地の概要は、以下のとおりである。

遺跡の名称　味噌内館下遺跡
登載番号　204-12-49
種　　別　集落跡
時　　代　平安時代、近世
所 在 地　比内町味噌内字館下７番地ほか
推定面積　約5,700㎡
標　　高　87～90m
遺跡の現状　宅地、道路、畑地

本遺跡は未調査区である南北に範囲が拡がる可能性が高い。しかし、ＴＲ１と２の間は、かつて沢が入り込んでいたものと考えられ、遺跡が存在する可能性は低い。一方、Ａ地区から、高い密度で遺構が確認されたため、72㎡の発掘調査が必要と判断した。なお、本工事予定地は住宅地に隣接する道路で、安全面及び通行の妨げになることから、長期間開けたままにしておけないため、確認調査と並行して、平成22年11月12日～30日の期間で本発掘調査を実施した。調査結果については、今後改めて報告する予定である。

隣接地にあたるＢ地区の西側半分については、残念ながら既に道路造成のための掘削・削平等により、黒色腐植土層が消失してしまった。一方、ＴＰ８は黒色土が残存し、土坑が１基確認されたが、遺物の出土はない。以上の結果から、現段階での判断は控えることとし、黒色土が残存するＴＰ７・８を結ぶ範囲を工事立会等の必要な範囲と考える。

なお、本遺跡は小字名から「味噌内館下遺跡」としたが、地元住民の話では、遺跡背後の小山は「館コ」と呼ばれており、現在のところ場所が特定されていない「味噌内館」が存在していた可能性が考えられる。

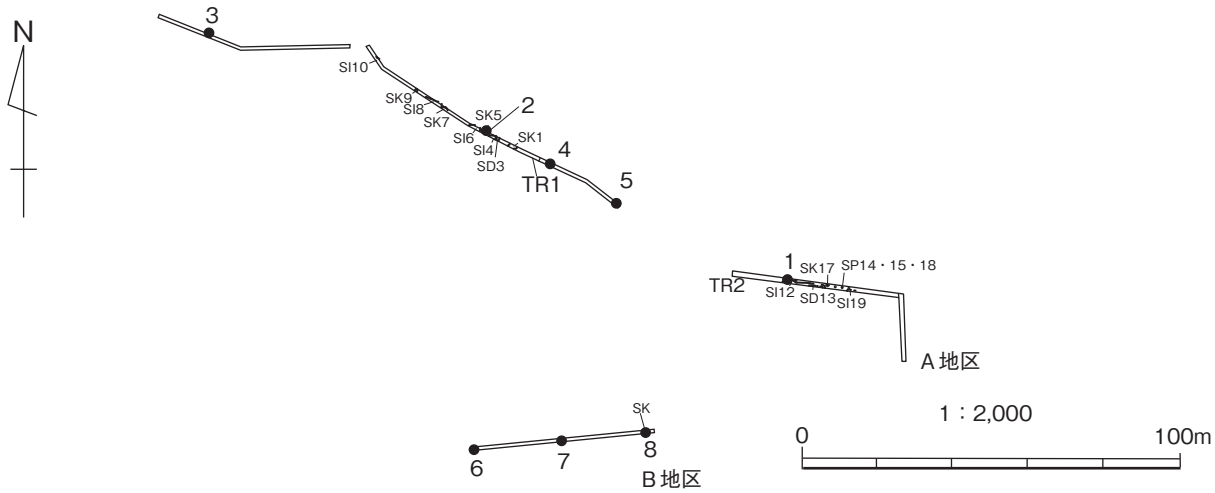
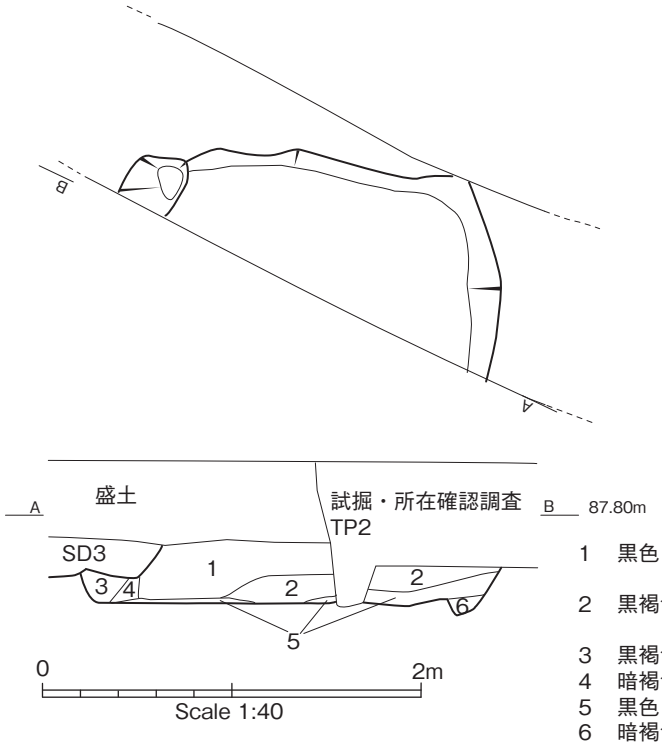


図48　調査位置図



1　黒色　　Ⅳブロック少量、炭化粒少量混入。固く締まる。粘性あり。
2　黒褐色　Ⅳブロック多量、炭化粒少量混入。締まりよし。粘性あり。
3　黒褐色　Ⅳブロック少量混入。締まりよし。粘性あり。
4　暗褐色　Ⅳ。黒色土微量混入。固く締まる。粘性あり。
5　黒色　　締まりあり。粘性強。
6　暗褐色　Ⅳ＞Ⅱ。固く締まる。粘性あり。

図49　竪穴状遺構４

表 18　種別遺構一覧

竪穴状遺構（住居跡含む）	土坑	溝跡	柱穴	計
6	12	4	51	73

表 19　遺構一覧

番　号	位　置	平面形	規　模			長　軸（N－W）
			確認面	底面	深さ	
ＳＩ４	ＴＲ1	方形？	1.96×－	1.6×－	0.32	－

表 20　出土遺物一覧

分類 / 調査区	P			S		合計
	6	8	計	4	計	
ＴＰ１		1	1			1
ＴＲ１	3	20	23	1	1	24
ＴＲ２		40	40	2	2	42
合計	3	61	64	3	3	67

図50　味噌内館下遺跡の位置（1：25,000）

図51　味噌内館下遺跡と周辺の地形（1：2,500）

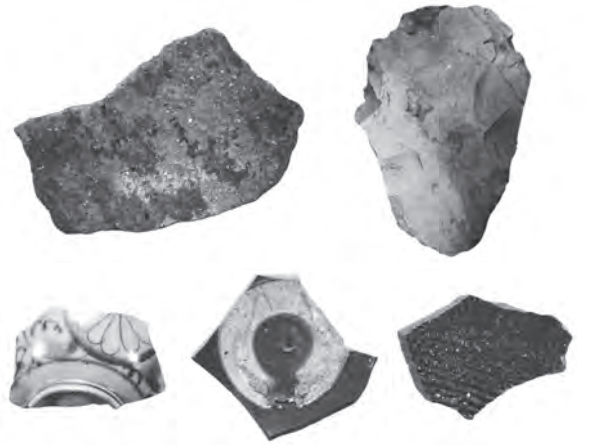
T1西部

T2

T1東部

竪穴遺構4

B地区8



出土遺物

図版27　調査状況と出土遺物

7　八木橋地区①（携帯電話無線基地局）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地南西部に位置する。調査地の地番は比内町八木橋字中岱56番地５で、平成22年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは丘陵を開析する沢の流域に分布する。調査地付近は、三日月湖と考えられるため池が存在しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。調査地内の標高は、海抜65mほどである。

⑵　調査の内容

今回の調査にあたり、任意のトレンチを設定し、人力作業により掘開した。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土・盛土。
Ⅱ層　黒色腐植土層。
Ⅲ層　黒褐色を呈する土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。
Ⅳ層　黄褐色粘土層。基盤層。

⑶　調査の結果

調査地内は、黒色腐植土層が残存するものの、遺構・遺物は確認されなかった。以上の結果から、調査地内には、埋蔵文化財は分布しないため、本発掘調査は不要と判断した。

調査区近景

調査状況

図版28　調査状況

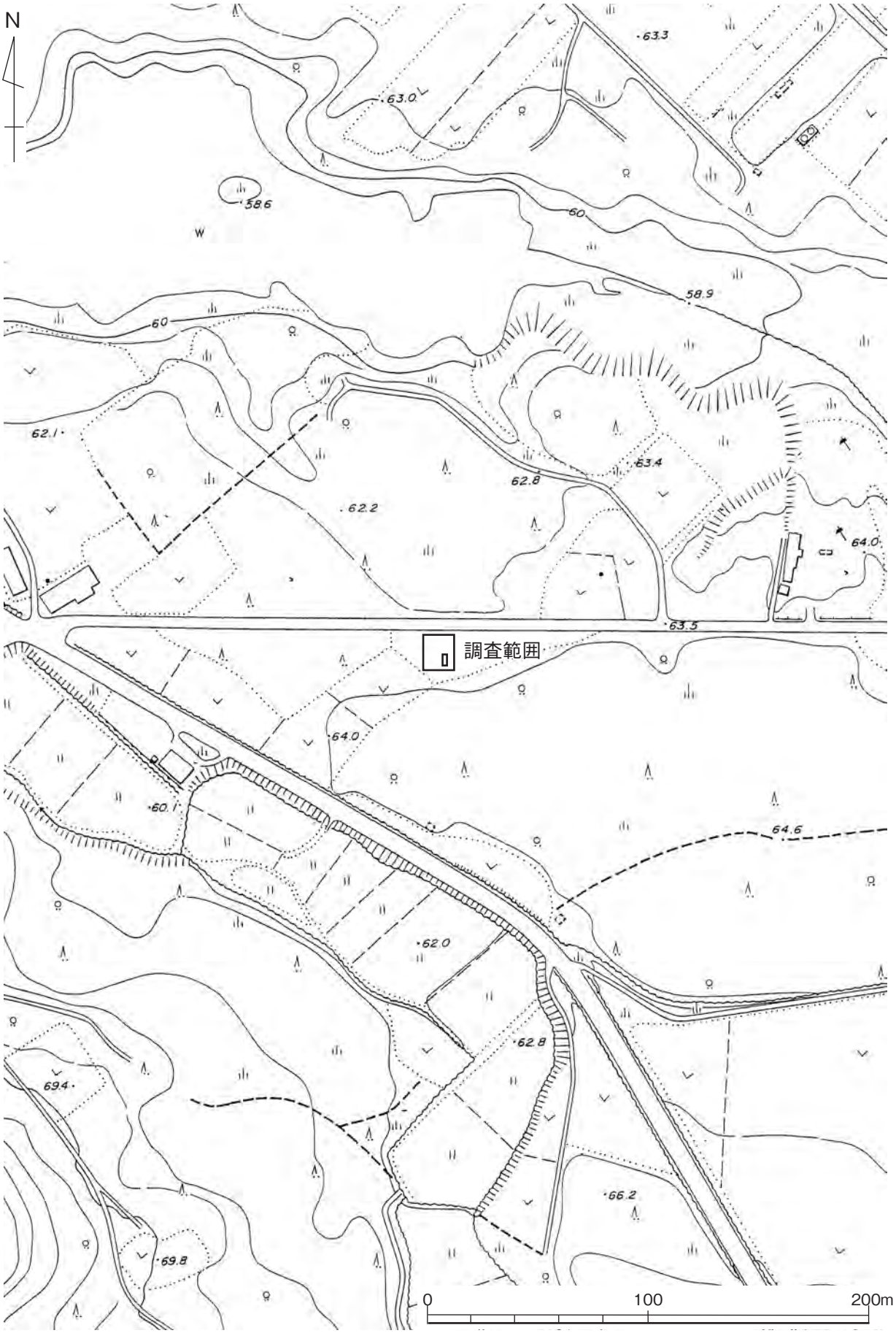


図52　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

８　八木橋地区②（携帯電話無線基地局）

⑴　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地南西部に位置する。調査地の地番は比内町八木橋字水沢口２番地１で、平成22年度に実施した。埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。調査地内の標高は、海抜125mほどである。

⑵　調査の内容

今回の調査にあたり、任意のテストピットを設定し、人力作業により掘開した。工事で掘削される深さの２ｍまで掘り下げたが、盛土が堆積しているだけで、黒色腐植土層、遺構･遺物は確認されなかった。

⑶　調査の結果

調査地内には、埋蔵文化財は分布しないため、本発掘調査は不要と判断した。

調査区近景

調査状況

図版29　調査状況

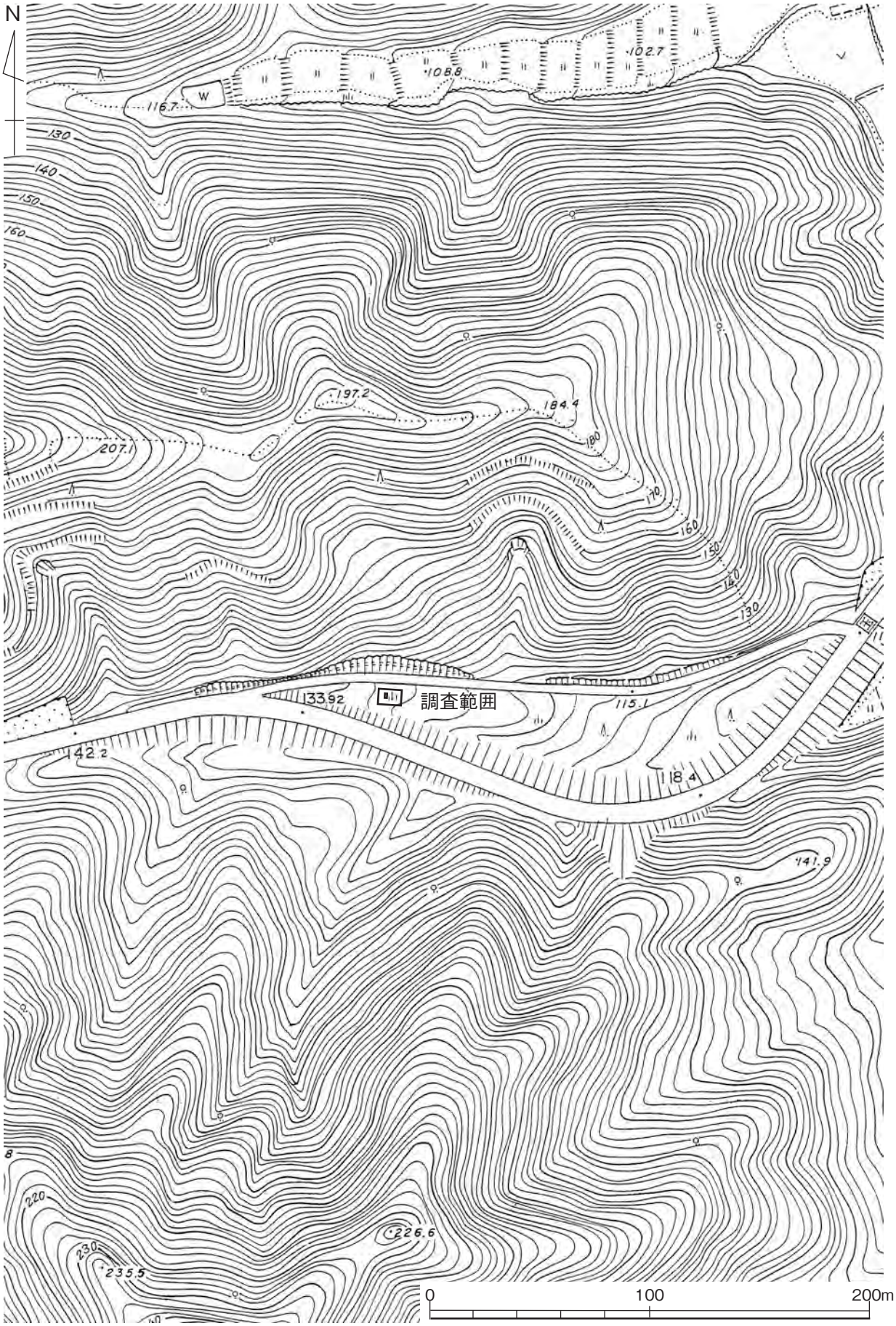


図53　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

第４章　田代地区の調査

１　赤川遺跡隣接地（公共下水道）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

田代地区の多くの遺跡は米代川の支流域に分布する。その川の一つが岩瀬川である。岩瀬川は、ロケット燃料燃焼試験場周辺を源とし、下流域で東西に蛇行し米代川に合流する。

赤川遺跡は、岩瀬川下流域左岸に拡がる。位置は、北緯40度17分36秒、東経140度28分00秒で、標高は海抜55～58mである。遺跡の高位面は田代公民館赤川分館付近まで平坦面となっている。

赤川遺跡は、昭和42・43年度に、大館鳳鳴高校社会部によって一部が調査され、円筒下層ｂ～ｃ式土器の包含層が検出された縄文期の遺跡であることが明らかにされている。調査地区は、赤川遺跡と同台地上の北側隣接地及び東側の台地上である。

⑵　調査の内容

遺跡付近の70mの区間において20m間隔でテストピットを掘開し、埋蔵文化財の有無及び腐植土層の残存状況等について調査した。その他の区間は、包蔵地が所在する可能性がある箇所について40m間隔でテストピットを設定し、調査した。

調査地内の基本層序は、基盤をなす大不動火砕流堆積層と考えられる層の上に腐植土層が堆積する単純なものである。

Ⅰ層　道路の盛土

Ⅱ層　黒色～黒褐色の色調を示す腐植土層である。

Ⅲ層　暗褐色～褐色の色調を示し、Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。

Ⅳ層　褐色～黄褐色の色調を示す粘土層。大不動火砕流堆積層に相当すると考えられる。

Ⅴ層　黄褐色の色調を示す砂層。砂の粒子は細かい。

遺構、遺物はいずれの地区からも確認されなかった。

⑶　調査の結果

調査地内の多くは、土地改良等による削平が褐色粘土層まで達しており、南側及び東側の一部に黒色腐植土層がわずかに残存するだけである。遺構、遺物は確認されなかった。

以上の結果、調査地内が遺跡のエリアに入るとする確証は得られず、発掘調査の必要はないものと判断した。

図54　調査地区と周辺の地形（1：2,500）

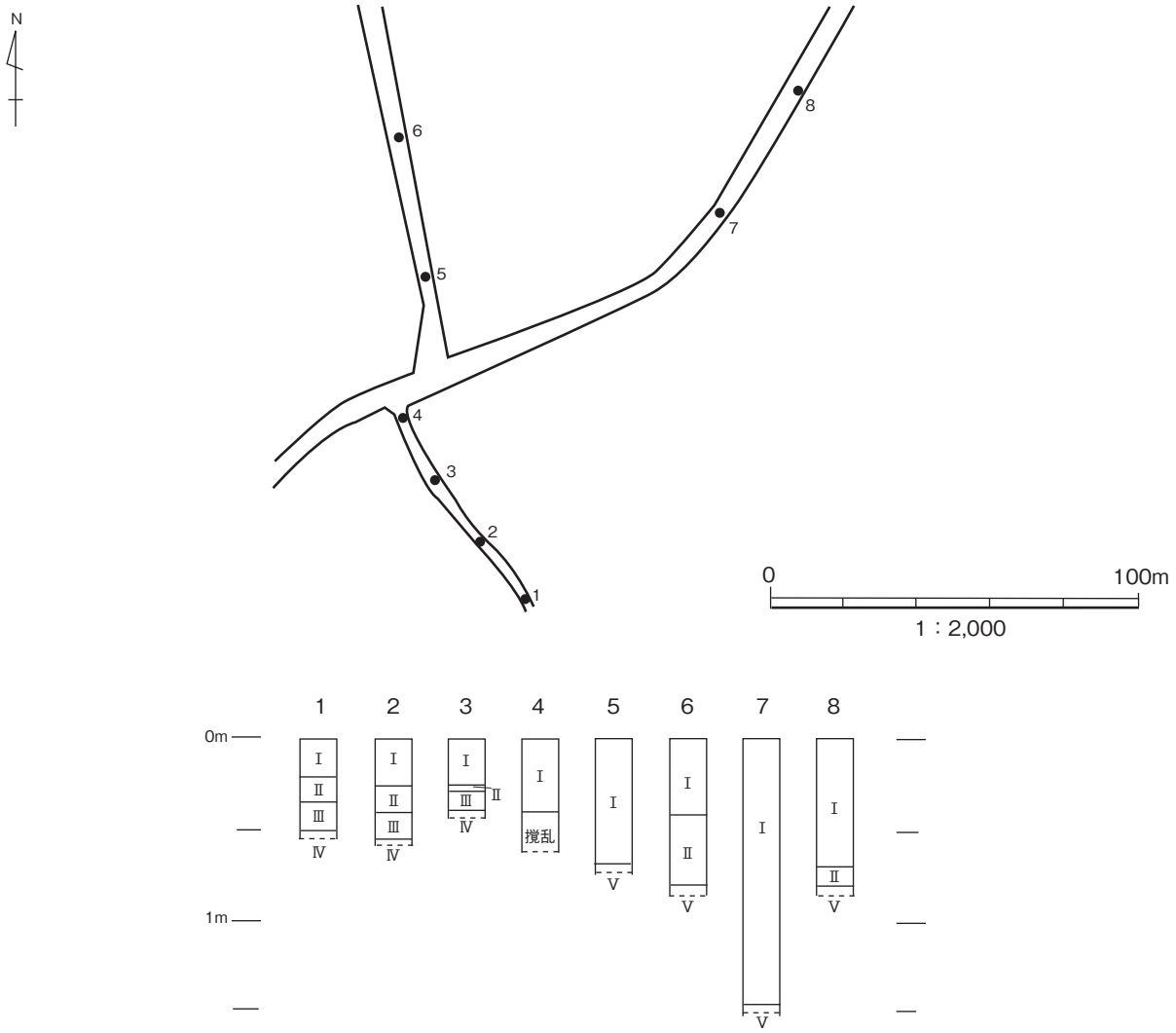


図55　調査位置図

調査区近景

1 調査状況

図版30　調査状況

報　告　書　抄　録

ふ り が な	おおだてしないいせきしょうさいぶんぷちょうさほうこくしょ（2）
書　　名	大館市内遺跡詳細分布調査報告書（2）
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	大館市文化財調査報告書
シリーズ番号	第４集
編 著 者 名	嶋影壮憲
編 集 機 関	大館郷土博物館
所　在　地	〒017-0012　秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森１番地　TEL 0186 - 48 - 2119　FAX 0186 - 48 - 2512
発 行 機 関	大館市教育委員会
所　在　地	〒018-3595　秋田県大館市早口字上野43番地１　TEL 0186 - 43 - 7111　FAX 0186 - 54 - 6100
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘 原因
おうぎたみちしたいせきりんせつち 扇田道下遺跡隣接地	あきたけんおおだてしひがしだい　ちょうめ 秋田県大館市東台3丁目	05204	4-65	40°15′51″	140°34′23″	20080904 ～ 20080905	8	詳細分布調査
おうぎたみちうえいせき 扇田道上遺跡	あきたけんおおだてしひがしだい　ちょうめ 秋田県大館市東台3丁目		4-140	40°15′51″	140°34′33″		8	
かじやしきいせき 鍛冶屋敷遺跡	あきたけんおおだてしぬまだて 秋田県大館市沼館		4-32	40°17′37″	140°32′13″	20080930 ～ 20081031	255	
おうぎたみちしたいせきりんせつち 扇田道下遺跡隣接地	あきたけんおおだてしおうぎたみちした 秋田県大館市扇田道下		4-65	40°15′54″	140°34′19″	20081111 ～ 20081112	30.25	
もとみやちく 本宮地区	あきたけんおおだてしもとみや 秋田県大館市本宮		—	40°14′1″	140°31′44″	20081113 ～ 20081114	20	
しゃかないちく 釈迦内地区	あきたけんおおだてししゃかない 秋田県大館市釈迦内		—	40°18′8″	140°34′17″	20090210	29	
かみだいのちく 上代野地区	あきたけんおおだてしかみだいの 秋田県大館市上代野		—	40°17′37″	140°35′41″	20090424 ～ 20090425	20	
かわぐちじゅうさんもりいせき 川口十三森遺跡	あきたけんおおだてしかわぐち 秋田県大館市川口		4-166	40°16′43″	140°30′19″	20090820 ～ 20090910 ・ 20091211 ～ 20091215	210	
たてはなちく 立花地区	あきたけんおおだてしたてはな 秋田県大館市立花		—	40°16′39″	140°30′3″			
はなおかちく 花岡地区	あきたけんおおだてしはなおかまち 秋田県大館市花岡町		—	40°20′17″	140°32′42″	20100420 ～ 20100421	12	
いもほりざわいせきりんせつち 芋掘沢遺跡隣接地	あきたけんおおだてしもちた　ちょうめ 秋田県大館市餅田3丁目		4-125	40°16′27″	140°31′34″	20100423 ・ 20100428 ・ 20100615	13	
かわぐちだてあと 川口館跡	あきたけんおおだてしかわぐち 秋田県大館市川口		4-42	40°16′39″	140°29′1″	20100706	16	
もちたちく 餅田地区	あきたけんおおだてしもちた　ちょうめ 秋田県大館市餅田１丁目		—	40°16′37″	140°31′31″	20100915	16	
ねげどみちしたいせきりんせつち 根下戸道下遺跡隣接地	あきたけんおおだてしねげどしんまち 秋田県大館市根下戸新町		4-126	40°16′20″	140°31′41″	20100915 ・ 20110203	13	
ふくだてはしげたのいせきりんせつち 福館橋桁野遺跡隣接地	あきたけんおおだてししゃかない 秋田県大館市釈迦内		4-13	40°19′30″	140°34′44″	20101105	8	
やたてはいじあと 矢立廃寺跡	あきたけんおおだてししらさわ 秋田県大館市白沢		4-4	40°21′50″	140°35′26″	20101207 ～ 20101211	43	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘 原因
ながおかじょうあと 長岡城跡	あきたけんおおだてしひないまちおうぎだ 秋田県大館市比内町扇田	05204	12-17	40°13′12″	140°35′1″	20081127 ～ 20081205	125	詳細分布調査
ただごえしたいせき 只越下遺跡	あきたけんおおだてしひないまちみそない 秋田県大館市比内町味噌内		12-48	40°12′1″	140°37′9″	20090825	20	
しらさわみずさわちく 白沢水沢地区	あきたけんおおだてしひないまちしらさわみずさわ 秋田県大館市比内町白沢水沢		—	40°10′37″	140°31′16″	20091015	33	
おつぼさわちく 小坪沢地区	あきたけんおおだてしひないまちおつぼさわ 秋田県大館市比内町小坪沢		—	40°10′51″	140°29′56″	20091016	15	
なかのちく 中野地区	あきたけんおおだてしひないまちなかの 秋田県大館市比内町中野		—	40°11′14″	140°35′26″	20091027 ～ 20091029	60	
みそないたてのしたいせき 味噌内館下遺跡	あきたけんおおだてしひないまちみそない 秋田県大館市比内町味噌内		12-49	40°12′9″	140°36′2″	20100914 ・ 20101109 ～ 20101130 ・ 20101210	101	
やぎはしちく 八木橋地区①	あきたけんおおだてしひないまちやぎはし 秋田県大館市比内町八木橋		—	40°12′59″	140°32′33″	20101126 ～ 20101127	10	
やぎはしちく 八木橋地区②	あきたけんおおだてしひないまちやぎはし 秋田県大館市比内町八木橋		—	40°11′33″	140°31′33″	20101130 ～ 20101202	2	
あかがわいせきりんせつち 赤川遺跡隣接地	あきたけんおおだてしいわせ 秋田県大館市岩瀬		15-3	40°17′51″	140°27′46″	20090729	14	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍛冶屋敷遺跡	集落跡	縄文・平安・中世	竪穴住居跡、土坑、溝跡	縄文土器、石器、土師器、須恵器	
川口十三森遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡、フラスコ状ピット	縄文土器、石器	新発見
川口館跡	館跡	中世	柱穴、土坑、溝跡	陶磁器、鉄製品	
矢立廃寺跡	寺院跡	中世	溝跡	縄文土器、石器	
長岡城跡	城跡	中世	柱穴、堀跡、土坑	弥生土器、陶磁器	
只越下遺跡	集落跡	平安	土坑、焼土、柱穴	土師器	新発見
味噌内館下遺跡	集落跡	平安・近世	竪穴住居跡、竪穴状遺構、柱穴列、土坑、溝跡、	土師器、陶磁器	新発見

要　約	平成20～22年度は22箇所の開発事業予定地内の詳細分布調査、県指定史跡「矢立廃寺跡」の範囲・内容確認調査を実施した。その結果、「川口十三森遺跡」、「只越下遺跡」、「味噌内館下遺跡」を新規遺跡として登録した。 本発掘調査が必要と判断したのは４遺跡である。「味噌内館下遺跡」については本調査を実施した。「鍛冶屋敷遺跡」は事業範囲から外され現地保存されることとなった。「長岡城跡」については引き続き事業者と調整を図っていくこととした。「川口十三森遺跡」については、平成23年度に発掘調査の予定である。

大館市文化財調査報告書第４集

大館市内遺跡詳細分布調査報告書（２）

発 行 日　平成23年3月31日
編　　集　大館郷土博物館
　大館市釈迦内字獅子ヶ森１番地
発　　行　大館市教育委員会
　大館市早口字上野43番地１
印　　刷　株式会社　成文社
　北秋田市鷹巣字上家下24番地